
降雷の魔術師

刹那END

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

降雷の魔術師

【Nコード】

N2993Y

【作者名】

刹那END

【あらすじ】

主人公・高校一年生——斉藤敬治の尊敬していた先輩である谷崎は去年の夏のように今年の夏も魔術委員会の会長を殺しに来ると言う予告をしていた。その為、魔術委員会は谷崎の勢力に対抗すべく、ある事の開始を決定する。

そして、敬治もそれに巻き込まれていく事に……

a—I. Prologue

さいとう けいじ
齊藤敬治が中学生の時、彼の祖父は他界し、祖父の家の整理を余儀なくされた。

整理している最中に敬治はある書物を見つける事となった。

『「魔術」……?』

(そう言えば、うちの学校にも魔術部ってあったな……)

その題名を読み上げた敬治は、家に帰って興味本位にその書物を読んだ。しかし、その書物を読んだ事により、敬治は違う世界へと足を突っ込む事となってしまうのだった。

中学一年の夏。敬治は魔術部を見学し、部長に押され、入部する事となった。

『敬治。魔術は好きか……?』

『人を楽しませるような魔術は好きです……けど、人を傷つけるような魔術は嫌いです』

敬治へと質問をした魔術部OBの男はその答えを聞いて微笑む。

『だから、自分が使う魔術が嫌いなのか?』

『……はい』

OBの男は溜息を吐いて、部室の窓から外を眺めた。

『でも、魔術って使い様によっては人を傷つけられるけど、助ける事も可能なんじゃないのかな? そう考えると、後の方の目的で、敬治は自分の魔術を使えば、いいんじゃないか?』

その言葉を聞いて敬治は自らの魔術を人の役に立つような事で使う事を決めた。

そして、敬治が中学三年生になった夏。彼に衝撃が襲った。

——魔術委員会会長の暗殺未遂事件。

しかし、彼が衝撃を受けたところはそこではなかった。

『な、なんで……？　なんで！？　“谷崎先輩”が！？』

その名は敬治が慕っていた魔術部OBの人間の名前だった。そして、谷崎は『魔術委員会会長の暗殺未遂事件』の首謀者であり、逃亡していた。

（俺が中一だった頃の後から……一体、谷崎先輩に何があったんだ……！？）

信じられないと目を大きく見開き、谷崎に何があったのかを調べる為に敬治は彼の通っていた東坂高校に進学する事を決めた……――

（――夢……かぁ……）

悪い夢を見たような気分の敬治はその夢の内容を思い出せないまま、自らの体をベッドの上から起こして、棚に綺麗に並んだコミックスを眺めた。

（発売日は来週だっけ……？）

うろ覚えな事柄を頭の中で反復させながら、ベッドから起き上がった敬治は身体を伸ばし、視線を外へと向けた。

（……今日は魔術部に見学しに行こう……）

敬治は無事、東坂高校の新生になっっていた。

——“魔術”——

——それは一時期、世間の注目を浴びたものであった。

しかし、魔術は自分の頭の中で理解していないと、使えないものであったのだ。例えば、火の魔術を使うとなると、空気中のどのくらいの量の酸素を消費するのか、その酸素の消費量でどの程度の熱量を発するのか、などを頭の中で理解していなければ、魔術は使う事ができない。

つまりは、扱いが容易ではない。

そして日本は、魔術が世間の注目を浴びた際に、抑制の為、魔術に関する法律を制定した。

その法により、科学の威厳が保たれ、魔術は扱いの難しさと、法律の制定から衰退していった——

「———と言うわけで！ この魔術部は、将来、何の役に立つ事もない事を研究する部活なのである！」

銀色の縁の眼鏡をかけ、細い眼と細い顔の形をし、身長一七八センチくらいの東坂高校の魔術部部长——藤井亮は、そう言いながら、両手を脇腹に置いて、仰け反り返る様な姿勢をとる。

そんな部長を前にして、ポカンとした表情を浮かべているのは、魔術部に見学しに来た齊藤敬治であった。

（な……何なんだ……！？ この人たちは！？）

眼が丸く、身長一七二センチくらいの頭からアンテナを一本伸ばしている敬治は自らが今、置かれている状況に困惑する。

敬治は魔術部の部室に入った途端、部室にいた部長である藤井の掛け声と共にその部室にいたもう一人の人物によって、縄で拘束された拳句に、部長の言葉はそんな敬治にお構いなく、始められたのだった。

「こ……これは……!? どう言う事なんですか……?」

「部長。見学しに来てくれた新入生が、ガチでひいてますよ。それに他の部活も大して、将来に何の役にも立たないですよ」

未だ、その身体を堂々と仰け反らせている部長に対して、その横にいた人物――江藤清二は溜息を吐いてみせた。

丸い顔立ちに穏やかな目つきの江藤は身長一七三センチくらいで、魔術部の副部長を務めおり、先程、部長の指示に従って、敬治を拘束した人物であった。

「と言うか、魔術の説明よりもまずは、自らの“腐った名前”を言うのが先だと思えますけど? 部長」

「腐った!? 今、絶対『腐った名前』って言ったよねっ!?

……ていうか、部長って呼んで、敬語使ってるけど、清二君は全然、俺の事敬う気なんてさらさら無いよね……?」

声のトーンを段々と落として、恐る恐る尋ねた部長に対して、副部長は吹き出した。

「えっ? 今頃?」

と小声で呟いた副部長であったが、真横にいるため、部長には丸聞こえ。床に膝を着いて、四つん這いに項垂れる部長を他所に副部長は目の前の敬治に対して、話を進めていく。

「今日は見学しに来てくれてありがとう。じゃあ、まずはこっちから自己紹介していきますね。この床に項垂れてる人が魔術部の“一応”部長の藤井さん。三年生はこの人しかいないから、二年生である僕、江藤清二が副部長を勤めてます。

……あと、部員は他に四人いるけど……今日はサボり……みたい

ですね」

「サボりって……？」

「ああ。気にしないでいいよ。この魔術部ではザラだから大丈夫です」

「いや、ザラって……この部活、ホントにちゃんと、成り立ってるんですか……？」

江藤を少し睨みつけながら疑問に思った事を口にする敬治は魔術部に入らない方向へと、心は揺らぎ始め、それが行動となって現れようとしたのだが、足も手も椅子に拘束されていたため、それが叶う事はなかった。

そんな動いた足に掴みかかった部長は笑いながら、四つん這いの状態で敬治を見た。

「ハハハッ！ 計六人の部活の四人がサボり……崩壊寸前のこの部にのこのことやってきた獲物を……簡単に取り逃がしたりはしないさっ！」

「よ、四人もサボってるんですか！？」

（崩壊寸前……くそ！ 谷崎先輩の情報を得るためとは言え……入る気にならない……！）

悔しい表情を浮かべる敬治に対して、部長は企み笑いを浮かべ、

江藤は微笑んでみせる。

「まあ、そう言う事で。君の名前は？」

江藤のその質問と共に立ち上がる部長。二人を眺めながら、敬治は自らの名前を告げる。

「斉藤敬治です……」

「斉藤敬治君ね。今日は無理やり拘束しちゃったのを謝らせてもらうよ。すまなかった。敬治君は魔術は初心者？」

「いえ。魔術は使えます」

と淡々と答えた敬治に対して、二人はその目を大きく見開き、光らせ、喜んだ。

「ホント！？」 経験者は大歓迎だよ！ けど、今日は体育館使えな

いしなあ……そして、特にやる事もない……」

(やる事ないって、ホントに崩壊寸前だな……魔術部……)
はかな
儚く消えていくものに哀れみの眼を向ける敬治。

「明日！ 明日また、この部室に来てくれるかい？」

部長のその尋ね掛けに対して、敬治は頷いてみせた。

(行く気は無いけど……頷かなかったら縄外して貰えないしな……)
「やった！ じゃあ、明日！ また、ここで！」

と言って、『部長の席』と書かれた紙が張られている椅子に座る
部長と何かの作業をし始める江藤。

それを数秒眺めた敬治は痺れを切らして、言葉を放った。

「この縄を……早く、外してください！！」

「あっ？ ごめん、忘れてた」

と言って、縄を解きに敬治の元へと近寄った部長は縄を解くのに
かなり苦戦しているようであつた。

「あの……早くしてもらえませんか？」

「いや！ 早くしてるんだって！ でも解け難いんだよ！！」

(逆ギレ……キレたいのはこっちなんですけど……？)

段々と不満が溜まっていく中、江藤がはさみを取り出して、部長
を退かせ、縄を切った。

「あるなら早く使ってください！？」

「いや、二人が段々とイライラした表情になってくのが面白くって
……つい、ね」

「そんな『つい』はありません！ 帰ります！」

足音を「どすどす」と立てながら、敬治は魔術部部室を後にした。



次の日

(魔術部……)

放課後の賑わう廊下を歩いている新入生——斉藤敬治は溜息を吐いてみせた。

（何でこんなに足が重いのか……って分かるきってるんだけど……）

高校でも魔術部に入ろうか、入るまいか悩んでいた敬治の頭に昨日の出来事が思い出される。入った途端に拘束された挙句に一方的に説明され、部に入るように強要され、終いには逆ギレしまされたその出来事。そして、六人中サボりが四人の崩壊寸前の魔術部。

（問題だらけの部に入りたくなくても、情報を得たい……入らないと！）

拳を強く握り締めながら、魔術部の部室の前に来た敬治はその扉を四回ノックした。しかし、応答はない。

（まさか……誰もいない……？）

ゆっくりと魔術部部室の扉を開けて、中を窺った敬治の眼には一人いない部室の光景が広がっていた。

（全員サボり……って事はないよね……？）

顔を引きつらせる敬治は本棚に置かれたある物に目が入った。

（部室にコミックスなんて置いてもいいのか……）

本棚に近寄った敬治はそこに置かれたコミックスを見ながら苦笑い。そして、その横にあった物に視線を奪われた。

「何これ……？ ルービックキューブ？」

そう言って、敬治が視線を奪われた先には、ガラスボックスに入れたルービックキューブのように二十六個の正方形が固まって、一つの正方形を作っているキューブがあった。しかし、普通のルービックキューブと異なるのはその“色”であった。

敬治の目の前のルービックキューブは全ての面が金色に輝いていたのだった。

（綺麗だ……）

そう見とれていた敬治の横にいつの間にか一人の人物の姿があり、不審そうに彼の事をじっと見つめて、立っていた。

「君……誰……？」

横から唐突に聞こえてきたその声に振り向いた敬治の目に映る女子生徒。敬治はその人物が、自分が気付かないうちに、この部室にいる事に驚きすぎて、部室の床に尻餅を着いて倒れた。

（い、いつの間にこの人は……！？ この部屋に入ってきた！？）

「いや、びっくりするのはこっちなんだけど……部室に入ったら、見知らぬ男子生徒が“部長のキューブ”見つめててさあ……」

敬治を驚かせた女子生徒は肩よりも少し伸びた髪の手先である頭を掻いて、困った様子を見せる。顔の形はスツとしていて、眼は細くもないし、大きくもない。可愛いと言うよりは、綺麗と言う言葉の方が似合う、そんな女子生徒である彼女は身長一六一センチと女性にしては高い方だ。

（部長のキューブ……？ いや、それよりも誤解を解かないと……）

「えっ……と、俺はその……昨日、部を見学に来て、今日、部室に來いって言われたから……部室に來ただけで……」

「ああ！ そう言う事！ 部活入ろうとしてんのね。私は昨日いなかったけど、この魔術部に入ってる二年の神津沙智こうず さち。入るんなら、よろしく」

そう言っ、神津によってのばされる右手を手にとって、敬治は立ち上がる。

「ありがとうございます。と宜しく願います……俺は、斉藤敬治って言います……あの、『部長のキューブ』ってどういう事ですか……？」

「部長は変なものを集めてくるのが趣味なの。だから、時々、あんな物をどこからか持ってきては、部室に飾ったりするのよ」

「そうなんですか」

敬治は納得した表情を神津に見せた。

すると、その瞬間、部室の扉が勢いよく開かれ、一人の人物が部室に顔を見せた。

「敬治君！ お待たせしてしまって、すまないね！ っと沙智ちゃんはず昨日、來なかった分をちゃんと、仕事で返してもらおうから！」

銀縁の眼鏡をかけた部長は、部室に入って来て早々、大きな声を張り上げ、敬治の手を掴んだ。

「さて！ 今日君の魔術の実力を見せてもらおうとしようか！」

そう言って、敬治の手を引いたまま、部室を後にしようとする部長だったが、敬治はその場を動こうとはせず、部長も止まる破目になった。

「なんだよ……出鼻を挫^{くじ}かないでくれよ」

「すみません。ちょっと、質問したい事があるんですけど……」

敬治の言葉に耳を傾けようとする部長の様子を見て、敬治は質問を紡ぎ出す。

「この部活って……毎日、何やってるんですか？ 中学の時の魔術部では、魔術の勉強とかしかなかったんですけど？」

「中学の時、魔術部入ってたんだ！ へえ……でも、この高校の魔術部は勉強がメインではないね……僕らは毎日――」

「――遊んでる」

「えっ！？」

部長の言葉を遮って、続きを述べた神津の言葉に対して、敬治は声を漏らし、部長は睨みつけた。

「『遊んでる』とは失礼な！」

「いや、遊んでるでしょ……だから、皆、サボるんだよ。斉藤君も今日、やる事を見てたら何となく、分かるよ」

（遊んでる……こんな部活が谷崎先輩に影響を……？）

呆れた顔でそう言った神津の言葉を聞きながら、敬治は表面では苦笑いを浮かべた。

「じゃあ、体育館に行こうか！」

部長のその声に呼応して、三人は部室を後にしていった。

α—III. 籠球で魔術？

体育館

「ダムダム」というボールを床につく音が鳴り響くのと同時に、体育館のワックスの塗られた床に靴が接して、「キュッキュッ」と音を発した。その後、どちらの音も止まり、手からボールが放たれる音が鳴り響く。次の瞬間に紐にボールの触れる「シュッ」という音が体育館全体を包み込んだ。

そう。これらの音は、バスケットボールを床につく——ドリブルしながら走り、スリーポイントラインの中に入った瞬間にジャンプシュートを放ち、ゴールに入るまでの一連の動作から齎もたらされる音であつた。

目を瞑って聞いていれば、バスケ部が練習をしている風景を思い浮かべる音であつたが、それを実際に行っていたのは“魔術部”の副部長である江藤だつた。

そんな体育館に三人は足を踏み入れる。それと同時に江藤は入り口にいる三人の方へと振り向いた。

「おっ！ 部長！ 早くしないと、バスケ部が部長をリンチするそうですよ！？」

Tシャツに膝までの半ズボンという完全に練習着姿の副部長がボールを両手に抱えて、部長に向けて叫んだ。

「はいはい、分かつてるってー！」

と自らの鞆の中から江藤と同様の練習着を取り出す部長の様子を見て、大体の予想はついていたものの敬治は表情を引きつらせながら尋ねかける。

「あのー……今から何やるつもりなんですか……？」

その質問に部長は笑顔で答えた。

「見て分かるように、バスケットボールやるんだよ！ 魔術って、

科学からすれば、あまり意味ない研究だからね。こうやって、他の部活の手伝いしないと、部費が出ないんだ。じゃあ、敬治君は体操着に着替えてくれるかな？ 今日、身体測定あったのはちゃんと、知ってるんだよー」

「そう、なんですか……じゃなくて！」

「おお！ 一人でツッコんだ」

「魔術とバスケのどこが関係してるんですか！？ こんなので実力なんて見れる訳ないでしょ！！」

叫んだ敬治の様子を見て、部長は笑いながら、対応する。

「まあ、落ち着きなあってー。試合が始まったら、すぐわかる事だからさー」

軽く告げる部長を睨みながら、敬治は神津こうすの言っていた言葉を思いうす。

（ホントに遊んでるだけじゃないのかよ……）

敬治は部長の指示に従って、体育館にあるバスケ部の部室で体操着に着替え、体育館シューズを履いた。

東坂高校の男子バスケットボール部は弱小で、今、二・三年生合わせて七名と、五対五をするには人数が足りない。そのため、よく魔術部の力を借りて、魔術部を相手に練習しているのであった。

それが可能なのは、江藤が中学生の時、某強豪校のバスケ部に所属し、そこでレギュラーを勝ち取るほどの実力の持ち主だからだろう。他の二人と敬治は、てんで初心者である。

部長が部室から出て行くのと同時に、敬治も同様に体育館へと再度、足を踏み入れた。

すると、そこにはもう試合の準備ができていると言わんばかりに、センターラインと平行にバスケ部の五人が並んでいた。

全員、一七〇センチ以上の身長だが、一八〇センチを越える身長の者はいない。

それに対して、魔術部の四人も同様に一八〇センチを越える身長の者はおらず、ましてや初心者が三人。それ加えて――

「こっちの人数は四人なんですけど、一人はバスケ部の誰かに入ってもらうんですか？」

疑問に思った敬治が部長に対して質問すると、部長は首を横に振ってみせる。

「いや。この四人でバスケ部の五人と試合するよ。まあ、清二君は中学の時バスケやってたから、二人分くらいの戦力になるし、大丈夫だよ」

と、部長は答えてみせた。

——五対四。圧倒的不利な状況にも拘らず、何度も試合相手を頼んできている理由は、やはり、副部長である江藤の実力がよほどのものであるからであろう。

（バスケで魔術の実力なんて……見れるわけないだろ……）

そう思う敬治であったが、その思いも試合が始まるのと同時に打ち碎かれる事となるのであった。

「さあ、とっとと始めてしましましょうよ。三人とも」

と江藤が三人を呼んで、バスケ部の五人と向かい合うように魔術部の三人と敬治は並んだ。

（やっぱり、バスケ部って言う雰囲気があるな……それに比べてこっちは……）

自分の右横に並んだ三人を横目で見た敬治は小さく溜息を吐いた。（どう見ても、運動するようなガラじゃない……副部長以外……）

バスケ部の残りの部員二人が試合の審判で、タイマーと得点はマネージャーが務めるようだった。

「では、試合を始めます。礼！」

『お願いします』

敬治の気持ちとは裏腹に、挨拶を終えた魔術部とバスケ部は魔術部部长とバスケ部の部長だけが真ん中の線——センターラインの円の中に入り、その他の人物は円の周りで構える。

「勝ったら、江藤をうちの部活にもらうぜ？」

「こっちは負けないから、別にいいけど……？」

バスケット部長による強い眼差しを華麗に受け流しながら、魔術部部長は自らの眼鏡を中指で押し上げた。その瞬間に、審判によって、真上へと投げられたボール。それが最高地点に達し、落下し始めた時に二人は同時に飛び上がった。先にボールに手を触れたのはバスケット部長であった。

そのまま、バスケット部長がボールを自らの後ろへと弾こうとした時、魔術部部長はその口をにやりと歪めて、呟いた。

「Nidw^{ニドゥ}」

その呟きと共に魔術部部長が自らの手をボールを後方へと弾くように動かした瞬間、魔術部部長がボールに触れていないのにも拘らずに、その動きと呼応するかのようにボールはバスケット部長の手から零れ——魔術部部長の後方へと飛んだ。

ワンバウンドしたボールは魔術部部長の後ろで構えていた江藤の手に収まった。

バスケット部の三人はボールが真上に上げられた瞬間に後ろに下がって、コートの中分——ハーフコートからディフェンスをする気なのだろう。しかし、バスケット部の一人は江藤のディフェンスにうつと江藤の方へと走り出していた。

だが、もう既に遅かった。

敬治がオフENSEをしようと、バスケット部の部員が構えている方向へと走り出そうとした時、敬治の目に江藤の姿が映った。そして、江藤の意外な行動に思わず声を漏らしてしまう。

「えっ？」

敬治が捉えたのは、その場所からシュート体勢に入っている江藤の姿であった。

（こんなところから、シュート!?）

そう。まだ、セクターラインも越えていないところから、江藤は自らの膝を曲げて、額にボールを持ってきていた。そして、江藤も先の部長と同様に何かを呟くのだった。

「If^{アイフ}er」

真上に飛んだ江藤は手首の力だけでボールを押し出す。その瞬間、江藤の掌から光と何かが爆発したような「ボンッ」と言う音が鳴り響き、ボールは江藤の手から離れ、大きな弧を描いた。

その場にいた全員が弧を描くボールを目で追いかけ、全員の目が捉えたのはリングに当たる事無く、網状の紐を通り抜けるボールの姿であった。

「シュパッ」と言う音と共に網状の紐を通り抜けたボールは体育館の床に落ち、その音によって茫然としていた敬治も我を取り戻した。

（凄い……距離、空気抵抗、角度、強さ……一体、どれだけの事を計算したって言うんだ……？）

敬治は心から江藤を凄いと思った。

江藤が、発動した魔術は火の魔術。

まず、魔術を発動するためには二つ、欠かせないものがある。一つ目は理解。即ち、ゴールまでの距離を推測し、どのくらいの熱量を放出すればいいのかを目で見て、頭で計算しなくてはならない。

それを自らの感覚でやる者も多数存在するが、その者たちは博打と経験によって培われたものの二つに分けられる。しかし、江藤はちゃんと、目で見て頭の中で計算して、魔術を発動していた（魔術部は何度もバスケット部と試合をやって、江藤は何度も使っているの少しは感覚も含まれる）。

そして、二つ目に魔術を発動するために欠かせないのは、“詠唱”であった。詠唱は魔術師たちの間ではArai^{アライ}と称されており、魔術の種類によって、Araiは異なり、強さもまた、異なる。

その為、覚えたAraiの数で魔術の勝負が決まる事も多々ある。

「さて、敬治君。こんな事でいちいち驚いてちゃあキリが無いよ！

ディフェンスディフェンス！」

「は、はい！」

晴れて、魔術部チームに「3」と言う数字が刻まれる。

バスケット部は江藤のシュートを何度も見ているため、驚く事は無く、

その分、攻守の切り替えも早かった。

すぐにセンターラインを超えて、魔術部の死守しなければならぬゴールのあるハーフコートにまで迫ってきたバスケット部の五人はいつもの自分たちのペースでボールを回していき、パスしたら他の場所へと移動し、またパスしたら他の場所へと移動する事を繰り返す。当然、誰のディフェンスにつくのか相談していない魔術部の四人は動く事無く、固まっている。

そのため、スリーポイントのラインからシュートを打たれるのは明白であった。

バスケット部の部長により放たれたボールは弧を描いて、ゴールに入る。

「遠くから打とうが、同じ三点だろう？」

笑みを浮かべて、江藤の方を見ながら告げたバスケット部長に対して、江藤は視線を向ける事無く、

「僕はリングに当たらなかったけど、田尻たじりさんは当たりましたーっと言う事で、僕の方が綺麗に入りました」

とバスケット部の部長である田尻の名と共にそう告げて、端の線――バックラインでボールを持った魔術部部長からパスをもらう。

先の発言を挑戦とみなした田尻は左足を軸にして後ろへと振り返る江藤の前に立ち塞がる。

「ダブルチームなんて事はしねえ……正々堂々！俺が相手してやる！」

ダブルチームとは一人に二人のディフェンスがつく事である。普通はダブルチームをして、ディフェンスを抜けなくなったオフエンスの最後の選択肢であるパスを阻止して、ボールを奪うのだが、元々、魔術部チームには四人しかいないので、江藤に二人ついた方が良いのであった。

しかし、田尻のプライドがそれを許さなかった。

「何としても止めてやんよ！」

と、決意を述べた田尻を他所よそに江藤は部長に告げる。

「部長。ちゃんとディフェンスしないと、多分、僕たち負けますよ？」

「ええ！？ それってヤバイじゃないか！？ 沙智ちゃん！ 早く、

“結界”張って！」

「はいはい。分かりました」

といって、腰を屈めながら、自分たちが守らないといけないゴールのハーフコートの床に指で何かを描き始めるこうず神津。

それに対して、部長と敬治は江藤に助太刀するべく、バスケット部の四人がディフェンスの為、構えている方向へと走った。

その瞬間、江藤は右足を前に突き出して、ボールをつくふりをして、その右足を田尻の右足の方へと出した。

自分の左に行こうとするのをフェイクだと読んでいた田尻は左に動いた後、すぐにその重心を右へと切り替えした。しかし————それもフェイクであった。

江藤は再度、右足を田尻の左足の方へと向けて、ボールについて、田尻を一瞬にして抜き去った。

「くそ！ パスは無い！ 四人でかかれ！！」

さっきまでの意気込みやプライドはどこへ行ったのか、怒りを露にした田尻がその声を荒げるのと同時にバスケット部の四人は江藤の前に立ち塞がる。だが、江藤はその四人の間を器用にすり抜け、レイアップシュートを決めるのだった。

すぐにオフENSEへと切り替えるバスケットチームはまた、さっきと同じようにパスを出してから他の場所へと移動して攪乱させる作戦を実行しようとしたのだが、

「いてッ！！」

と、スリーポイントラインからパスを出して、移動しようとしたバスケット部の一人が透明な壁のようなものに阻まれ、ボールを置いてけぼりにして、後ろへと倒れこんだ。

「な、なんだ！？」

「今日は運動神経が良い“あの二人”もサボってるし、結界を張ら

せてもらったのよ。あなたたちがスリーポイントラインより中には入れない結界を、ね」

そう説明した神津は「にこり」と微笑んで見せた。そんな神津の足下には自らが指で描いた円や文字が光って、浮き出てきていた。

「卑怯だぞ！ 藤井！」

「卑怯？ 初心者なんだから、これくらいのハンデをくれてもいいじゃないか！」

「ハッハッハッ！」と笑う部長を苦しい表情をしながら、睨みつける田尻。

「くそ！ それでも、スリーは打てる！ 絶対勝つぞ！」

そう叫んだ瞬間に置いてけぼりにされたボールを手にした江藤は田尻を抜き去り、スリーポイントラインからシュートを放ち、ゴールを決めた。

「無駄口叩いてる暇はないと思いますけどね。また、僕一人にやられますよ？ 田尻部長」

試合はそのまま、スリーポイントラインよりも外でしかシュートを打てないバスケット部チームが魔術部チームのエースである江藤一人に押され、十分間の試合はもう、一分ほどしか残ってはいない。

（本当は分かりたくなかったんだけど、「サボる」って言う理由が分かって気がする……この部って魔術なんて関係なく——）

「きつい……」と肩で息をしている敬治が小声で呟くのと共に、魔術部チームがバスケットチームに十点の差をつけて勝っている状況の中、部長が一分間のタイムアウトを告げた。

（——ただ、遊んでるだけじゃなかよおおお!!）

心中でそう叫んだ敬治を他所^{よそ}に部長は江藤の方へと目を向ける。

「清二君！ このバスケの試合の本来の目的はなんだ!？」

集まった四人は円を作り、部長は声を張り上げた。

「この頃、運動不足だったから、これを機にちゃんと運動をしよ——」

と答えを紡いでいた江藤の言葉を遮るように部長は言葉を放つ。

「違う！ 新入生で、魔術が使えるという敬治君の実力を見せてもらうためだろう！」

「いや、どうせバスケなんかで魔術の実力なんて見れませんよ。早く気付いてください。（クソ）部長」

「ちよっと待って！ 今、『クソ』って付けた!？ 『クソ』って!？」

「つけてないですよ。（クソ）」

「もう、部長抜けちゃってるよ……」と項垂れる部長を無視しながら、江藤は敬治の方に目を向けた。

「敬治君。遠慮せずに魔術使っていいんですよ？」

「いや、でも……俺のはバスケとかで使えるような魔術ではないんで……」

「大丈夫ですよ。バスケ部の連中なんて、どうせ初戦敗退するんですから、怪我しても問題ないですよ」

いや、それよりも怪我させたりしたら、“魔術法”に触れるんですけど……!?

敬治が心中でツツコミながら溜息を吐いた瞬間にタイムアウトの一分間は終わりを告げ、試合が再開される事となった。

“魔術法”とは、魔術抑制の為に作られた法律の事である。魔術法の中には、勿論、魔術で人を傷つける行為などを禁止する項目もあり、魔術法を犯したものは、全ての魔術師を管理している魔術委員会が、罰則を与える事となっている。

“そして、去年、その法を犯した者が魔術部にもいたのだった”

「何でもいいですから、魔術使って!」

「わ、分かり……ました……」

段々と声を小さくしながら、敬治は眼を閉じた。

(“この学校に入ってきた目的”を忘れてはいけない……そして、人を傷つけない程度に……)

そう自分に言い聞かせながら、敬治は眼を開け、自らの右手を前に突き出す。

敬治の突き出した右手の先では、バスケ部の四人がディフェンスをしようと構えていた。

そんな敬治を後ろから眺めている部長と神津。江藤は敬治を見ながらも、田尻に取られないようにドリブルしていた。

そして、敬治は自らの魔術のArai^{アライ}を告げた。

「R i y e l e c t i c t」
ライヤレクティクト

その瞬間、敬治の右手は激しく光を発し、「ビリビリ」と言う音と共に小さな稲妻がバスケ部の四人へと迫り、直撃した。そして、四人のバスケ部員たちはコート^{コート}の床に倒れる。

その場にいた全員が、大きくその目を見開きながら、バスケの試

合中だということも忘れて、コート上に佇んでいる敬治を眺めている。

「敬治君……君は……電撃の魔術が使えるの……？」

辛うじて、そう発言した部長に対して、敬治は頷いて見せた。

「はい。それに、電撃の魔術を使う人が少ないのも知ってます……すみませんでした！ 電気を浴びせちゃって……」

と起き上がっていく四人のバスケット部員たちに謝る敬治。それに対して、「いいよ……こっちも試合してもらってるし……」と全員が微笑みながら、答えていた。

「ちよっと、心配だから、保健室に連れて行ってくる……」

と田尻がバスケット部の四人を保健室へと連れて行ったことにより、試合は続行不可能となってしまった。

「……じゃあ、俺たちは着替えて退散するのでしょうか……？」

部長のその言葉に三人は頷いて、バスケット部の部室で制服に着替えさせて貰い、体育館を後にした。



「それにしても……凄いよ！ 敬治君！」

と、魔術部の部室へと向かう途中で部長は目をキラキラと輝かせながら、立ち止まって、敬治の両肩に手を置いた。

「そして、そんな優秀な人材である君が魔術部に入ってくれるって言うんだから、もう……」

「感動のあまり、泣きそうだよ」と顔を俯かせ、右腕を両目につける部長。

その部長をスルーしながら、神津と江藤は敬治を連れて、廊下を進んでいく。

「えっ！？ ちょっと、扱い方が俺だけヒドくない！？」

右腕を両目から退け、自分の目の前に誰もいない光景を見た部長は先を行く三人を追いかける。しかし、次の瞬間に部長は自らの足

を止めて、後ろを振り返った。

「……誰かに……つけられてる……?」

「厨二病患者みたいな事、言うのやめてもらえませんか? 魔術部が厨二病みたいに思われるので」

「ヒドッ!? てか、立ち止まるくらいしてよ、清二君!!」

と、三人の姿を追った時にはもう、三人は魔術部部室の前に着いており、ドアを開けて、部室に入っていた。

部室に入ると、一番最初に目に入るのが、大きな長方形の机で長い辺にパイプ椅子が二つずつ入れられている。そして、その先には部長専用の机があり、左側には棚。右側には小さなホワイトボード以外、何も存在していない。

三人はパイプ椅子に座り、後から来た部長も部長専用の机には向かわずに、パイプ椅子にその腰を下ろした。

「で、魔術部について何か質問ある?」

「いつも、今日みたいな事してるんですか……?」

「分かったでしょ? 遊んでるって言った意味が」

呆れた表情で言う神津の言葉に賛同した敬治と江藤は頷く。

「いや、遊んでるわけじゃない! ちゃんと、バスケットを手伝った! 断じて、遊びではない!!」そして、敬治君! 質問に誠意が見られないよ! もっと、こう『あのジャンプボールの時は何やってんですか?』みたいな質問は無いのかね!？」

机を「バンッ」と両手で叩きながら、敬治の顔に自らの顔を近づける部長。耐えかねた敬治はその質問を繰り返した。

「……『あのジャンプボールの時に何やったんですか?』」

「よくぞ聞いてくれました! あの時、俺は風の魔術の A r a i を唱えて、ボールを風で動かしたんだよ!」

(いや……それくらい分かってるよ……)

溜息を吐きそうな呆れた表情をする敬治。その表情を見て、「ここが潮時かな?」と思った部長は立ち上がって、はきはきと告げる。

「じゃあ、今日の部活はお終いつて事で! 敬治君も帰っていいよ

」

その言葉と同時にゆっくりと立ち上がった敬治は部室の扉の方へと向かい、その扉を開けた。

「入部届！　ちゃんと担任の先生にサインもらって、出しといてね？」

「分かりました。さようなら」

「じゃあねー」

「バイバイ」

「さよならー」

魔術部部室から出て行った敬治。それから数秒してから部長は溜息混じりに自らの机の椅子に座って、二人に告げる。

「まさか、“あいつ”と一緒に、電撃の魔術が使えるとはねえ……なんか、去年の事思い出しちゃったなあ……」

苦笑する部長に対して、真剣な顔の江藤は心配の色を見せながら、尋ねる。

“去年の夏みたいなさ”は……もう、起きないですよね……？」

「いいや。多分、“あいつ”は今年も事を起こす。けど——去年みたいに好き勝手にはさせねえから心配すんな！」

江藤と神津に向けて微笑んだ部長だったが、二人は不安そうな顔色を濃くした。

「好き勝手にさせない？　冗談でしょ？」

「そうですよ。（クソ）部長。今度は——」

二人は部長へと真剣な眼差しを向けながら、言い放つ。

「——僕たちも一緒に戦いますよ」

◇

次の日

（なんか……俺、疲れてる……？）

自転車のペダルを漕ぎながら、「はぁー」と溜息を吐いた敬治は信号が赤になったため、ブレーキをかけた。

(でも……“谷崎先輩と同じ、電撃の魔術”を使う俺を見て、あの三人も驚きとは違うような表情してた……やっぱり、あの三人は谷崎先輩がどうして、会長を暗殺するような事をしたのか知ってる……)

にやりと自らの口元を歪める敬治だったが、すぐにその口を元に戻した。

(焦っちゃ駄目だ……魔術委員会に口止めされてるだろうから、関係を良くして、じっくりと聞き出さないと……)

ゆっくりと息を吸って、吐いた敬治に、一人の人物が声を掛けた。

「何、朝の良い空気を吸ってんだよ。敬治」

右から急に聞こえてきた声に、振り向いた敬治。その目に映ったのは同じ中学で、同じ東坂高校に通っている敬治の友達であった。

「裕太か……びっくりさせんなよな……」

「びっくりするような事考えてたから、びっくりしたんだろ……？」

お前って、八組だっけ？ 良い女子生徒いたか？」

「んな事、考えてねえよ！」

「分かってるって。そんなムキになんなよ……ホントお前は真面目過ぎんだよ。そして、それに気付いてないのが天然」

信号が青へと変わり、自転車のペダルを漕ぎ始める二人は並列しながら進んでいく。

「うるさいなあ……」

「まあ、それはいいとして、お前、やっぱり魔術部入るんだろ？」

裕太の尋ね掛けに対して、頷く敬治。しかし、裕太は首を横に振ってもらいたかったらしく、溜息を吐いてみせた。

「やめとけて。東坂高校の魔術部の評判って去年の事件のせいで悪すぎだぜ？ それに廃部の話も出たって言うし、今存在してるのがそもその間違い。最悪、いじめられるぞ？」

「だとしても、俺は……知りたいんだ……」

顔を少し俯ける敬治に「前見ないと危ないぞ」と忠告した裕太は少し、ペダルを漕ぐスピードを上げた。

「……まあ、俺なんかが首を突っ込んでいい話じゃなかったようだな」



土曜日だったこの日は二時半には全ての授業が終わりを告げ、部活をしていない者は帰り、部活をしている者は部活へと行く。敬治もその部活に行く者の例外ではない。

今日の朝、HRの前に担任の先生に印鑑をもらい、昼休みに部活の顧問の先生に入部届を提出したため、今日から正式に敬治は魔術部の一員になったと言う事になる。

敬治は教室で自分の席の引き出しから鞆に教科書やノートを入れながら、溜息混じりに思った。

（はぁ……裕太の言う事は的を射てた……ホントに入部届を出して正解だったのか？ って今更、思ったところで後の祭り、か……）

「よし!」と言う言葉を漏らし、鞆に全ての教材を詰め込み終わったと思った敬治が、教室から出ようと振り返ったとき、敬治の目の前には一人の女子生徒が立っていた。

——だがしかし、全て入れ終わったと思っていた敬治の教材は、まだ、自らの引き出しの中に残ったままであった。

「よっス斉藤くん! こうやって話すのは初めてだね! 魔術部に入部したんだってえ?」

「わぁ!？」

思わず声を上げた敬治が見下ろしている女子生徒は背丈が一五四センチほどと、敬治との身長差は四捨五入すると、二十センチにも及ぶ。小柄な彼女の左目には白い眼帯がされており、右目は丸く、顔も丸い。髪は首の後ろで二つ結びをしていた。

そんな彼女を見て、自らの頭のアンテナを揺らした敬治は反射的

にその言葉を漏らしてしまった。

「ちっさ……い……」

「『ちっさい』言うな！ これでも、一年に一センチは伸びてるんだからねっ！」

（一センチって……）

心中でツッコミながら敬治は訝しげな表情で彼女を見下ろす。すると、敬治の表情から察した彼女は自己紹介を始めるのであった。

「失敬失敬！ 自己紹介まだだったね！ わたしは桐島雪乃きりしま ゆきの！ 斉藤くんは斉藤敬治くんだね？ わたしって、記憶力だけはいいいんだあ！ だから、自己紹介の時にみんなの名前全部覚えちゃったの！」

「凄っ……！」

目の前の雪乃との温度差に気圧されながらも、敬治は言葉を發した。

「でしょでしょー！？ まあ、その話は一先ず、置いてー。わたしも、魔術部に入部しようと思ってるんだあ！」

と担任の印鑑がまだ押されていない入部届を敬治へと見せつける雪乃は「にっこり」と微笑んで見せた。

「でも、やっぱり入部届出す前には見学しておいた方が良いでしょう？ だから、今日は魔術部を見学しようと思ってる！」

「……そういう事なら、多分、大歓迎だと思うけど……？」

「ホント！？ じゃあ、魔術部の部室までレッツゴー！」

後ろを振り返る雪乃は教室の出入り口に向けて、右拳を突き出しながら、教室から出て行く。そして、雪乃に続くように敬治も教室から廊下に出ると、敬治の右側には雪乃が敬治の方を向いて存在しており、頭を掻き、照れながら小声で言った。

「わたし……魔術部の場所……知らないんだっ……」

魔術部の場所を知らないと言う雪乃ゆきのの隣を歩く敬治けいじは左目に付けた白い眼帯について、尋ねてみる。

「左目怪我したの……？」

「あっうん！ わたしドジだから、電柱にぶつかっちゃって……」

「てへへ……」と頬を紅く染める雪乃に「そんな事あるのか……？」と心中で疑いながら、敬治は黙って、次の質問へと移った。

「魔術使える？」

「ううん。使えないよー！ けど、魔術って何だか、面白そうじゃん？ だから、魔術部に入ってみたいんだあー」

笑顔で答える雪乃を見て、敬治は今日の朝、裕太ゆうたに言われた言葉を思い出し、雪乃へと思い切って、尋ねた。

「この学校の魔術部って、印象悪いけど……気にしてない？」

「うん！ 別に気にならないよ！」

（気にならないなら、あまり言わなくてもいいかな……）

ほっと息を吐いた敬治と雪乃はそうしている内に二階にある魔術部の部室へと着いた。

敬治は入り口の扉を四回ノックすると、テンションの低い部長がその扉を中から開け、顔を覗かせた。

テンションが低いのは多分、江藤えとうが原因だろう。

「……？ 誰？ その子……？」

その低いテンションのまま、敬治へと尋ねる部長。それに対して、答えようとした敬治を右手で制した雪乃は、部長の前に立つと、大きな声で告げる。

「魔術部を見学に来ました！ 桐島雪乃って言います！」

「おお！ 見学！？ それなら、大歓迎だよ！ さあ、中に入って入って！」

いつもどおりのテンションを取り戻した部長は、扉を完全に開き、

雪乃と敬治を部室へと入れる。

「お邪魔しまーす」と言いながら、入った雪乃を迎えたのは副部長である江藤と二年生の部員である神津こうずの視線だった。

「部活見学しに来た桐島雪乃ちゃん」

「宜しく願います!」

部室にいた江藤と神津に入ってきた雪乃の紹介をした部長は、今度は二人を雪乃に紹介し始める。

「立っている男子生徒がこの部の副部長の江藤清二君せいじで、椅子に座ってる女子生徒が二年生の神津沙智ちゃんさち。部員はあと、三人いるんだけど……サボリ。」

……そして、俺がこの部活の部長である藤井亮ふじりようなのだ!」

部長は両手を腰に当てて、胸を張り、偉そうな姿勢とる。部長のその姿を見ながら、冷たい視線を送る三人だったが、雪乃は眼を輝かせながら、拍手をしていた。

「部長さんだったんですね! どおりで、オーラが違うと思いました!」

「いやー……それほどでもあるけどね?」

笑う二人に対して、尚も三人は冷たい視線を部長へと送り続けた。
「けどー……今日は特にやる事は無いんだよねえ。バスケ部は昨日行ったし……てか、雪乃ちゃん、魔術ってどんなものなのか知ってる?」

首を横に振る雪乃に部長は笑顔で、

「よし! じゃあ、俺が物凄く、分かりやすく、魔術について教えてあげるよ!」

と、銀縁眼鏡をクイツと上げ、埃まみれのホワイトボードを長方形の机へと近づけ、ホワイトボードと雪乃で机を挟むようにパイプ椅子へと雪乃を座らせた。

「魔術を使うにはまず、その魔術を理解する事が欠かせないんだよ。だから、勉強しなくちゃ、魔術は使えない。そして、魔術を使う時には魔術ごとに存在する詠唱——Araiアライを唱えから、Araiも

覚えないといけないんだ。だから、“俺のように”頭が良い人じゃないと、魔術は扱えないと言うわけなんだよ！」

ホワイトボードも併用して、魔術の説明を簡単に説明した部長はまたまた、偉そうに両手を腰に当てる。そして、当たり前のように雪乃以外の三人は冷たい目でその姿を見るのだった。

「えっ！？　じゃあ、魔術って呪文を言うだけじゃ駄目なんですね！　呪文を言っただけで、物を浮かせたりできると思っていました！」

「呪文じゃなくて、A r a i ね。それと魔術と魔法が違うって言うのは知ってて貰いたいんだ。魔術はあくまで、科学力で行えるもの。その他の空を飛んだりとかって言うのは魔法で、魔術とは別物なんだよ」

「何だか、難しいですね……」

眉間にしわを寄せて、頭をフル回転させている雪乃を部長は笑いながら、思案する素振りを見せた。

「さて、今日はどうするかねえ……清二君、雪乃ちゃんも来たんだし、何か良い案ないかい？」

そんな部長に対して、江藤はぼつりとアイデアを呟いた。

「二人に学校を案内すればいいんじゃないですか？　まだ、入学して日も浅いですし」

「流石、清二君！！　ナイスアイデア！　と言う事で、今日は敬治君と雪乃ちゃんに学校を案内しようと思います！」

江藤のアイデア採用によって、東坂高校を二人に案内するのが今日の活動と決まるのであった。

東坂高校の校舎はU字型になっている。勿論、縦二本の校舎と横の校舎は垂直に交わっている。

五階建ての校舎の縦二本の校舎は三階まで全て、各クラスの教室となっており、部室や書道室などの特別教室は五階か、横一本の校舎に集中している。

敬治と雪乃のクラスである一年八組のある校舎は、一階の縦二本

の校舎の左の方だ。魔術部は、と言うと、U字の横の校舎の二階に位置している。

一階の縦二本の校舎は全て、一年生の教室で、二年生の教室も二階の縦二本の校舎、三年生の教室も三階の縦二本の校舎にある。

運動場は全て人工芝グラウンドとなっており、U字の縦の左側の校舎から横の校舎までL字に広がっている。

体育館もU字の左側の端に存在しており、その一階はトレーニングルームや柔道、剣道場となっており、本当の体育館があるのは二階である。そのため、魔術部部室からは階段を上らず事無く、廊下を歩けば、体育館へと行けるようになっていた。

「はい。此処が生徒会室ね。物壊した時にはすぐに此処へ来るんだよー」

そう言いながら、部長は三階のU字型の横の校舎に存在するドアの上に『生徒会室』と書かれたところを指差した。

（物壊した時……ってやっぱり壊したりしてるんだ……）

敬治は少し、予想のついていた事に驚きはしなかったが、その予想を否定したかった。何故なら――

（此処で生徒会の人と顔を合わせる事になったら……長引きそうだし……）

と思ったからであり、その予感的中する。

「藤井！ てめえは人の城の前で何してやがんだよ！」

廊下を走って、生徒会室を守るように生徒会室の前で止まった男は部長の胸倉に掴みかかった。

「おいおい！ また、今年度の予算を書き換えようって鍵壊しに来たんじゃねえだろうな？」

「そんな訳無い！ 俺はデスクワークはだから、そんな横暴なマネはできないよー」

「おい、江藤。こいつ一発殴ってもいいのか？」

左手だけで、部長の胸倉を掴んだ男は空いてる右手を握り締め、

部長へと近づけていく。

「まあ、一発くらいならいいんじゃないかな？ それと、一応、言っとくけど、藤井さんは君の先輩だからね？」

江藤の言うとおり、男は生徒会の一員の二年生。部長の方が、先輩なのであった。

「そうそう。敬治君の言うとおり、先輩はちゃんと、尊敬し――つぶべあ――！」

結局、生徒会の男に殴られてしまった部長は左頬を押さえながら、顔を俯ける。それに対して、生徒会の男は胸倉を掴むのをやめて、部長に背を向けた。

「それよりも、魔術部にいる“あいつ”の服装とかちゃんと、させとけよ！ いいな！」

そう言った後、生徒会の男は生徒会室のドアを開けて、そのドアを勢いよく閉めた。

「うっ……親父にも打たれた事ないのに……」

「部長。その台詞はアウトですよ」

某主人公の真似をする部長に対して、淡々と言葉を述べながら、江藤はいつまでも頬を押さえている部長を追い越して、先を進んだ。そして、残る三人も、部長を置いて、江藤について行った。

「えっ！？ ちょっと、スルーしないでよ！ ホントに痛かったんだから！」

そんな東坂高校のU字型校舎の教室を全て、回っていった魔術部部員一同と雪乃。雑談をしながらの教室巡りは、本人たちには一瞬の時間に思えたが、時はもう既に、夕刻に迫っていた。

空が橙色に染まっているのに気付いた部長が腕時計を確認すると、時刻は五時半を回っていた。

「うわっ！ もう、こんな時間じゃないか！ 学校は一通り案内したし、今日の部活はこれまででってことでいいよね？」

部長の尋ね掛けに対して、その場にいた全員が頷くのを確認すると、部長は雪乃へと視線を移した。そんな雪乃は学校を巡る時の雑

談の中で「この部活に入ります！」と安易にそう部長に告げていた。
「じゃあ、雪乃ちゃんは今後日！ 担任の先生に印鑑もらって、顧問の先生に入部届提出しといてね？」

「はい！」

笑顔で答える雪乃に対して、部長も微笑んだ。

「って事で今日は解散！」

その言葉と同時に、魔術部の五人はまた、雑談を交わしながら、ゆっくりと靴箱へと動き出した。



そんな昨日から二日間の魔術部の行動を監視していた人物が一人いた。

東坂高校は上靴を指定しており、その上靴に入った二筋の線の色で、学年を分けている。一年生は緑、二年生は赤、三年生は黒、と統一している。その人物は赤色である事から、二年生だと言うことが分かる。そして、学ランを着ていることから、男子生徒だと言うことも一目瞭然だ。

その男子生徒は、魔術部一同が解散し、靴箱へと向かっていくのを確認してから、携帯電話スマートフォンをポケットから取り出した。

男子生徒は指を滑らせながら、電話帳を開き、そこに名前のあった人物へと電話をかけた。

「トゥルルル」の連続した音が男子生徒の耳へと届く中、それは急に「プツン」と切れ、誰かの声が入って来た。

『もしもし』

「二日間の尾行で得られた情報は昨日の『風・火・電撃』の三つだけでした。電撃は非常に珍しい魔術ですが、ほうっておいても特に問題はないでしょう」

『電撃か……』

その言葉を聞いて、何かを思い出しているような沈黙をする電話

の相手の反応が気になった男子生徒は尋ねる。

「何か、思い当たる節があるのですか？」

『ああ。中学の後輩に“俺と同じ”電撃の魔術を使う奴がいてな……少し、そいつの事を思い出した』

「……あなたにもちゃんとした『思い出』と言うものが存在したんですね……あなたの思い出は全て、闇に吞まれているのかと思っていましたよ」

『失礼だな？ 俺にだって、思い出はある。“去年の事”だって、俺にとっては思い出だ。そして、今度は確実に成功させる。その為に、お前と彼女にはその指令を下した』

「分かってます。それで、成功させるために、どうしますか？ もう少し、情報を得られるかもしれませんけど……？」

男子生徒の尋ね掛けに電話の相手は思案しているような沈黙を連続させ、答えを紡ぎ出す。

『やはり、それだけだと情報が足りない……だが、お前と“魔眼”がいるんだ。“あれ”の周りに結界を張っていようが、相手が魔術を使って抵抗しようが、“魔眼”の前には無意味な事だろう？』

「そうですね……しかし、“魔眼”をそこまで過大評価してもいいのでしょうか？ まだ、あれにはリスクがあると聞いてますが？」

『問題ない。それとも、“俺が作った作品”にお前は、不満があるとしても言うつもりか？』

その問いに男子生徒は息を詰まらせ、電話の相手には見えないので意味はないが、首を振りながら答えた。

「いいえ。そんな事はございません」

『それでいい。彼女、魔眼には「明日の日曜日に決行しろ」と伝えておけ。明日はまだ、お前は監視しているだけでいい。“魔眼”のデータも取りたいしな』

「分かりました。それで、もし、戦闘せざるを得ない状況になった場合には彼女はどうすれば、いいのでしょうか？」

『愚問だな——』

電話の相手の男は思案する間など置く事無く、その続きを紡ぐ。

『――法に触れても、構わない…………――殺せ』

「御意」

スマートフォン画面に指を滑らせて、電話を切った男子生徒は再度、電話帳を開き、そこにあった女性の名前を押して、電話をかける。

「もしもし……明日、決行になった。他の魔術の対応は別に良いと思うが、電撃の魔術だけは対応を考えたい方がいぞ……魔術部が抵抗するようだったら、迷わず殺せ。健闘を祈る」

α―VI. セーラー服と日本刀

その夜。敬治は月曜日の朝課外、0限にある現代文の予習をしようと、自らの鞆を探った。しかし、鞆の中には肝心の現代文のノートだけが存在していなかった。

（あれ？　もしかして、学校に忘れてきた……？　くそ、現代文って月曜の朝課外からじゃん！　朝早く行って、やるのも嫌だしなあ……）

思案する敬治が辿り着いた答えは、

（仕方ない……日曜だけど、部活はあってるから学校は開いてる……だろう。午前中の内に取りに行くか！）
と言うものであった。

自らの頭に飛び出したアンテナを揺らしながら、敬治は意味もなくベッドへと横になった。そんな敬治の目に映ったのは、いつもどおりの白い天井であった。



次の日

その朝、敬治は八時半にセットしておいた目覚まし時計の音で目を覚まし、いろいろと準備をした後、午前九時には制服をその身に纏って、家を出ていた。

自転車で通学している敬治の家と東坂高校との距離はそう遠くはない。自宅から高校までの所要時間は三十分前後であった。

（眠い……）

敬治はそんな事を思いながら、自転車のペダルをゆっくりと漕いで行き、三十四分で学校に辿り着いた。

U字型の校舎の横にある体育館。その更に横には三階建ての駐輪

場が存在し、敬治はその二階に自転車を置いて、体育館横の道を進んでいく。そして、一分経つか経たないかくらいの時間で校舎へと辿り着いき、廊下を歩いた。

敬治の教室はU字型の縦の左側の校舎の一階であるため、廊下を歩くのにそう時間は掛からなかった。

鍵の開いている教室へと入って、自らの机の引き出しを腰を下ろして除いた敬治は、

「あつた！ あつた！」

と声を上げながら、現代文のノートを引き出しから取り出し、微笑んでみせた。

無事、目的を達成した敬治は帰ろうと、教室から出る。すると、誰かが小走りしていくような足音が廊下に鳴り響き、敬治は咄嗟に右へと振り向いた。

その瞬間、敬治の眼に一瞬だけ、部長が二階への階段の方へと早歩きで向かっているところが目に入った。

「部長……？ どうしたんだろう……」

血相を変えた表情で早歩きで向かっていった部長の姿が敬治の不安を掻き立てた。

（階段の方に行ってたって事は、部室に向かっていたのか……？
なんか、気になるな……行ってみるか）

そう思った瞬間にはもう既に、敬治は右の方向へと身体を向け、右足を一歩、前へと踏み出していた。



二階——魔術部部室——

敬治が早歩きで階段の方へと向かっていった部長を目撃する数分前。一人の人物が魔術部部室の扉の鍵を無理やりこじ開けて、入っていた。

その人物は東坂高校の“セーラー服”をちゃんと、その身に纏っており、上靴に入った二筋の線の色が緑である事から、一年生と言うことも分かる。

中に入って、ゆっくりと部室のドアを閉めた女子生徒は、部室を少し見回して、最終的にその視線を部室にある棚の方へと落ち着かせた。そして、棚の方へと近づいていった女子生徒はその棚にあった“あるもの”へと手をのばした。

その“あるもの”とは、敬治がこの部室に一人で入った時に見入ったもの——ガラスケースに入れられた全ての面が金色に輝く、ルービックキューブのようなものであった。

女子生徒は金色のキューブの入ったガラスケースへと触れた時、何かの詠唱——Arai^{アライ}を唱えた。そう。彼女は魔術を使えるのであった。

すると、その瞬間、金色のキューブを囲っていたガラスケースは粉々に飛散し、金色のキューブは完全に無防備な状態となった。

「これで……終わる……」

女子生徒は何か、ほっとしたような微笑みを浮かべる。それと同時に、金色のキューブを右手で鷲掴みにした。

「——ッ!？」

だがしかし、次の瞬間に金色のキューブを中心にして、光を発する大きな円が彼女の足下に現れ、彼女を囲むようにその円はキューブから広がっていき、キューブを中心とし、半径二メートルの位置で停止し、今度はそれよりも小さな円が六つ、彼女と大きな円の間を埋め合わせるように並んでいった。そして、各円の中に異様な文字が現れた。

それは一昨日、体育館でバスケット部と魔術部がバスケットボールの試合をした時に、神津がコート上に描いていたものとはほぼ同じであった。神津が描いたのと違うところは、地面から現れた円の数だった。

（“七円陣結界”^{しちえんじんけつかい}……しかも“地雷式”のようね……）

自らの足下に広がる円を睨みつけながら、キューブを持った女子生徒は舌打ちをしてみせる。

“七円陣結界”とは、その名の通り、七個の円から形成される結界の事である。

結界はそれを形成する円の数によって、その強さは比例する。結界を形成する円の数の最大は十五であり、十五もの円を描ける魔術師は日本にはいないとされている。その事からも十五の円を描くのが難しいのは明白だ。

それと同時に、十円陣結界も描ける魔術師は過去を遡^{さかのぼ}っても一人しか存在しないと、言われており、その理由は未だ、不明である。そして、彼女が心中で呟いた“地雷式”と言うのは、そのままの意味合いである。何かの条件を付け、その条件によって、魔術が発動する事。つまり、今回の結界が発動する条件は、ガラスケースが割られても結界が発動しなかった事から、キューブに触れる事であったようだ。

（簡単には解けそうにないわね……）

そう彼女が思った瞬間に部室の扉が唐突に勢いよく開かれ、ある人物が魔術部部室に姿を現した。その人物は先程、敬治が見た人物——魔術部部長の姿であった。

右手の中指で銀色の縁の眼鏡をクイツと上に上げ、女子生徒を睨みつける部長は、溜息を吐いた。

「まさか、お前がキューブを狙っていたとは……—」

眉間にしわを寄せる部長に対して、女子生徒は「にやり」とその口元を歪めた。

「——桐島雪乃^{きりしまゆきの}」

そう。女子高生は昨日、魔術部を見学しに来た身長一五四センチ

で左目に白い眼帯をしている桐島雪乃本人であった。

「やっぱり、簡単にはキューブを盗らせてはくれなかったか……？　りゃあ、キューブは“重要なもの”だもんね……——人類の命運を分けるほどの」

その言葉を聞いた瞬間に部長は睨みつける視線をより一層、鋭くした。

「誰の命令でキューブを奪いに来やがった……！？」

その質問を聞いた雪乃は「フフフ……」と笑ってみせる。

「部長さんもご存知の“あの方”の命令だよー？　で、部長さんは何しにきたの……？」

その瞬間、目を大きく見開いた部長はその後、段々とその目の色を深い黒へと変化させていく。それは氷点下のように冷たい眼差しであった。

「……俺は魔術委員会にキューブを託された者の一人だ。だから、それを絶対に渡すわけにはいかない！　大人しく退かないって言うんだったら、俺はお前を——迷わず殺す」

右手を雪乃に向けて翳す部長。しかし、雪乃はそんな部長の言動を嘲笑った

「できるの、部長さんに？　去年の夏もそれができなかったから、今、こうしてキューブが奪われようとしてるんだよ？　それに部長さんも腹部に大怪我を負う事になったんでしょ？」

その発言を聞いて、部長は情報がだだ漏れだと言う事を理解した。そして、さり気なく、部長は自らの右脇腹を右手で触れた。

そう。部長は去年の夏に腹部に大怪我を負い、今では早く走る事が叶わなくなってしまうていた。

「それに、この結界。わたしの脚だけを動けないようにしたのは部長さんが自分で捕まえられるって思ったから？　だったら、部長さんは判断ミスしちゃったみたい。脚以外の部分全部動かせるんだもん。こんな薄っぺらい結界なんて、わたしの手で———すぐに壊してあげるよ」

そう告げた瞬間に、彼女はキューブを持っているために塞がっている右手とは逆の左手で、左眼の白い眼帯を外してみせた。

その眼帯が外される事によって、露あらわとなった左眼は未だ、閉じられている。そして、左手に持った白い眼帯を左ポケットに押し込むのと同時に、彼女は自らの左眼を開いてみせた。普通の人と何ら、変わらないと思われた彼女の左眼であったが、その黒目の部分には大きな円と、その辺に串刺しになった小さな円が並んだ紋章のようなものが刻み込まれていた。

そんな彼女の左眼を見て、少し、驚いた表情を見せる部長。

「驚くにはまだ、早いと思うけど？ 部長さんがわたしの左眼に見とれてる内に、ほらっ」

と、雪乃は自らの左手に握った日本刀を部長に見せつけた。

その刀は、何も持っていなかった左手から、一瞬の内に出現した物であった。

自らの笑みをより一層、濃くしていく雪乃は握った刀を振り上げる。

「わたしの言ったとおりでしょ？ 部長さんはわたしを殺せない」

瞬間、彼女は左手に握った刀を振るい、自らの周りを取り囲む結界を粉々に砕け散らせた。そして、部長は雪乃と応戦するべく、Araiを唱えようとしたのだが、それよりも先に雪乃がAraiを唱えてみせた。

「Sundob of a cserad lace」
サンドアップ オブ ア クセレッド ラベック

その瞬間、彼女を中心として、大きな円が一つとその中に小さな円が七つの八円陣結界が展開され、部長はそれを見ても尚、Araiを紡紡ごうとした。

結界は一昨日、神津こうずがしていたように自らの手で描いて展開もできるが、Araiを唱える事によっても、展開する事ができる。しかし、自らの手で描いた方が、を唱えるよりもより強力な結界を展開する事ができるのだった（魔術師の力量によっては同等の場合も

ある)。

ニードゥ
「Nidw」

部長の右手から放たれた風は雪乃の展開した結界に当たった瞬間に飛散し、雪乃に届く事はなかった。

「あらあら。風の魔術でも最低の魔術のAraiを唱えるなんて……八円陣結界が見えなかったかしら？」

「違う……俺の魔術はただの……条件だ」

その言葉を聞いた時、雪乃は目を大きく見開き、自らの足下を見た。次の瞬間、彼女の展開していた結界が砕け、もう一つ円の多い九円陣結界が展開された。そして、彼女は完全に身体を動かせない状態になった。

「九円陣結界を発動する条件が風の魔術のAraiを唱える事だったのね……それに、今度は脚だけじゃなく、全部動かせなくなった……」

部長は身体を動かせない雪乃に一步一步近づいていく。

「キューブを渡して貰うぞ」

「フッフ……ダメね。勝利を確信したからってわたしに安易に近づいてくるなんてね——」

その言葉を聞いた瞬間に部長は自らの身を後ろへと退けようとした。だがしかし、それよりも先に彼女を取り囲んだ結界が破壊され、動けるようになった彼女は刀を下に向けながら、部長の方へと突っ込んだ。

「——観察力が無いわね。わたしの魔眼は——“具現”よ」

振るわれた刀は部長の腹を斬り裂こうとした。しかし、部長が足を躓かせた事により、その刃は部長の腹を掠るのみに留まった。

「運の良い男ね」

そう言って、雪乃は左手に持った日本刀を一瞬で消し、部室の扉を開き、走って出て行った。

「待て！」

制服を斬られ血が滲んでいく中、部長は雪乃を追いかけようと腰を上げ、部室のドアを勢いよく開いた。そんな部長の目の前に今起きている状況が全く、分かっていない敬治の姿が現れる。

「――敬治君!？」

「部長。そんなに急いでどうしたんですか……? 桐島も今、走って出て行きましたけど……って怪我してるじゃないですか!？」 保健室に行かないと!!」

敬治の心配そうな表情を見て、部長は自らの斬られた腹ではなく、右脇腹を触った。そこは去年の夏に大怪我したところだった。

「俺の事はいいいから、雪乃を追って! 彼女の持つてるキューブが“あいつら”の手に渡ったら、人類が終わるかもしれない! お願いだから、彼女を殺してでも、キューブを奪わせないでくれ!」

(あいつら……!?) まさか、谷崎先輩たにざき先輩に関係のあることなのか……? だったら……)

廊下に血を垂らし、苦しい表情を浮かべて頼む部長の顔を見て、敬治は首を縦に振った。

「“あいつら”の説明は後でちゃんと、してくれるんですよ?」

「ああ……必ずする……だから、キューブを!」

「分かりました」

その言葉を聞いた、敬治はすぐさま、雪乃が走り去った方向へと、走り出した。

雪乃が部長に対して、何をしたのか分からない敬治を突き動かししたのは、部長の真剣な表情から、状況が芳しくない事を察したことで、谷崎の情報を得られるかもしれないという希望であった。

α―VII. 降雷の魔術師

女子の脚力が男子に勝ると言う事は無く、校舎の隣にある体育館のとなりの道でやっと、敬治は雪乃に追いつき、一定の距離を保った二人は立ち止まって、雪乃ゆきのは後ろにいる敬治けいじの方へと振り向いた。「左眼、怪我したんじゃないかなかったんだな……」

「そーゆーこと。でも、わたしにとって、この眼は傷と同じなのかもしれないね……」

目線を敬治から逸らし、左目を左手で触れる雪乃。

「どういう意味だ……?」

「斉藤くんに話したところでしょうがないでしょ?」

そう言って、雪乃は再度、その目線を敬治の方へと向ける。

「斉藤くんは電撃の魔術が使えるんだって? 凄いね。わたしには

魔術の才能さえ、乏しいのに……」

苦笑いをしてみせる雪乃の表情を見ていた敬治はその視線を彼女の右手にある、金色のキューブへと移した。

「……そのキューブ。部長は『あいつらの手に渡ったら、人類が終わるかもしれない』って言ってた……一体、お前が持つてるキューブって何なんだよ……?」

説明するのが面倒くさいのか、雪乃は溜息を吐いてみせ、その後、敬治の後ろへと視線を向けた。それが気になった敬治が後ろを振り返ると、腹から血を制服に滲にじませた部長の姿がそこにはあった。

「部長! ? 早く、保健室に――」

「大丈夫だよ、敬治君……それより、俺が代わりに説明しよう……魔術と魔法は違う。科学力でも可能な事を魔術と呼び、科学力では行えない空想的な事を魔法と呼ぶ……」

俺たちが使ってる結界ってのはちよつと異質で、例を挙げると、真っ白く何も無い部屋に入ろうとする時、その雰囲気から部屋に何となく入りたくない気持ちが出てきたりする。それが結界の根源だ。

物の位置や部屋の構造などで視覚的に脳を混乱させる。

だから、五円陣結界^{ごえんじんけつかい}までは魔術的攻撃を防ぐ事はできない。けど、七円陣結界からは魔術的攻撃も防げる。

つまりは、七円陣結界からは魔法の部類に入るんだ」

敬治がちゃんと理解しているのかが気になった部長は敬治の表情を一瞬だけ窺った。しかし、気にする必要は無かったようで、部長は話を続ける。

「少し、無駄話をしちゃったね。これから本題。彼女の持つてるキューブにはそれ自体に一生をかけても使い切れないくらい的大量の魔力が封印されていて、それを持つただけで、魔法が使えるようになってしまう。そして、“広島・長崎に落とされた原子爆弾ほどの威力”を持つ魔法も使えてしまう……」

「——ッ!?　なんで、そんなものを部長が持つてるんですか!？」

「魔術委員会の会長に託されたんだ……理由は分からない。けど、こいつらをおびき寄せる為に、このキューブが使われている事は確かだ」

その目を大きく見開かせた敬治は彼女の持っているキューブを見た。

「敬治君。驚くにはまだ、早いよ。彼女の左眼も多分……彼女の持つてるキューブと同じようなものが埋め込まれてるよ」

敬治は雪乃の右手に握られたキューブから彼女の左眼へとその視線を移す。すると、雪乃は「にやり」とその口元を歪めてみせた。

「伊達に『部長』って言う肩書きを背負ってはいないのかな?　日本刀を具現化させただけで、この眼がこれと同じ物だって分かるなんてね」

「それだけじゃない。お前が言った“具現”って言葉が一番のヒントになった」

(ちよっと待てよ……具現……?　聞いた事がある……)

その単語に引っかかった敬治は黙って、思案に走った。しかし、部長に肩を叩かれた事によって、その思案は妨げられる事となる。

「敬治君。二人で力を合わせて、何としても、キューブを取り返すよ」

敬治の耳元で小声で囁いた瞬間に、敬治は思い出し、首を横に振った。

「いいえ。自分にやらしてください。すぐに終わらせますから」

（俺と部長の会話を待っただけの余裕……具現……やっぱり、こいつはこの頃、噂を聞くようになった——具現の魔術師……）

一歩、雪乃に向けて足を踏み出す敬治に対して、警戒心を抱いたのか、雪乃は *Arai* を唱えてみせる。

「Sundob of a cserad lapc」

その瞬間、彼女を中心として一つの大きな円とその中に小さな七つの円が展開され、結界が張られる。そんな雪乃を見ても、何もしようとはしない敬治を見て、彼女は笑った。

「これで、斉藤くんが戦闘の初心者だって分かった。普通ねえ？」

戦闘が始まるのと同時に結界を展開するもんなんだよ？」

「そうだよ敬治君！ 一人で戦っては駄目だ！」

「部長は怪我してるんですよ！ そんな状態で彼女と戦ったら、きつと死ぬ！」

（そうだ……具現は危険な魔術なんだ……瞬きをした瞬間に相手が銃を握っていてもおかしくない魔術なんだ……！？）

“具現”——それは想像したものを具現させる魔術。いや、それは魔法と言っても過言ではないものだった。

そして、敬治の暗示したとおり、雪乃の左手にはいつの間にか、日本刀が握られており、切っ先を敬治へと向けていた。

そんな彼女の姿を見て、敬治は眉間にしわを寄せた。

「魔眼の能力はこれだけじゃないよ———Lamef」

雪乃がその *Arai* を唱えた瞬間に左手に握られた刀の刀身は炎を纏った。そして、彼女は右手に持っていたキューブを右ポケット

の中へと入れ、炎を纏った刀を両手で握った。

「部長……お願いですから、下がっていきたく下さい」

敬治のその言葉に従って、後方へと退く部長。その瞬間、雪乃は一気に敬治との間合いを詰めにかかった。そして、炎を纏った刀を切っ先が届いていないのにも拘らず、敬治へと振るった。しかし、刀身に纏わりついていた炎が刀を離れ、敬治に向けて襲い掛かった。炎に包まれる敬治。

「敬治君!!」

そんな敬治の身を案じた部長が叫ぶが、敬治に反応は無い。

「呼びかけても無駄だよ、部長さん。斉藤くんを包んでる炎は外から魔術で攻撃を加えようと、消せない炎になってるの。だから、斉藤くんの魔術で炎を振り払うか、焼け死ぬか、の二択しか選択肢はないよ」

(けど……叫び声を上げたりしないでことはまだ、焼け死んではないってことなのかな……?)

言葉の続きを心中で呟いた雪乃は未だ、自らの炎の刀を構えたまま、動かない。

しかし次の瞬間――

リセレクト

チヨスク

「R i c e l e c t c h o s k」

アライ

――敬治が小さな声でA r a iを唱え、連続した「ビリビリ」と言う放電される音と共に雪乃の炎を吹き飛ばした。その姿は電気うなぎのようであった。そして、雪乃の姿だけに視線を向け、睨み続ける敬治は言葉を紡ぐ。

「お前は『普通は戦闘が始まるのと同時に結界を展開する』って言うってたけど……俺は最初から、“結界を展開させる必要なんてない”んだよ。俺の電撃の魔術は――――全ての魔術を破壊できる」

(全ての魔術を破壊できる……!!? だから、去年のあの時、あいつには魔術が通じなかったのか!?) いや、それよりも敬治君の雰囲気明らかに変わった……?)

敬治の纏う空気の色が変わった事を察知した部長は、自らの足を

じりじりと敬治から退けていく。その行動は、部長の気持ちの現れであった。

（やっぱり……俺は電撃が怖いのか……？）

自らの右脇腹を左手で抑える部長は首を横に振って、疑念を振り払おうとした。しかし、じりじりと敬治から遠ざかろうとするその足は止まらない。

「桐島、お前は選択をミスったんだ。俺たちに応戦せず、キューブを持ったまま逃げるべきだった」

そして、敬治はただ、自らの右手を雪乃へと翳した状態で、^{ライ}Ar aiを唱えた。

「――^{デンサー}Denthur」



「おいおい、お前ら！ 見とれてないで、ちゃんと練習に集中しろ！」

人工芝グラウンドでいつもどおり、練習をしていたサッカー部であったが、練習中なのにも拘らず、その何人かは体育館の近くで起こっている出来事に釘付けとなっていた。

そんな練習をサボっている後輩の頭にチョップを入れていきながら、サッカー部部长も満更でもないようで、少しだけ、敬治と雪乃の方を覗いてみる。

「先輩。なんか、魔術部ってサーカスみたいですね……火が出たり、電気が出たり……」

「はあ？ 何言ってるんの？ 魔術部って、理科の実験みたいなものばっかやってるだけなんじゃないの？ それにあいつら、無駄に頭良いし……」

と突拍子もない事を敬治と雪乃を見ていたサッカー部の先輩が口

にした瞬間に、敬治の右手から電撃が雪乃目掛けて射出され、蛇行していく姿を見て、注意をした自分もその光景に釘付けとなった。
「先輩……練習しなくて良いんですか？」



雪乃へと自らの右手を翳^{かざ}す敬治は、さっきと同様の^{フライ}Ar aiを唱えてみせた。

「^{リセレクト}R i c e l e c t ^{チョスク}c h o s k

その瞬間、敬治の右掌から一瞬の内に電撃が射出され、蛇行しながら雪乃の方へと向かった。しかし、その電撃は雪乃の構える刀に当たった瞬間に砕け散った。

「――!？」

大きく眼を見開いた敬治の表象を見て、雪乃は笑った。

「フフフ……不思議でしょう？ 斉藤くんの電撃の魔術が通じないなんてね？ 本当に不思議でならないよねえ？」

わざとらしく、敬治に何かを質問させるように誘導する口ぶりな

雪乃の思惑に答えて、敬治は尋ねかける。

「その刀……一体、何でできてやがる……？」

「そう。この刀が斉藤くんの電撃を粉碎した原因。そして、斉藤くんが電撃の魔術を使うって聞いてたから、態々^{わざわざ}、わたしはこの刀を具現化させたの。この刀――“雷切”を、ねえ？」

“雷切”――それは雷、雷神を斬ったとされる日本刀の一つである。その話は言い伝えであり、本当かどうかは定かではない。しかし、雷、雷神を斬ったとされるだけあって、雷切のその刃は鋭かった。

雪乃が手に持っているのは具現化させた“雷切”であって、日本に現存する雷切ではない。その為、敬治の電撃の魔術を粉碎できたのかもしれない。

「これで、斉藤くんは無能。『選択をミスった』とか言ってたに
しては期待外れだね。部長さんも怪我してるし……もう、いいかな？」
雷切を右手に携^{たづな}えたまま、後ろへと振り向こうとする雪乃。だが、
敬治はそんな彼女を呼び止めた。

「待て！」

「何？ まだ、遊んで欲しいの？ これ以上続けるつもりなら、命
令どおり——消すよ？」

鋭い眼差しと共に敬治へと向けられる殺気に、敬治はその口を綻
ばせた。

（違う……こんなの殺気じゃない……本当に殺すつもりなんて無い
んだ……）

彼女の本心が分かったように心中でそう呟いた敬治は、その綻び
をもっと、濃いものにしていく。

「やっぱり、君は優しいんだよ……」

明らかに柔らかな口調になった敬治のその様子を見て、雪乃はビ
クツとその身体を反応させた。

（なんで……笑ってる……？）

敬治の微笑みの意味が理解できない彼女は声を荒げる。

「……何言ってるの？ そんな訳無いでしょ！ わたしはこのキュ
ーブを使って——」

「——違う。君は優しい。『殺せ』って命令が出てるのに俺たちを
殺さないいで、キューブを持って、早く逃げればいいのに逃げない。
それはさ————桐島が、優しいからだろ？」

雪乃の言葉を遮って、自らの意見を述べ終えた敬治に対して、雪
乃はあからさまに敬治から目を逸らした。

（だから、この魔術を見て、キューブを大人しく渡してくれ……）
心中でそう願いながら、敬治は雪乃へと翳^{アライ}していた右手を下ろし、
突っ立ったままの状態になった。そして、敬治はそのA r a iを唱
えた。

「――デンサーDenthur」

その瞬間、敬治の体は大量の光と稲妻と轟音に包まれた。敬治のその姿は眩しすぎ、その周りにいた誰もが目を瞑るか、手を前に翳す事で直接その光を見ないように遮った。

そんな敬治の姿はまるで―――“地に降り立った雷”のようであった。そして、雪乃はそんな敬治の姿を見て、目を大きく見開いた。

（激しい光……雷のような轟音……―）

そう思った雪乃の頭の中には、ある“一つの単語”が浮かび上がった。それは去年から魔術師の間で、囁かれるようになった魔術師の名称。

「――地に降り立った雷のような魔術師……―まさか!？ 斉藤

くんが―――」

その“一つの単語”を告げようとした雪乃の言葉を遮って、敬治は“一つの単語”を告げた。

「――そう。俺が―――降雷の魔術師だ」

α―VIII. サボリ部員（一人目）

「俺が――――降雷こうらいの魔術師だ」

敬治けいじがそう言葉を放った瞬間に部長と雪乃ゆきのはその目を大きく見開いてみせた。

“降雷の魔術師”――その名称はちょうど一年前から魔術を使う者の中で飛び交うようになった。それは、その魔術師が他と比にならないほどの強さを誇っていたからである。その名称は自らの体に降り立った雷を纏い、敵を薙ぎ払った事から語られる事となったらしい。

そして、降雷の魔術師の他にも、紅炎こうえんの魔術師と言う名称もよく囁ささやかれている名称の一つである。

しかし、二人が驚いている理由は他にあった。

去年の『夏の魔術甲子園（仮）』にて、魔術委員会の会長を殺そうと謀った人物――部長と江藤と神津の三人の会話の中で“あいつ”と呼ばれ、雪乃に“あの人”と呼ばれた人物。二人は電撃の魔術を使うその人物の事を降雷の魔術師だと思い込んでいたのであった。だが、二人は敬治を見て思った。あの人・あいつとは明らかに電撃の質が違う、と。

電撃を周りに放電させ、「バチバチ」と言う音を発しながら、敬治は雪乃を睨みつける。

「キューブを返せ」

その言葉に雪乃が簡単に応じるはずなどが無かった。

「……Lamefラメフ」

そのAraiアライを唱えた瞬間に雪乃の刀は炎に包まれ、それを敬治に向けて構えた。

「引き下がれないの……どうしても……」

本当は向けたくはない刀を向けているような口ぶりです。そう告げる雪乃。それに対して、敬治も、自らの周りで「バチバチ」と音を立てている電撃を自らの右手に集め、一本の電撃の刃を作り出した。

そして、雪乃は一気に敬治との間合いを詰めにかかり、炎の刀を振るった。敬治はそれを自らの電撃の刃で受け止める。

炎と電撃がぶつかり合った事により、衝撃が二人の周りにいた全員に襲い掛かる。

雪乃は刀と電撃の刃がぶつかり合う様に眼を疑った。

（なんで……！？ わたしの刀は雷切なのに、電撃が斬れないの！？）

心中で声を荒げる雪乃は刀と電撃の刃を凝視し、気付いた。

（まさか……斬った瞬間に回復してるの！？）

その瞬間、刀を包んでいた炎が消え去り、裸になった刀は電撃の刃に弾き返され、真っ二つに折れ去った。

後方へと尻餅を着く雪乃。その首に向けて、自らの電撃の形を操って創り上げた電撃の刃を突きつける。

「お願いだから……キューブを渡してくれないか……？」

雪乃に殺気を向ける事無く、敬治は少しだけ、微笑んだ。

（この人なら……わたしを救ってくれるかも……？）

雪乃はその表情を見て、少しだけ、そんな希望を抱いたのかもしれない。

彼女の右手に握られていた具現の刀は砂のようにさらさらと空気に溶け込んでいき、彼女はその刀の無くなった右手でポケットの中のキューブを掴んだ。そして、ゆっくりとポケットの中からキューブを取り出し、敬治へと差し出す。

「ありがとう」

それを受け取った敬治は電撃の刃を消し、雪乃に自らの右手を差し出した。しかし、雪乃は訝しげな表情で敬治を見つめ、その手を取ろうとはしない。

その様子からこのままの状態では雪乃が手を取らないだろうと察した敬治は言葉を発する。

「君はキューブを渡してくれた。だから、もう、俺たちの敵じゃない。ただの——部活仲間だ」

その言葉を聞いて、雪乃は自らの両目に涙を浮かべる。

『大量殺人犯の妹が近づくなよ!!』

過去に浴びせられた言葉が雪乃の頭に響き渡り、今の状況との差分だけ、彼女の眼に涙が浮かんでいく。

雪乃は涙を流しながら、微笑んで敬治の手を取った。



体育館

二階にある体育館の窓から、敬治と雪乃の戦闘を最初から最後まで眺めていた男がそこにはいた。その男は昨日、魔術部の行動を一日中、監視して、誰かに電話をかけていた男子生徒であった。

そして、男子生徒はまた、携帯電話を自らのポケットから取り出して、電話帳を開き、昨日と同じ人物へと電話をかけた。

『もしもし』

「電撃の魔術を使う部員は“本物”の降雷の魔術師でした。それに、彼女が魔術部に寝返ったように見えますがどうしますか？」

電話の相手は思案するような間を取って、告げる。

『彼女は裏切らない……いや、裏切れるはずがないんだよ。彼女と俺は“絆”で繋がっているからな』

「……あなたが命じたとおり、今回は手を出しませんでしたが、次はどうしますか？」

『そうだな……次はお前もキューブを彼女と一緒に奪いに行け。そして、彼女に降雷の魔術師を——殺させろ』

「分かりました」

そう答えて、携帯電話の画面を指で押した男子生徒は、携帯電話をポケットの中に入れ、体育館を後にしようと後方を振り返った男子生徒。

今日はバスケット部、バレー部共に試合の為、体育館には男子生徒一人だけ、と思っていたのだが、振り返った先にはもう一人の人物が立っていた。

「誰だ？」

そう尋ねかける男子生徒だったが、もう一人の人物はその言葉を聞いて、嘲笑った。

「ああん？ それはこっちの台詞だろうがよお。A級犯罪者あ」

もう一人の人物は、髪をワックスで立て、学ランを第二ボタンまであけ、そこから覗かせているのは赤いTシャツ。身長は髪の毛を合わせたら、一九〇はありそうだが、実質、一八〇センチしかない耳にはピアスをし、その姿はいかにもヤンキーだった。上靴の色は赤で、二年生だという事が分かる。

「A級？ 何の事だ？」

ヤンキーの男の単語を繰り返した男子生徒に対して、ヤンキーの男は声を荒げる。

魔術で犯罪を犯し逃亡した者——指名手配犯には、『S・A・B・C・D・E』の級が与えられる。Sが一番危険な級で右に行くほど下がっていく。

この級を判断するのは魔術委員会で、魔術法に則^{のっと}って判断されている。

そして、ヤンキー男の目の前に存在する、さっきまで電話を掛けていた男は正真正銘、魔術委員会によってA級の指名手配犯に指定されていた。

「惚^{とぼ}けてんじゃねえぞ、クソ野郎！！俺が誰だか分かって言ってるのかあ？」

ヤンキーの男は自らのポケットから一冊の手帳を取り出し、犯罪者の男へとその表紙を見せ付けた。手帳の色は黄色で、表紙には“生命の樹”の絵が彫られていた。

その手帳を見た瞬間に犯罪者の男はヤンキーの男を殺気を以って睨みつける。

「“委員会”の人間か？」

「そう。俺は魔術委員会けんの委員兼、東坂高校二年“魔術部所属”——
——たなきしゅん 棚木淳だ。よく覚えとけよ？ てめえを捕まえる奴の名だ」

「……もう、忘れた」

右手を自らの前に出す犯罪者の男に対して、棚木も自らの右手を前に突き出した。

「いいねえ……イラつく奴の方が甚振り甲斐があんだよ！ それに残念だったなあ。今日は晴れだが、計算するのがめんどいとは思えねえんだ！」



体育館横

「ちょっと待って！ 敬治君！ 彼女はキューブを奪おうとしたんだよ！ 魔術委員会に引き渡さなきゃいけないんだ！」

「部長ってもう少し、器の大きい人と思ってましたよ……」

「いや、それとはまた、話が別で！ てか、敬治君も清二君みたいな話し方にならないでくれよ！」

必死に声を荒げる部長に敬治は冷たい視線を浴びせた後、その視線を部長の腹に落とした。

「と言うか、早く保健室に！」

「それどころじゃないんだって！ 早くここから離れないと！ 敬治君まで————！」

その先を言おうとしたその瞬間、大きな爆発音が三人の真上から

響き渡り、砕けたガラスが三人の上から襲い掛かった。

「伏せて!!」

その声を上げた部長に従って、敬治と雪乃は同時に頭を腕で覆い、地面に伏せた。

一通り、ガラスが落ちてこなくなったと言う頃合を見計らって、顔を上げる敬治は、自らの頬がガラスによって切られている事に気が付く。

（今の爆発……何だったんだ……？）

ゆつくりと横の建物の二階にある体育館を見上げる敬治。そして、体育館の建物の影から、一人の人物が姿を現し、頭を掻きながら文句を垂れる。

「くそ……取り逃がしちゃった。こりゃあ、いろいろと書類を書かなきゃいけないなんじゃねえか、あのクソ野郎」

その男は先程、体育館で携帯電話を持った男と対峙していた人物——柵木淳であった。そんな柵木の姿を見て、部長は苦しい表情を浮かべる。

「淳君……」

「おい、部長。まさか、“そいつら”の肩持つ気じゃねえだろうな？」

先輩なのにも拘らず、口調を変えずに話す柵木は敬治と雪乃を睨みつける。

「ちよっと、待ってくれ! 『そいつら』って事は敬治君も入るってことだろ!？」

「そーだよ。その生意気な新入生二人。キューブを狙った奴らとして、魔術委員会に引き渡すんだよ」

（えっ!？ 俺も……?）

「ちよっと、待って! なんで俺も!？」

「先輩に向かってタメ口たあ、生意気極まりねえガキだな。共謀者の意見が聞き入れられると思うなよ?」

柵木は自らのポケットから先程、男子生徒に見せ付けていた手帳

を取り出し、敬治にその表紙を向ける。そして、敬治が今まで聞いたことの無い *Arai* を柵木は唱えてみせた。

イストラリント
「E s t r a r i n t」

瞬間、敬治と雪乃は光の帯によって両手両脚を拘束され、バランスを崩した二人は地面に倒れこんだ。

「聞いたことねえ魔術って顔してるぜ、てめえ？ そうだ。これあ、俺たち委員会の人間しか持ってねえ手帳による拘束魔術。手足を拘束すると同時に魔術も使えなくするから、てめえらはただのちよつとだけ頭の良いただの人間でことだ！」

人を見下す笑みを浮かべる柵木の胸倉に部長は掴みかかった。

「笑い事じゃない！ 雪乃ちゃんはどうがなとしても、敬治君はただ、彼女を許そうとただけだろ！？」

「犯罪者を許す？ おいおい、それだけでも精神異常者か共謀者じやあねえのか、部長？ この世に蔓延^{はびこ}る殺人鬼を肯定するなんてなあこの二つの異常者以外、ありえねえんじやねえか？ そして、俺の独断と偏見を以って、こいつを共謀者と判断した次第だ。抗議するんなら、委員会を通さねえと受け入れられねえぜ？」

（独断と偏見……こんな奴が、委員会の人間……？）

今の魔術委員会の仕組みに疑念を持ち始める敬治を柵木は見下ろしながら、言葉を続ける。

「てえことで部長は早く保健室か病院行ってる。刀傷は簡単には塞がらねえから失血死しちまうぜ？」

耳に嵌めたピアスを揺らしながら、柵木は地面に倒れた敬治と雪乃の方へと近づき、雪乃の前で立ち止まって、腰を屈めた。そして、雪乃の顔を右手で掴み、その左眼を凝視する。

「ほう？ これが魔眼かあ……“紋章の円が七つ”って事はてめえが言ってたとおり、具現で確実だな。じゃあ、俺はこいつらを魔術委員会に連れて行くから、部長は体育館の窓の件とかの後処理を頼むぜ？」

「ちよつと待つんだ、淳君。君が自分の権力を振るうって言うんな

ら、俺も権力を振るわせてもらう。君が二人を連れて行くって言うんだったら、君には――魔術部を退部してもらう!!」

その言葉が響き渡った瞬間にその場の空気が一瞬だけ、時を止めた。

（この人が魔術部に入ってるけどサボってる人の一人だったのか……そう言えば、さっきから「部長」って言ったっけ？）

敬治は心中で「嫌だなあ」と付け足した後、柵木に視線を向ける。そして、面倒くさそうに頭を掻いた柵木は口を開く。

「てめえ、魔術部に入ってるやないと、委員会の人間にはなれないって分かって言ってるそういうところがムカつくんだよ……」

体育館の窓ガラスが割れた音を聞きつけた人間が段々と、四人の周りに集まってくる中、柵木は何かを思いついたようで、言葉を続けた。

「そうだ。こうしようぜ、部長。俺とこの二人が魔術で決闘。俺が勝ったら、こいつらを連れてく。負けたら、罪を見逃す。どうだ？」

「……その決闘はいつするんだ……？」

「はあ？ 決まってるんだろ？ 次に雨が降った日に外で戦^やんだよ！

逃げたら、どこまでも追いかけて、豚箱にぶち込んでやるからな！？」

にやりと口元を歪めてみせる柵木は敬治へと近づいて、その手からキューブを奪うと、どこかへ行ってしまった。

そんな彼が見えなくなった瞬間に敬治と雪乃を拘束していた光の帯は消え去り、二人は解放された。そんな二人に自らの頭を下げる部長。

「ごめん……こんな事になってしまって……」

「いえ、謝るのはわたしです、部長さん。わたしが命令に従わなかったら、こんな事にはなってません……」

「なら、雪乃ちゃんは『無理やり従ってた』って事？」

彼女は躊躇うような素振りを見せ、小さく頷いた。

（まだ、信じる事はできそうに無い……けど、色々と、情報を持っ

てるはずだ。それを聞き出せば良い。それよも、この中に先生でもいたら、ややこしく……)

心中でそう企みながら、部長は周りにいる集まってきた野次馬を見回すと、その中には先生の姿も見受けられた。

「藤井。この説明は保健室でちゃんと、してくれるんだろうな？」

「……はい。一から全て……」

（俺は巻き込まれた。そう。大型の台風に巻き込まれてしまったのだ）

自分が置かれている状況をそうやって心中で例えてみせる敬治は保健室で頬の傷にガーゼをしてテープを張ってもらい、帰路についた。それから、家に帰りつき、どっと押し寄せてきた疲れに逆らうことなく、ベッドの枕に顔を埋める。

今の時刻は午後五時半。こんな時間に敬治が帰ってきた理由は体育館の窓ガラスと部長の怪我の事の関係者として、先生に色々と質問されたからであった。

そして、この事件によって、斉藤敬治と言う名を知らない先生はいなくなった。

（最悪……明日、学校行きたくねえ……）

溜息を吐いてみせる敬治はベッドの枕から顔を上げて、持って帰って来た現代文のノートを見つめた。

「予習しないと……」

独りでにそう呟いた敬治は制服から普段着に着替えて、明日の課外にある現代文の予習を黙々と熟すのだった。しかし、棚木との決闘の事は敬治の頭の中から離れる事無く、ぐるぐると回り続けた。

そして、七時のニュースの前にテレビであっていた天気予報を見て、敬治は大きな溜息を吐く事となった。

（明後日……雨じゃん……）



次の日

『おいおい！ 次の雨の日に魔術部で決闘だつてよ！』

『何でも、ガラの悪い棚木と新入生の二人が闘^やり合うらしいぜ？』

『雨の日いつー？』

『明日雨だろ？』

『てか、どこでやんのよ？』

決闘を含め、昨日の事はもう、殆ど学校中に広まってしまったと言っても過言ではない状況下の中、敬治は周りの眼を気にしながら、学校に登校する。

（視線が痛いー……！）

入学してきた当初よりも更に体を縮こまらせながら、歩く敬治には自転車置き場から教室までの距離が異様に長く感じられた。

やっこの思いで教室に着いた敬治が教室に入っても、外と同様の視線は続いたままであり、居場所がなくなってしまった事を実感した敬治は横七列にそれぞれ六個の机が並んだ教室の入り口から三列目の一番後ろの席に着いた。その後、鞆の中から現代文の教材を取り出して、鞆を机の横に置いた。

敬治は課外の始まる時刻までの間、机に両腕をつけ、その両腕の中に顔を埋^{うず}め、寝ているフリをした。

その間、敬治はクラスメイトによる「ひそひそ」と話している言葉^{言葉}を聞くこととなるのであった。

授業開始のチャイムが鳴り響き、教室に先生が入ってくるのと同じ時に顔を上げた敬治の眼に映ったのはさっきまで疎^{まば}らだった席が全て、クラスメイトによって埋められていた光景であった。

（うっ……！）

いつもどおりの光景のはずなのに気圧されそうになった敬治は、自分の心を落ち着かせながら、自分に言い聞かせる。

（大丈夫……授業に集中しろ！）

「起立！」

学級委員の掛け声と共に敬治は自らの席から立ち上がった。



昼休み

朝からの敬治への視線は未だ、続いている。その為、敬治は鞆の中から弁当を取り出しても、食べ物が喉を通らないような感じがして、蓋を開くのをやめた。

そんな敬治の席の前で立ち止まる一人の女子生徒。

敬治はゆっくりと自らの顔を上げて、その人物を確認すると、「ほっ」と安堵の息を吐いた。

そんな敬治の前に立っていた女子生徒は左眼に白い眼帯を付け、昨日の色々な出来事の元凶である人物——桐島雪乃であった。

「斉藤くん……前の席、大丈夫かな？」

そう言って、手に持っていた弁当を敬治に見せ付けて尋ねる雪乃に敬治は小さく頷いた。その応えに雪乃は微笑んで、前の席の椅子を敬治の机の方へと向けて、敬治の机に弁当を置く。

(なんか……恥ずかしいな……)

少し顔を赤らめて、頭を掻く敬治に雪乃は釘を打つように告げる。「天気予報だと、明日は雨だね。捕まらない為には勝つしかない……って事で作戦会議しよっ！」

頷いてみせる敬治の考えは安易であった。「捕まるわけがない。自分は何もしていない」と言う甘い考えが未だ、その頭の中に残っている時点で“負けは決している”といっても過言ではなかった。何故なら、柵木は——

「まず、あの決闘を申込んだできた委員会の人……あの人の顔、『どこかで見た事あるなあ』って思ってた昨日調べてみたら、やっぱりそうだった……あの人——白雨はくうの“称号”を持った白雨の魔術師なんだよ」

「——ッ!？」

そう。柵木は白雨の魔術師であった。

“称号”とは魔術委員会によって与えられるもので、敬治は“降雷”、雪乃は“具現”と言う称号を与えられている。

称号は全ての魔術師に与えられるものではない。まず、高校生以下の者にしか称号は与えられない。そして、称号を与えられる魔術師はその称号のような強さを伴わなければならない。

称号を与えられた者の称号とその名は魔術委員会が所持している名簿か、噂で確かめるしか方法は無い。その為、噂によって降雷の魔術師は敬治ではなく、谷崎として語られていたのであった。

（白雨って事は水の魔術を使うって事だろ……？ とすると、雨の日って………全ての場所が、奴の領域………）

深刻な表情で考えている敬治。雪乃はそんな敬治に対して、笑顔で接した。

「大丈夫だよっ！ 力を合わせれば、倒せない事なんてない。だから、作戦会議、今からするんだよっ！」

「ちょっと、待ってくれ……そんな簡単な話じゃないんだ……」

苦笑いをその顔に浮かべる敬治をクエスチョンマークを頭から出しながら眺める雪乃。

「……俺の電撃の魔術って、雨の日は————弱いのか使えないんだ……」

「えっ？」

表情を固まらせる雪乃はその理由を尋ねる。

「なんで……？」

「雨の日には発動する魔術の強さ分だけ、俺にも電流が流れるんだよ……」

雨の日の自分の無力さに溜息を吐いてみせる敬治に対して、雪乃は微笑みながら告げる。

「お願い。我慢して？」

「えっ！？ いや、無理！ 俺、雨の日に強い魔術発動した時、死

にそうになったんだよ!？」

「それでもやるしかないよっ! わたしが言うのもなんだけど……勝たないと、捕まっちゃうんだから!」

しぶしぶ首を縦に振る敬治は弁当に入っていたウインナーを口にしながら、尋ねかける。

「で、どんな作戦であいつと?」

「うん! 全く、考えてないの! だから、作戦の後に“会議”って言葉を付けてるんだよっ!」

「そうですか……」

期待薄の雪乃の言葉を軽く受け流しつつ、敬治は弁当のおかずを口に持って行き、思案する。

(相手は水。こっちは電撃と具現……てか、具現ってそもそも、どんな魔術なんだ? 自分が思った物を具現化できる能力なのか……?)

その疑問に至った時、敬治はある事に気づき、笑った。

「どーしたの?」

「いや……お互いの能力も詳しく分かってないのに、共闘なんてまづ無理なんだよ。けど、お互いの能力を言い合おうにも、昨日の件もあるし、俺はお前に自分の能力を話すなんてまっぴらごめんだ。お前だってそうだろう?」

箸の動きを止め、黙りこくる雪乃を見て、敬治は言い放つ。

「俺はお前を信用しきれてねえ。こうやって接してるのも、俺が本気を出せば、お前を止める事なんて造作もないから。明日は、個人でやりたいようにやろう」

小さく頷く雪乃の様子を見た敬治は弁当を食べながら、自分の行動を反省する。

(そう。こいつはまだ、信用できてない。なのに、雨の日には弱い魔術しか使えないなんて言っちゃまった……自分の弱点を吐露するなんて、最悪だ)

向き合って弁当を食べているのにも拘らず、黙々と箸を動かすそ

の状況にしぶれを切らしたのか、雪乃は口を開いた。

「わたし……まだ、入部届出してないんだけど、今日も部室に行っていないのかな……？」

「俺はやめといた方がいいと思う。また、キューブを盗られちゃかなわないだろうから」

顔を俯けながら頷く雪乃を見ながら、敬治は自らが言った言葉を思いだす。

『君はキューブを渡してくれた。だから、もう、俺たちの敵じゃない。ただの——部活仲間だ』

（そんな事言っときながら、俺は酷い奴だな……希望に出会えたような表情した桐島をまた、拒むなんて……）



放課後

敬治は鞆の中に教材を詰め込み、日曜日に取りに行ったときにはならないよう、机の引き出しを最後に確認してから、鞆を持って、教室を後にした。

少し重い足取りで、階段を上って、二階にある魔術部部室の前まで来た敬治はそのドアの前で深呼吸をしてから、ドアをノックした。開かれるドアから顔を出したのは、魔術部副部長の江藤であった。「敬治君！ 昨日はその、大変でしたね……でも、今日は特にやる事ないんです。帰って、ゆっくり休んで、明日に備えて下さい」

「分かりました」

と帰ろうとする敬治を引き止めた江藤はその耳元で囁いた。

「明日は『やばい』って思ったら、すぐに降参した方がいいです。棚木は人一倍、正義感が強い人ですから、悪は徹底的に根絶やします……」

敬治はその言葉を“本当の意味”で理解していないまま、頷いた。



東京都 魔術委員会本部

東京都に設置されている魔術委員会の本部。その建物は十六階建てで委員たちによる会議も行われる。そして、その建物には地下施設も備わっており、その全てが魔術犯罪者の留置場となっている。

何故、魔術犯罪者の留置場が此処に設置されているのかと言うと、それは魔術を用いての脱走をさせないためであった。

地下施設には常時、特殊な結界が張られており、その円の数は限りなく十五に近いものになっているが、十五にはなっていない。

そんな地下施設の最下層。そこには一人の終身刑と言う判決を下された一人の男が収容されていた。

男は手足を何重もの拘束魔術で拘束されており、周りにも何重もの結界が張られている。そこまで、嚴重にしなければならないほどの危険な男の年齢はまだ、二十歳。そして、此処に収容されて五年もの時が経とうとしていた。

五年もの間、切られていない髪は伸びきっており、その伸びた前髪から覗かせている眼光は目の前にいる存在を睨みつけている。

「俺の死刑が決まったってゆー知らせか？ それとも、ここであるが殺してくれんのか？ “会長さん” よお？」

「死刑になるって事は、お前さんがわしが死ぬまで無い話じゃろうな。今日は一つ、お前さんに聞きたい事があってのう。こうやってはせ参じた次第じゃ」

自らの伸びた白い顎鬚あごひげを触りながら、睨み返すこともせず、ただ、友人と話すように対応する老人は丸い眼鏡を掛け、頭には黒いハットを被っており、それに似合うように黒いスーツを着ている。以外にその姿が似合っている老人は魔術委員会の会長であった。

その為、会長の横には二人の護衛が付いており、その二人を順に

眺めていく男。

「おいおい。この前の事であんたも分かってんだろ？　なんで、また二人も引き連れて来やがったんだ」

「わしはいらんと言うておるのじゃがのう。勝手について来たんじや。わしを守って死ぬんが正しい事だと思うておる」

「そりゃあ、愉^{たの}しい奴らじゃねえかよお」

長い髪から覗かせている口をにやりと大きく歪めてみせる男。その瞬間、会長の横にいた二人の男の身体から黒い炎が発せられ、二人の男は叫ぶ間もなく、灰になった。

「多分、此処に入ってきて平気なのはあんただけだろうぜ、会長さんよお？　そんなあんたが張った結界だから、俺は此処から五年も出られてねえ。自慢していいと思うぜ？」

「ロクな自慢にならんじゃろうがな。さて、本題といこうかの」
自らの目つきを鋭いものに変え、会長は男に対して、尋ねる。

「お前さんは何故——大量の人を殺^{あや}めたのじゃ？」

「はっ！？　そんな愚問はあんただけでなく、何人から何度も尋ねられた。それに、あんただって分かってんだろ？　俺が狂ってるってよお！？」

「違う。わしが聞きたいのは真実じゃ」

何か考え込むように黙りこくる男をじっと見つめる会長は自らの顎鬚を触る。一向に口を開かない男に会長は自らの口を再度、開いた。

「なら、違う質問をしよう。お前さんには確か、“妹”が居ったな？　その所在がやっと、掴めた」

自分の眉毛をピクリと動かした男はその表情を少し、安堵させた。
「で、あいつは今、どこで何してんだあ？」

「お前さんと同様の“S級犯罪者”の下で駒として扱われておる。

まあ、明日には逮捕するがのう」

「……フハハッ……ハッハッハッハッハッ！！　面白れえ……面白れえぞ！　会長さんよお！！」

笑いながら、大声で言葉を発する男は急に笑うのをやめて、真剣な表情で言葉の続きを紡ぐ。

「知ってるかぁ、会長さんよお？ あいつを創り出したのは――」

―この俺なんだぜ？」

そう言い終えた瞬間にまた、笑い出す男の姿は狂っていた。

「創り出した」？ どう言う事じゃ？」

「説明してもあんたには意味が分かんないだろうぜ？ ってことで説明しても無意味だから、言わねえよ。これ以上、此処にいたって得られる情報はないぜ、会長さんよお？」

その言葉を聞いて、会長は最下層の一室を後にしようと、男に背を向けた。すると、もう何も言わないと言っていた男は急にその口を開く。

「俺が何故、大量の人を殺したって質問。少しだけ答えてやるよ。俺は人類に痛みを伴った教訓を与えてやった。それだけだぜ？」

「教訓……じゃと？」

疑問に思った単語を繰り返す会長であったが、それ以降、男は反応を見せない。

会長は男に背を向け、部屋から出ていった。

部屋に残ったのは一人の髪の毛の伸びた男と、灰と、拘束魔術と結界だけであった。

「あんたさえ殺せば、俺は此処から出られる……」

男は髪の間から覗かせる口元をにやりと歪めてみせた。



次の日

朝起きた敬治^{けいじ}は窓の外の生憎な天気を見て、溜息を吐いてみせた。
(今日、どこでやるんだろ……やっぱ、外だろうな……)

春先の冷たい雨に打たれ、風邪を拗^{こじ}らせるかもしれないと言う心配をしながら、敬治は学校へと行く準備をし、レインコートを着て、自転車で学校へと向かった。

（負けたらどうなるんだ……？ 東京の魔術委員会に連れて行かれるのか……？）

自転車のペダルを漕ぎながら、負けた時の事を考えていた敬治は信号に引っかかって立ち止まったところで、頭を左右に振り、そんな考えを払おうとする。

学校に着いた敬治は自転車置き場の二階に自転車を置き、体育館横の道を通ってU字の縦の二本の左の校舎の中へと入った敬治はそこで偶然、魔術部部長である藤井と会った。

「部長！？」

「敬治君……！？ えっと……今日はホントに頑張っただけ！ 『絶対に負けられない戦いが、そこにはある』よ！」

「いや、サッカーじゃないですし、そんな簡単に済ませて良い話でもないんですけど……」

苦笑いする部長のそんな表情を見て、敬治はある事を思い出した。「そう言えば、部長たちが言ってる“あの人”について教えてくれるって言う約束でしたよね？」

意表を突かれたような表情をする部長に顔を詰め寄らせる敬治であつたが、部長はそんな敬治から目を逸らす。

「ごめん……あの時はああ言っただけ、本当は話すことができないんだ……」

「……部長の嘘つき」

そう言って、部長の横を通って、教室へ向かおうとする敬治は部長の横で立ち止まる。

「一つだけ尋ねさせてください……“あの人”って言うのは谷崎って人の事ですか？」

沈黙する部長。それは敬治に対して、「Yes」と答えているのと同等の行動であつた。

「分かりました……」

敬治が足を前に進め始めるのを皮切りに部長は口を開く。

「敬治君！ ちゃんと時期が来たら、話すから！」

（「時期が来たら」って……その時期っていつなんだよ……）

拳をぎゅっと握り締めながら、敬治は答える事無く、教室へと向かった。

教室に入った敬治は桐島がちゃんと学校に来ている事に安堵しながら、自分の籍の机に鞆を置き、椅子にその腰を下ろした。

するとその瞬間にタイミングを見計らっていたかのように一人の男が教室に入ってきて、敬治を見つけるなり、敬治に近づいてきた。「斉藤敬治い。今日の放課後、人工芝グラウンドに来い。来なかったら、即、てめえら二人は豚箱行きだぜ？」

敬治の目の前に立って、そう告げる人物は白雨の魔術師である棚^{なぎゅん}木^{はくう}淳^ただった。

その髪はこの前のようにワックスでツンツンに立っており、学ランの第二ボタンまでを開け、そこから覗かせているのは黄色いTシャツ。耳には金色のリングのピアスをはめている。

その姿に圧倒される一年八組のクラスメイトたちに対して、敬治はそんな姿の棚木を睨んでいる。

「はっ！ そんな眼ができるって事は逃げる気はねえようだな？」

クソ野郎。ああ、それと忘れてたが、傘なんてモンはいらねえからな？」

「風邪引いた場合の責任はとってくれるんですか？」

「いちいちうるせえ奴だなあ。心配しなくても、雨に濡れたりなんかしねえよ」

雨に濡れない……？ どう言う事だ？

面倒くさそうに教室から去っていった棚木を確認した後、その目を外の風景へと移す敬治。その目に映ったのは、来た時と何ら変わっていない土砂降りの風景だった。

（雨に濡れさせない……そんな魔術が使えるって事か……？）

そう疑問に思う敬治の頭に過ぎったのは棚木が白雨の魔術師だと言う事であった。それだけで全ての疑問が解消された。

（称号を貰ってるんだ……何をやったとしても、おかしくはない……

…)

「斉藤くん……傘いらないうって……?」

敬治の席へと近づきながら、そう尋ねかける雪乃。それに対して、敬治は昨日のきつく当たってしまった事を反省しながら、表情を綻ばせながら答える。

「理由は分からないけど、そうみたい。俺たちは黙って、あいつに従おう」

「うん……」

◇

放課後

朝から降り続いている雨はその強さを増しても劣らせてもおらず、未だ土砂降りの状態が継続していた。

敬治は自分の鞆を教室に置いて、雪乃と一緒に教室を出て、人工芝グラウンドへと向かう。そんな二人の後には魔術部の戦いを見ようとしているギャラリーたちがついてきていた。

U字の縦の左の校舎から出るのと同時に、二人は目の前の光景に目を大きく見開かせた。

「な、なんだよ……これ!? 水の屋根……?」

校舎横の屋根がついていて、雨に濡れない道をゆっくりと歩きながら、疑問を口にする。

敬治の眼のその眼に映る光景は、地上から五メートルくらい離れた一線で雨が溜まっている光景。まるで、その一線が地面だとも言うように雨はその一線よりも下には行かず、溜まっていき、人工芝グラウンドには一滴たりとも降り注がない。

そんな水の屋根は人工芝グラウンド全体に広がっており、その人工芝グラウンドの中心には柵木一人が座って、存在していた。そう。柵木一人だけで、ギャラリーは人工芝グラウンドの中には一歩も立

ち入っていない。

（結界か……）

そう思って、雪乃の方へと目を向ける敬治。雪乃も敬治の方へと目を向けて、頷いてみせ、左目に付けた白い眼帯を外して、七つの円の紋章が刻まれた左眼を露にする^{あらわ}。そして、右手に刀を具現化させ、人工芝グラウンドに張られた結界を刀でなぎ払った。

「Sundob of a cserad lapec」
サンドアップ オブ ア クセレット ラベック

二人が人工芝グラウンドへと入った瞬間にArai^{アライ}を唱え、再度、人工芝グラウンドにギャラリーが入ってこないようにした柵木は立ち上がる。

「そこで止まれ。犯罪者二人」

雪乃と敬治がゆっくりと柵木へと近づき、二人と柵木との距離が八メートルくらいになったところで柵木は二人を止まらせる。

「ルールは簡単。俺が倒れたら、てめえらの勝ちで魔術委員会には連れていかねえ。てめえら二人が倒れたら、俺の勝ちで魔術委員会に身柄を引き渡す。いいな？」

頷かない二人を睨みつける柵木は淡々と話を進めていく。

「じゃあ、俺が三つ数え終えたら、始めるぜえ？　ひとつ」

右手を突き出す敬治。

「ふたーっ」

右手に持った刀を両手で持ち、構える雪乃。

「みーっ」

構える事無く、突っ立ったままの状態の柵木に対して、敬治と雪乃はすぐさま、Arai^{リセレクト}を唱える。

「Ri c e l e c t c h o s k」
リセレクト チョスク

「L a m e f」
ラメフ

激しい電撃が柵木に向けて蛇行していく。その電撃が柵木へと当たりそうになった時、やっと、柵木はArai^{ニア}を唱えてみせる。

「N i a r」

その瞬間、空を覆いつくす水の屋根から多量の水が柵木の前に落

ちていき、柵木の代わりに電撃を受けた。雪乃はこの機を狙って A r a i を唱えた事によって炎を帯びた刀を柵木に向けて振るい、刀身を放れた炎は柵木を襲うべく突き進む。

「N i a r^{ニアー}」

再度、その A r a i を唱えてみせる柵木の前に今度は炎を包むように大量の水が水の屋根より落ちていき、炎を沈下させた。

「あークソがあ。見ててイライラすんだよなあ……てめえの電撃の魔術はよお!!」

声を荒げる柵木に対して、敬治はもう一度、唱えようとしていた A r a i を呑みこんだ。

（ちよつと待て……? “電撃の魔術を見てて、イライラする”だと……?）

柵木の言葉に引っかけかりを覚えた敬治は柵木に尋ねる。

「どう言う事ですか? 電撃の魔術がイライラするって……」

「ああん? まだ、気づいてねえのか? 去年の夏。会長を殺そうとした奴はこの学校の魔術部の部長で、しかも、電撃の魔術で殺そうとしやがった! 俺は悪を許さねえ……根絶やしにしてやる!

だから——電撃の魔術を使うてめえは、俺の中じゃあ凶悪犯罪者なんだよ、クソ野郎!!」

「そんな……電撃の魔術を使うからって……」

「てめえら二人は存在してるだけで罪なんだよ! なあ? 桐島雪乃?」

敬治の隣にいる雪乃を睨みつける柵木と同時に敬治も雪乃の方へと目を向ける。すると、雪乃の刀を持った両手は震えていた。

「桐島……どうした……?」

雪乃を心配する敬治の言葉も今の雪乃には届いていなかった。

そんな雪乃の様子を見て、にやりと口元を歪める柵木。

「おいおい。そんな反応見せることもねえだろうがよお!? どうせ、“五年前から”相応の扱い受けてきたんだろ?」

「やめて……それ以上、言わないで……」

「大変だったなあ？ 兄貴が犯罪者だとよお！」

「……やめて」

「しかも、その犯した罪は——」

「——やめて!!」

柵木の言葉を遮るようにそう叫んだ雪乃は炎を纏った刀の切っ先を右下に向けて、柵木の方へと走り出す。そして、刀の届く間合いに差し掛かったとき、雪乃は刀を右下から左上に振り上げた。

しかし、その刃を簡単に避ける柵木は彼女の両手に打撃を与え、刀を落としたところでその首を右手で掴んだ。そんな右手に力を段々と入れていく柵木。

「兄が兄なら、妹も妹だなあ？ 仲良く犯罪者に成り下がっちゃってよお!？」

「どう言う……意味だ……?」

大きく目を見開いた敬治は柵木に問いかける。敬治には自分の頭の中に雪乃を助けに行くという考えを浮かばせる余裕などなかった。ただ、敬治は“五年前”と言う単語に驚愕するしかなかった。

「ああ？ そのまんまの意味だぜ、降雷？ 五年前。野球を見に来ていた観客三万人の内の彼の周りにいた五千人もの人々を消した人物——桐島尚紀なつきの妹が、こいつなんだよ!!」

「——!!? 嘘……だろ……?」

「嘘吐く意味があんのか？ クソ野郎。正真正銘、こいつはあの大量殺人犯の妹だぜ?」

首を絞めていた右手を放し、雪乃を敬治の方へと突き飛ばした柵木。咳き込む雪乃へと視線を移す敬治を一瞬見た雪乃はすぐさま、その目を逸らした。

水の屋根に落ちていく雨の音が、ギャラリィたちの言葉をかき消していく。

「桐島……あいつが言ってる事は……本当なのか?」

その質問に答える事無く、ただ、雪乃は押し黙ったまま動かない。「降参するか？ それとも、あそこで見てるギャラリィたち全てを

兄貴と同じように消すかあ？」

柵木のその言葉を聞いた瞬間に一斉に三人の戦いを見に来ていたギャラリーたちが騒ぎ始め、殆どの生徒たちが人工芝グラウンドから離れ始めた。

「皆、てめえって言う存在に恐怖してんだよ、桐島あ？ 五年前からこんな仕打ち受けて生きてきたんだろ？ “犯罪者の妹だ” ってなあ！ 高校に入って、やっとそれも薄れてきたと思ってたら、思わぬ誤算だったなあ？ はっはっはっはっ——！！」

笑い声を続けていく柵木に対して、敬治は段々と拳を握る力を強めていく。

「大勢の前で……言う事ないだろうが」

（そうだ……こんな大勢の前で打ち明けていい真実じゃない……！）
自らの奥歯を「ギリッ」と鳴らす敬治の拳の周りに小さな稲妻が発せられる。

「ああん？ なんか言ったか？」

「こんなところで言っている話じゃねえだろうって言ってんだ！！」

叫ぶ敬治を睨みつける柵木と俯けていた顔を上げて、敬治を見る雪乃。

「……犯罪者が調子に乗ってんなよ！！ N i a r !^{ニア}」

柵木がそのA r a iを唱えた瞬間に敬治の真上から、大量の水が落ちていき、敬治はびしょ濡れになった。

「これでてめえは電撃の魔術を使えねえだろ？ 情報は簡単に教室なんかでしゃべるモンじゃねえなあ！ 降雷！」

苦しい表情を浮かべる敬治がA r a iを唱えようとした時、雪乃は敬治のその手を掴んだ。

「わたしが戦うから、大丈夫……ちょっと下がってて」

A r a iを呑みこみ、後ろに下がった敬治を確認した雪乃はもう一度、両手に刀を具現化させる。そして、唱えた事のないA r a iを唱えた。

「F e l l i h e r^{フェリハー}」

瞬間、さつきよりも激しい炎が刀身を包み込み、その炎は空にある水の屋根にまで迫っていた。

「ふーん……“業火”まで使えるとはなあ」

にやりと口元を歪めている棚木は余裕の表情でそう呟いた。

瞬間、雪乃は炎に包まれた刀の切っ先を空に向けたまま、柵木の方へと走る。その眼差しはさっきのように柵木に直視しているようで心中では目を逸らしているものではなく、一心に柵木の動きだけを見ていた。

（わたしは……あんなお兄ちゃんなんかとは違う！！）

心中でそう反論しながら、柵木との間合いが炎が接する間合いまで迫った時、雪乃は刀を柵木に向けて振るった。

（“業火”を防ぐにゃあ、“ただの雨”じゃあ役不足か？）

迫り来る炎の刃を前に冷静にそう判断した柵木は右手を真上から真下に落とすような動作をしながら^{アライ}Ar aiを唱える。

^{ズリデリーズ}「Z r i d e l z」

その瞬間、空中に浮かぶ大量の雨水の四分の一が一線を越えて下に落ち、一瞬にして柵木の周りに集まって雪乃の炎の刃とぶつかり合い、爆発音を発した。

辺りは水蒸気に包まれ、敬治は二人の姿をその目で確認できない。
（どうなったんだ……！？）

水蒸気が晴れるまでの数秒間。敬治は濡れている自分の姿を見ながら、無力さを噛み締めるしかなかった。そして、水蒸気が晴れて目の前がクリアになった敬治の眼に映ったのは――

「具現つつつても、キューブほどじゃねえって事か？ それとも、まだ、未完成か……？」

――何事もなかったかのように佇んでいる柵木とその目の前にずぶ濡れになって横たわる雪乃の姿であった。

「桐島！？」

「別に驚く事もねえだろ？ こんな状況になってるのは偶然じゃねえ。必然だぜ？」

「……なんで……？」

「経験の差。俺とてめらの場数は天と地、月とすっぽん。だから、てめらの魔術には工夫ってモンが見られねえ。それじゃあこの世の中はあ生きていけねえ。いや、生きる価値がねえ！それに、魔術師の決闘の時にゃあ、“普通なら最初に結界を発動する”はずだぜ？まあ、多く経験を積んでる奴あ発動しないがなあ？」

指摘する柵木は目の前に倒れた雪乃へとゆっくりと近づいていく。敬治は柵木の言葉を聞いて、ある事に疑問を抱いた。

（俺は結界は発動しない。けど、桐島はあの時は発動してたけど、今日は発動しなかった……なんで？意味があるから、発動しなかったのか……？）

……意味。メリットがあってした事。メリット。利点。魔眼……？）

魔眼と言う単語が頭に過ぎった時、敬治の頭の中は何か弾けたような感覚に包まれる。

（魔眼にはそれ相応の代償・条件があるって文書に書いてあったの読んだ事ある……なら、具現魔眼を発動するための代償・条件が手で、自分の肌で触れる事だったらどうだ……？）

……それなら俺の時は……——そうか！桐島はあの時もう、俺の電撃の魔術に対抗するための雷切を持ってたから結界を発動したんだ……！）

敬治がそう気づいた時、柵木は倒れた雪乃の目の前に立っていた。哀れむように雪乃を見下す柵木だったが、その耳は確かにその言葉を聞いた。

「わたしって——記憶力だけはいいの」

その言葉は倒れている雪乃から呟かれたものであり、柵木が「そうだ」と理解するまでの三秒間。その間に雪乃は起き上がりながら両膝を地面に着いて、右手を柵木の目の前に突き出して、“柵木がさつき唱えたArai”を唱えた。

ズリデリーズ
「Z r i d e l z」

雪乃の右手から放たれた水の水圧の強さに、柵木は後方へと飛ば

され、地面に叩きつけられる。

「具現の魔眼は物体を具現させるのには代償は要らないけど、魔術を具現化させるのにはわたしの肌でその魔術に触れる必要があるの」
（具現だから、理解なんて必要ない。想像して、Araiを唱えるだけで相手の魔術を具現できる……！？ 強い……）

ずぶ濡れの状態で立ち上がる雪乃を見ながら、敬治はその強さを噛み締め、それを敵にしていた事を思うと、背筋に悪寒が走った。そして、敬治はその目をそつと後方に飛ばされた柵木の方へと向けた。

そんな柵木は今、自らが創り上げた水の屋根を見上げており、そこに落ちた雨が波紋を広げていくのを捉えるのと同時に眉をひそめた。

「調子乗ってんなよ、クソが……」

仰向けからうつ伏せの状態になった柵木は人工芝の地面に手を着き、片膝を地面に着ける。

「計算めんどくせえし、流血せずに済ませようと思ってたが……：そうもいかねえようならしょうがねえよなあ！？ おい！」

立ち上がった柵木は目の前にいる雪乃を睨みつけるのと同時にAraiを唱える。

「Whores」
フウレス

水の屋根より、野球ボールくらいに凝縮された水が何個も下に落ちていき、柵木の周りを回り始める。そして、柵木は親指と人差し指だけを立てて、右手で銃のような形を作ってみせ、その人差し指の先を雪乃へと向ける。

「Sundob of a cserad lace」
サンドアップ オブ ア クセレッド ラベック

その動作から、遠距離から攻撃される事を察した雪乃は自らの周りに八つの円から形成される八円陣結界を展開した。しかし、柵木は結界を展開した雪乃を見て、笑う。

「八円陣じゃあ、意味ねえよ」

そう言って、柵木は銃の引き金を二度、引いたように右手を二回

動かした。その瞬間、棚木の周りを回っていた水の球の内の二つが雪乃の方へと飛んでいき、その速さは銃弾よりも速いものだった。勿論、その速さにより、野球ボールの様に丸かった水の球の形も飛んでいく時には細長いものに変化していた。

一つの目の球によって結界を壊され、二つ目の球は無防備な雪乃の腹を貫いた。

「桐島———!？」

人工芝の地面に仰向けに倒れた雪乃の方へと走って向かう敬治。

「桐島! おい!」

(大丈夫だ……気絶してるだけ……)

まぶた瞼を閉じている雪乃に向かって呼びかけた敬治は雪乃の胸が上下に動いているのを見て、安堵する。そして、敬治は雪乃の身体を抱え、その腹から制服に染みていく血を見て、棚木を睨みつけた。

「別にかまわねえだろ? てめえらは犯罪者なんだからよお!？」

「そんなの……納得いかねえ……」

雪乃をそっと地面に寝かせ、立ち上がる敬治。

「人を傷つけるために魔術は生まれたんじゃない……科学と同じ、人を便利にするために生まれたもの」

“魔術って使い様によっては人を傷つけられるけど、助ける事も可能なんじゃないのかな?”

谷崎の言葉を思い出しながら、雪乃の姿を見て、奥歯をギリツと鳴らす敬治は右手の人差し指を自分の方へと向ける棚木を再度、睨む。

「だから、お前のそんな魔術は———俺が破壊してやる!!」

「ハッ! やってみやがれ!! 魔術の使えねえその身体でなあ!」

挑発するように言葉を放つ棚木に対して、敬治はその挑発に乗るようにAraiを唱える。

デンスー「Denthur」

瞬間、敬治の体は大量の光と稲妻に包まれ、右頬に付けていたガ

ーゼは吹き飛び、「バチバチバチ」と連続する音を発した。

頬のガラスによって切られた傷が開き、垂れ落ちる血と共に敬治は苦しい表情を浮かべる。

(痛い……)

敬治が痛がっている理由^{わけ}は頬の傷ではなく、身体に付着した水を通って伝わる電撃であった。

(早く済ませないと……俺の身体が持たなくなる!)

身体に電撃を纏ったまま、敬治は自らの右手に一本の電撃の刃を創り出した。

「そんなモンで防げると思ってたのかあ!？」

柵木はまた、三回銃の引き金を引くように右手を動かし、周りの水の球三つを敬治へと飛ばす。雪乃の展開した八円陣結界を破壊し、腹を貫いた水の弾丸は迫り来る敬治の電撃に当たった瞬間に弾け、飛散した。

全ての魔術を破壊する電撃。その事を知っていて、水の球を飛ばした柵木は舌打ちをし、最終手段に出た。

「Liqu^{リクッサル}sal」

そのAraiを唱えた瞬間に柵木は空中の一線に溜まった全ての雨水を電撃を纏っている敬治に目掛けて落とした。

その水は電撃に触れた瞬間に弾けるが、それでも土砂降りで溜まりに溜まった雨水の量の全てを電撃で弾く事は不可能であった。

「ああああああああああああああああああ!!!!!!」

(痛^{いて}え……けど、こいつは絶対許せねえ!!)

自らの体に流れ込む電撃に叫ぶ敬治を見ながら笑う柵木だったが、それでも尚、握った電撃の刃を放す事無く進んでくる敬治にその目を大きく見開いた。

(こいつ……こんなに電撃を食らって……なんで、まだ立っていやがる!?)

心中でそう叫んだ時には敬治の握る電撃の刃は柵木の目の前にまで迫っていた。Araiを唱えても、この距離では追いつかない。

(やられる……!?)

そう思った柵木であったが、敬治の右手に握られた電撃の刃の切っ先は柵木との距離が数センチのところでの動きを止めた。そして、柵木はさっき言っていた敬治の言葉を思いだす。

“人を傷つけるために魔術は生まれたんじゃない”

「だからって、俺も傷つけないつもりかあ……クソが!!」

柵木が怒りを露にした瞬間、電撃の刃は砕け散り、敬治の纏っていた電撃も飛散する。そして、敬治はゆっくりと人工芝の地面に倒れた。

「……痛みで気絶しやがったか？」

「チッ」と舌打ちをする柵木や地面に倒れている敬治と雪乃は水の屋根がなくなったことにより、土砂降りの雨に打たれる。

「敬治君!? 雪乃ちゃん!?」

人工芝グラウンドの周りにいたギャラリィは魔術部の三人だけとなっており、傘を差している部長は二人の名を叫んだ。

柵木はその姿を見て、溜息を吐きながら、人工芝グラウンドの周りに張っていた結界を解いた。

その瞬間にすぐさま、二人の倒れている方向へと走り出す部長に続いて、江藤^{えどう}、神津^{こうず}も二人の元へと駆けつける。しかし、部長が敬治の元へと駆け寄ろうとした時、柵木は部長の胸倉を掴んで、部長の足を止めた。

「何するんだ!?!」

「こいつとあの女は今日、俺たち委員会が預からせてもらう。そして、早急に魔術委員会の本部に連れて行く。邪魔はさせねえぜ?」

「淳君の邪魔をするつもりは毛頭ない! ただ、敬治君が心配なだけだ!」

柵木の睨みに対して、睨み返す部長の表情を見て、柵木はそっと胸倉を掴む手の力を緩め、ポケットの中にあるものを取り出して、部長に向ける。

それは金色に輝くルービックキューブのようなもの――大量の魔

力が封じられたキューブであった。

「昨日、会長に連絡したら、『てめえに渡せ』って言われた。一回、盗られたんだから守る能力が無かったって事で俺は反対したんだがぁ……会長はそれでも『てめえに託す』って言ってた」

金色のキューブを柵木の手の上から部長が取ろうとした時、柵木は金色のキューブを持った手を引っ込めて、部長の胸に押し当てた。「どんな交渉、手を使っただけをてめえが持たされてんのかは知らねえが……」てめえもあのクソジジイも一体、何考えてやがるんだ……？」

「……何も考えてなんかいないよ。俺はただ、会長にキューブを託されてるだけだ」

「どうだかな……言っとくがぁ、俺が魔術部に来ねえのはてめえが信用で信用できねえからだ。谷崎を異様に慕ってたしな、てめえは？」

部長を睨みつける柵木であったが、部長はそんな柵木からは目を逸らしてこれ以上、口を開く気は無いと言う態度を見せていた。

「チッ」と舌打ちをしてみせる柵木はそのまま、金色のキューブを部長に渡し、携帯電話をポケットの中から取り出した。

「もしもし。ああ……」

柵木が誰かに電話を掛け始めるのを他所よそに部長は敬治の方へと近寄って腰を屈める。

「敬治君！」

敬治を傘で雨から守り、部長の呼びかけに対して、何も反応を見せない敬治だったが、その胸がちゃんと上下運動を繰り返しているのを確認した部長はほっと、安堵の息を吐いた。

「雪乃ちゃんは！？」

と、すぐにその心配の色を雪乃へと向ける部長であったが、それに答えたのは柵木であった。

「事前に配備させて置いた魔術委員会と医療関係者も呼んだ。あと一分もすりゃあそいつらが来るから、こいつらは大丈夫だろうよ。」

治療は多分、車の中。てめえらはそいつらが来たら帰れよ」

と言う柵木の言葉通り、一分も経たずに三台の車が人工芝グラウンドに入ってきて、敬治と雪乃をすぐさま、乗せた二台の車は颯爽とその場を離れてどこかへと行ってしまった。

「ハゲ校長かそれぞれの担任にちゃんと言っとけよ、部長？ 明日は学校行けないってなあ？ それぞれの親にも連絡しとけよ、江藤！？」

「分かってますよ……それで、二人の処分については、いつ連絡が入るんですか？」

「明日だろうよ。まあ、結果は死刑か懲役の二択だろうがなあ？」
にやりと口元を歪めてみせる柵木は残り一台の車に乗り込む。その車も二台の後を追うように人工芝グラウンドを離れていった。

α—XII. 委員会に入る？

五年前 ドーム

桐島雪乃、十一歳。桐島尚紀、十五歳。
きりしま ゆきの なおき

季節は残暑が厳しい九月の半ばであった。セミの鳴き声は途絶えたものの、耳を澄ませば聞こえてきそうな暑い昼間に比べて、夜は少し秋を感じさせるようなちよつとした涼しさを伴っていた。

ナイトゲームに行われる野球の試合を桐島兄妹は二人揃って、見に来ていた。

『雪乃。ジュースいるか？』

『うん！』

優しく雪乃に尋ねかける尚紀の姿は端から見ても、普通の兄。しかし、それを演じていたのか、本物の尚紀なのかは定かではない。ジュースを買ってもらった雪乃は上機嫌に尚紀と手を繋いで逸れないようにチケットに書かれた番号の席へと向かう。

指定された席に座った二人は周りの人々と同様に野球観戦を楽しみ、七回の膨らませた風船をドームの天井に舞い上げる時、その事は起こった。

宙へと打ち上げられるロケットのように直進はしないものの、飛んでいく細長い風船を喜ぶ雪乃を他所に尚紀も同時に喜びの笑みを浮かべてみせる。

その瞬間、尚紀の周りにいた雪乃以外の五千人の人物が、この世から姿を消した。

周りの人々が一瞬にしてドームから姿を消したのを目の前で目撃していた雪乃は笑顔を消し、訝しげな表情をしながら、隣にいる兄を見た。

すると、尚紀は急に立ち上がって雪乃の方を見て、ゆっくりと微笑んだ。

『大丈夫。兄ちゃんがついてるから、雪乃は心配すんな』

そう言って、頭を撫でる為に雪乃へと向かうであろう右手は、雪乃の頭へは行ったものの、すぐにその右手の人差し指と中指を雪乃の左眼の瞼^{まぶた}へと持っていく。

「にやり」と口元を歪めてみせる尚紀はそのまま、右手の人差し指と中指を左眼に突っ込み、雪乃の左眼を抉^{えぐ}り取った。

叫び声を上げる雪乃と呼応するように五千人もの人々が一瞬にして消え、驚愕していた周りの観戦していた人々も声を上げ、ドームの出口を目指し始める。

「グチョ」と言う音を発しながら、右手に持った目玉を握りつぶす尚紀に対して、雪乃は左眼の在った場所を左手で押さえ、右目から涙を溢れさせ、左眼の在った場所からは血の涙を溢れさせる。

『痛い……痛いよ！ お兄ちゃん！ ……どうして……？』

『“どうして”？ そんな事を聞いてそれこそどうする、雪乃？』

俺はもう、お前の知るお兄ちゃんじゃない。ただの———犯罪者だ』

そう言った瞬間、雪乃と尚紀は数十人の武装をした警察に囲まれており、その全員が銃を持っていた。

『両手を頭の後ろに置いて、地面に伏せろ！』

その中の一人が声を荒げるのを見て、尚紀は嗤^{わら}った。

『だからさあ？ そんな科学的もんが俺に通用すると思ってる時点で、あんたらの負けてのがまだ、分かんないのかねえ？ 警察さんよお？』

その瞬間、彼の周りにいた数十人の武装をした警察は黒い炎に包まれ、叫び声を上げる間のなく灰になって、ドームの景色に同化していった。

その景色を快楽の笑みで眺めていた尚紀の前に今度は一人の着物を纏った老人が現れる。その姿を見た途端に尚紀は笑みを消し去り、

老人を睨みつける。

『あんた……俺を捕まえにでも来たのか？』

『そうじゃのう……五千人も消されたとあっては魔術委員会会長として、見逃すわけにはいくまいよ』

そう。老人は魔術委員会の会長であった。

『ふーん……だが、会長さん。あんたじゃ俺を止める事はできねえ！』

会長を睨みつける尚紀。すると、会長の目の前で黒い炎が上がったのだが、その炎は見えない壁に止められているようであった。

『——ッ！？ ……流石は会長さん。俺の魔術を止めるとはなあ！？』

『何ゆうておるんじゃ？ お前さんのはどう見ても——』

←

翌日

白雨はくうの称号を得た魔術師である棚木たなぎに負けた敬治けいじと雪乃は、魔術委員会の本部まで飛行機に乘せられて向かっていった。

敬治たちの通う東坂高校は福岡であり、魔術委員会の本部のあるのは東京の為、二人は飛行機に乘せられたのであった。

二人は未だに目を覚ましておらず、東京の地に降り立ってからやっと、雪乃はその両目を開いた。

雪乃は辺りを見回そうと身体を起こそうとした時、腹部に激痛が襲い、身体を起こすのを諦め、大人しく天井をじっと眺めた。

（そっか……わたし、魔術で……）

気絶する以前の事を思い出した雪乃は今の状況から、棚木に負けた事が分かった。何故なら、彼女の周りには何重もの結界が張られていたからである。

（斉藤くんは大丈夫なのかな……？）

敬治の姿が雪乃の脳裏に過ぎるのと同時に、ある人の姿も一緒に過ぎった。

(……そうだよ。どうせ、わたしは——どう足掻いたって、籠の中の鳥なんだよ……)

そう心中で悲しく告げた雪乃は、天井に向けていた目線を右へと向けた。すると、そこにはスーツ姿の女性が座っており、片手に持った本をじっと読んでいた。

「お目覚めになられましたか？」

「は、はい……ここはどこですか……？」

「魔術委員会本部です。あなたが目覚めたので、これから三十分後に裁判を執り行わせていただきます。よろしいですね？」

本を閉じて、雪乃へと目を向ける女性に対して、雪乃はゆっくりと頷いた。

「はい……」



魔術で犯した罪の裁判は魔術委員会の中から無作為に選ばれた八人と副会長が裁判員として、裁判長は勿論、魔術委員会会長の計十人で行われる。しかし、裁判とは言っても裁判員の考えはあまり反映されず、会長が独断に罰を決める事が多い。

「それでは、裁判を開始させて貰うとしようかのう」

と会長の言葉とは裏腹に裁判員の顔がやる気のないのもその為である。

法廷に立った雪乃を見下ろす会長は言葉を続ける。

「桐島雪乃。お前さんは大量の魔力を封印されたキューブを盗もうとした。この罪に間違いはないかのう？」

手枷を嵌められ、ポケットに入っていた白い眼帯を左眼にした雪乃はゆっくりと頷いた。

「ふうむ……で、判決を下していいかのう……？」

（早ッ——！?）

その場にいた全員が心の内で会長に対して、そうツツコんだ後、会長はその判決を堂々と口にする。

「お前さん……委員会に入る気は無いか？」

「——ッ!? ちょっと、待ってください、会長！ なに言ってるんですか!？」

裁判員としてその場にいた魔術委員会の委員が会長の突拍子もない言葉に声を荒げた。

「彼女はキューブを奪おうとした挙句に去年、会長を殺そうとした“谷崎”の仲間なんですよ!？」それに、彼女は桐島尚紀の妹だ!」

「だからどうしたと言うのですか？ 会長の判決に何か不満があるとても?」

声を荒げた魔術委員の者を睨みつけるのは魔術委員会の会長である福津哲也^{ふくつてつや}であった。

黒縁眼鏡をクイツと人差し指で上げて、調整し、会長の方へと視線を向ける福津は身長一八一と高身長で、顔も整っており、テレビに出ていてもおかしくないようなイケメンだった。

「まあ、彼の意見にも一理はありますので、彼女がもう一度、キューブを奪うような事があった場合の対応と、キューブを守るための戦力はどうかするんですよね?」

「そうじゃのう……今度、キューブを奪う事があったら、それ相應の罰を与える、とだけ言っておこうかのう。キューブを守るための戦力は……棚木^{たなぎ}と斉藤^{さいとう}にしよう」

「斉藤……? そんな人物、聞いたことはありませんが?」

「今日、彼女と一緒に棚木に捕えられた少年じゃよ。彼にも魔術委員会に入ってもらおう事にするのじゃ。面倒くさいから、彼の裁判は無しでもええかのう?」

と、殆ど、会長の単独な判決により、裁判は終了し、雪乃は敬治の身を心配しながら、魔術委員の者に聞いた、敬治の寝ている部屋へと踏み込んだのであった。すると、そこには既に棚木がおり、雪

乃が入ってくるのと同時に柵木は彼女を睨む。

「会長はあんな甘チャンだが、俺アそうはいかねえぜ？ てめえがキューブを奪わねえよう二十四時間、見張ってるからなあ？」

柵木の忠告を無視しながら、白いベッドに横たわる敬治を見る雪乃は自分を責める。

（わたしのせいで……こんな怪我させて……）

すると、その瞬間、敬治の頭のアンテナがピクリと動き、敬治は重い瞼をゆつくりと開いた。そして、目の前にいる雪乃を見て、敬治は口を開く。

「柵……島……？ 怪我は大丈夫なのか……？ それにここは？」

「わたしは大丈夫……ここは東京の魔術委員会だよっ」

「魔術委員会……？ そうか……で、俺たちはどうなるんだ……？」
身体を起こさないうまま、諦めたような表情で雪乃に尋ねる敬治に答えたの柵木であった。

「てめえには魔術委員会に入ってもらう事になった」

「やっぱり……って、ええ！？」

勢い良く身体を起こして、柵木を目を大きく見開いて見る敬治に面倒くさそうに柵木は説明する。

「会長がそう決めやがった。だが、今度キューブを奪うような事があれば、それ相応の罰を与えるんだとよ。まあ、俺が奪わせやしねえがな」

（俺はキューブ奪ってないんだけど……）

と心中で思いながら、敬治は安堵の息を吐いてみせる。そんな敬治と雪乃に柵木は上の人間に渡された委員の証である手帳と専用の携帯電話を敬治の膝の上に放り投げた。

「それはお前らが魔術委員である証。失くしたりしたら再発行は効かねえから気をつけな」

まじまじと膝の上の二冊の手帳と二個の携帯電話を見つめる敬治は溜息を吐いて、柵木の方を向く。

（……俺はこんな人みたいに不当逮捕は絶対しないようにするぞ）

「おい、てめえ……今、俺みたいにはならねえって決意したろ？
しばくぞ、クソが」

柵木の睨みと共に放たれる殺気にびくつと身体を動かす敬治は話を切り替えるように膝に置かれた携帯電話を手にとった。

「……これって、普通に電話とかメールとかできるんですか？」

「厳密に言うと、できねえ。だが、魔術委員同士のやり取りはできる。」

ケータイは魔術委員会からの指令を受け取るだけの機器だと思っ
といたほうが良いぜ？　これで情報交換すると、魔術委員会に駄々
漏れだからな」

敬治はふーんと手に持った携帯電話とは違う方の膝に置かれた携
帯電話を雪乃へと差し出し、同時に手帳も彼女に渡す。

「それで……魔術委員って結局何すればいいんですか？」

「ただ、その手帳持って、魔術で犯罪してる奴捕まえりゃあいいだ
けだ」

そう言っ、柵木は病室のようなその部屋の出入り口へと足を進
め、そこから出て行った。そして、彼はその部屋から出て行って廊
下を歩いている最中、その拳をギュッと握り締めた。

（あいつらは悪……悪を根絶やしにするのが、正義であり、この俺
だ……）

……なのに、なんで俺ア、あいつらと普通に話してんだよ、クソ
が！　会長も会長だ。あいつらを魔術委員に入れるなんて、ふざけ
やがって……！）

柵木の頭に過去の記憶の一部が過ぎ去って、柵木の怒りを逆撫で
する。

（必ず……悪は全部、駆逐してやる……！！）



大きい窓に一つの机と一つの椅子が置かれた、他には何もないその部屋。そこにはその部屋の名の通り、魔術委員会会長の窓の外の都会の風景を眺める姿があり、その横には副会長である福津哲也の姿もあった。そして、会長が窓の外の風景に飽き、椅子に座った時を見計らって、副会長はその口を開いた。

「これで、“駒”が全て揃ったというわけですか、会長？」

「駒とは失礼じゃのう。それはただのお前さんの想像に過ぎんわい。わしはそんな事ちっとも思っておらんよ」

「これは失礼致しました」

頭を下げる福津は頭を上げると同時にクイツと右手を使って、眼鏡を元の位置に調整する。

「ですが、まだ、私は“五十人もの称号を持った者”を魔術委員として迎え、どうするのかは聞かされておりませんが？」

「それを聞かせるためにお前さんと呼ばうと思っておったのじゃが、既にお前さんはこの部屋におったからのう……“未来視”は凄いなじゃ」

「未来視とはとんでもない。私はただ、結果を予測しているに過ぎません。自分の身近にある情報の一つ一つを繋ぎ合わせて、ただ、“予測”しているのです。天気予報と同じようなものですよ。」

それよりも、早く説明していただけませんか？」

「うーむ」と自らの伸ばした白い顎鬚を触りながら、会長は福津に答える。

「去年、わしを殺そうとしたあやつのはかりしれん。桐島尚紀でさえ、解けなかったわしの結界をあやつはいとも簡単に解き、そして——平然とわしの右足を奪っていった」

会長のその言葉の通り、会長の膝から下はこの世には存在せず、変わりに義足がはめられている。それを知っている福津は苦い表情を浮かべながら、話の続きに耳を傾ける。

「今年もあやつはわしを狙ってくるじゃろう。そして、わしもあや

つ一人の相手をせねばならん。即ち、あやつの仲間の相手をする者が誰もいなくなるのじゃ」

「ならば、私たちもいますし、他にも――」

「――違うんじゃないよ。あやつの側にはわしよりも遥かに優れとる結界を張る奴がおる。そやつがいらぬ結界を張りそうな気がするんじゃないよ……わしの勘じゃがな。じゃから、称号は学生のみに与えたのじゃ。

そして、ここからがお前さんの気になる最大の部分じゃろう。“

五十人もの称号を持った者”を魔術委員として迎え、どうするのか。答えは簡単じゃ。わしは五十人の中からあやつの仲間と相手をする者を選抜しようと思うておるのじゃ」

その目を大きく見開かせる福津は会長の座っている目の前の机に両手を叩きつけた。

「ちよっと待ってください！ そんな事、できるわけ無いじゃないですか！？ まさか、会長は日本を戦場にでもするつもりなのですか！？」

声を荒げる福津に対し、会長はゆったりとした口調で福津を宥め^{なだ}るように口を開く。

「お前さんの言う事も分からんでもないが、選抜しなかった場合の方が夏の被害が拡大するとは思わんか？ 無闇に皆が魔術を使い出したら、あやつの仲間も倒せず、被害も増える。それならば、優れたものを選抜した方がいいと思うのじゃが？」

にやりと口元を歪める会長を見て、

（この人は……本当は楽しんでるだけなんじゃ……？）

と思いつながら、福津は溜息を吐いてみせた。

「……それで、話は変わりますが、谷崎と繋がっている桐島雪乃は泳がせておいてもいいのですね？」

「それで問題ないよのう。……五十人もの若い魔術師たちによる^{タイ}称号十人選抜決定戦。面白いぞお……」

（会長のネーミングセンスの無さには本当に呆れてしまいますねえ

……)

笑う会長に対して、呆れるように福津は溜息を吐いた。

α—XIII. サボリ部員（二人目）

翌日

昨日、敬治^{けいじ}と雪乃^{ゆきの}と棚木^{たなぎ}の三人は飛行機に乗って、東京の魔術委員会から福岡の自宅まで帰り着き、敬治は家に帰るや否や風呂に入って、すぐに眠りについた。そんな敬治は今、自転車のペダルを漕いでおり、そんな彼が向かう先が東坂高校であった。

そして、敬治の向かっている東坂高校の校長室に怪しげな人物が進入している事を敬治は知る由もない。

東坂高校の校長室から廊下を窺うように頭を出して、出て行った校長とは逆にその男子生徒は校長室野中を窺うようにして校長室に踏み込んだ。

すると、男子生徒はいかにも泥棒のように抜き足差し足忍び足で校長室にある校長の机へと向かって、その上に置いてあったあるものを手にとって見せ、にやりとその口元を歪めて見せた。そして、男子生徒は何事も無かったかのような顔をして、校長室を後にした。それから五分後にどこかに行っていた校長が校長室に戻ってくるのと同時に、校長は自分の机の上を見て、その目を大きく見開いて見せた。

（なっ……無い!!）

心中でそう叫んだ校長はすぐさま、溜息を吐いてみせ、「あいつか……」とやれやれと言わんばかりの表情を浮かべる。

そして、窓からの光を最大限に反射させる頭を触りながら、校長は机の上の職員室に繋がる電話の受話器を取った。

◇

敬治は学校へと着くと、教室へと向かって淡々と歩いていく。

(まだ……なんか体だるい……)

その原因は一昨日の柵木との戦いで、自らの電撃を全身に浴びた事にある。そんな電撃を制していない自分の不甲斐なさに溜息を吐きながら、敬治は教室の扉を横にスライドさせた。

そんな敬治の目に飛び込んだものは五名の男子生徒が誰かを取り囲んでいる姿であった。

敬治が教室に入ってきた音によって、男子生徒たちが敬治の方を振り向くのと同時に、敬治はその男子生徒たちの中心にいる人物を見た。そこには顔を俯けている雪乃の姿があった。

(——ッ!? ……そういう事かよ)

一瞬、教室内で起こっている出来事の意味が理解できないでいた敬治だったが、すぐにその理由に辿り着き、男子生徒たちを睨みつけた。

「何、ガンたれてんだよ」

男子生徒たちの中の一人がそう言って、敬治の方へと近づいていく。それに対して、他の四人の男子生徒たちも金魚の糞のように一人の男子生徒の後ろについた。

「そんな人数で桐島取り囲んで何してた？」

「お前にはかんけーねえだろ？」

「関係あるから聞いてんだ。それにお前らが桐島を取り囲んでた理由も想像できる。」

……お前ら——— “復讐” したいんだろ？」

瞬間、男子生徒たちの表情が変わり、敬治の目の前にいた男子生徒が敬治の制服の胸倉を掴み上げた。

「俺の親は桐島尚紀なおきに殺された!! なのに、なんであいつの隣にいたこいつは殺されてねえ! おかしいだろ!? 俺の親じゃなくて、こいつが死ねばよかったんだ!」

男子生徒の荒い声が教室に響き、教室にいるクラスメイトたちは男子生徒の行動を止めようとはしない。いや、止めれないのだ。皆、胸倉を掴んでいる男子生徒の気持ちが少し分かるのと、まだ日が浅

いため、止め難い。

男子生徒のその理由を聞いても尚、睨み続ける敬治はその理由を鼻で笑った。

「雪乃の兄貴がやった事だ。雪乃には何にも関係ないだろ？」

敬治は桐島ではなく、あえて、雪乃と呼んだ。それは尚紀と関係の無い事を少しでも強調するための試みだったのだが、その言葉は男子生徒を逆撫でした。

「黙れ！ 何言ったって無駄だ。俺はあいつをボコらねえと気が済まねえんだよ！ それを止めるってんなら、お前も——」

男子生徒が胸倉を掴んでいる左手とは逆の右腕を振り上げようとしたその刹那、男子生徒の左腕に電撃が走り、後方へと退いた。^{しりぞ}

(な……なんだ……?)

疑問に思う男子生徒の頭に過ぎったのは一昨日の棚木との戦いの時の敬治の姿であった。

「……お前も、どうするって？」

「お前も……ボコるって言ってんだよ!!」

そのまま退いてくれると踏んでいた敬治の予想は悉く裏切られ、男子生徒は足を踏み込んで、右手を敬治に向けて勢い良く振った。その拳を紙一重で避けた敬治はそのまま、男子生徒の脇を通って、他の四人の男子生徒の間をすり抜け、ぼうっと突っ立っている雪乃の左手を掴んで教室から出て行く。

「待ちやがれ!!」

追いかけてくる五人の男子生徒を肩で息しながら振り切って、敬治は息を整えながら体育館に上がる階段に腰を下ろした。そして、未だに雪乃の手を掴んでいる事に気づき、敬治は顔を赤らめながらその手を離した。

「ご、ごめん……急に手引っ張ったりして……」

「いいよ……そんな事より、ありがとう。わたしを庇^{かば}ってくれたりして」

にこりと微笑む雪乃であったが、それが無理やりの笑顔であると

敬治は感じ取っていた。

「……今日みたいなのが、日常だったのか……？」

階段の真ん中を空けるようにして、雪乃は敬治と間を取って階段に腰を下ろし、首を縦に振った。

「そう……だから、慣れてるからいいの。わたしだけ、お兄ちゃんの周りで唯一生き残ったんだから……」

左眼にされた白い眼帯を押さえる雪乃の姿を見て、敬治は雪乃へと言葉を紡ぐ。

「あいつらの復讐したい気持ちも分かるけど、その思いに身を任せたってあいつらだって救われないし、桐島だって、救われない。それに桐島の兄貴がやった事なんだ。桐島には関係ないって言ってやれたらいいんだけどね……兄妹なんだし、関係無いなんて言えないけど、桐島のその重い気持ちを俺が背負って楽にする事ならできる。だから、俺にその重みを背負わせてくれないか？」

「……どう、やって……？」

「今度、あんな事があったら、俺に助けを求めればいいだけ。そして、俺が桐島を護ってやるから」

敬治のその言葉に少し涙を浮かべる雪乃であったが、その口元は微笑んでいた。

「……雪乃」

「えっ？」

「雪乃でいいよっ！ わたしも、敬治くんって呼ぶから！」

うるうるの雪乃の眼差しを受け、自らの目を逸らしながら、頷く敬治は頭のアンテナを揺らした。

（五年前からずっと……あんな仕打ちを受けてきたんだろうか……？ 自分がやった事じゃない、兄貴がやった事を責められ、逃げ場を失くし、そして——ッ!？）

その先を心中で呟こうとした敬治の頭にある事が思い浮かぶ。

（——“差し伸べられた手を取って、桐……雪乃はキューブを盗む命令を受けたんじゃない……!”）

敬治は再度、雪乃へと目を向け、口を開こうとしたその瞬間、自らの後ろにいる人物に気づいて、階段から飛び降りた。しかし、そこにいた人物の顔を見て、敬治はそっと安堵の息を吐く。

「神津……先輩」

敬治の目線、雪乃の横にはいつの間にか、肩よりも少し伸びた髪ひげの神津沙智が階段の手すりのついた壁に寄り掛かって立っていた。

「二人してこっそり、惚気のろけて……もう、二人の関係がこんなにも深まってたとはねえ……」

「ち、違いますよ!」

「必死に反論するところを見ると、ますます怪しいわよ? まあ、話は少し聞かせてもらったから、そうじゃないって事は分かるけど」にこりと微笑んでみせる神津の表情を悪魔的な笑みと感じ取ってしまう敬治はその表情を引きつらせる。

「雪乃ちゃんが悪い子じゃないってちょっと分かってほっとした。けど、もう一度、キューブを奪うような事があつたりしたら、許さないから。覚悟しといてね? まあ、棚木がキューブを持ってるから、奪われるような事はないでしょうけど」

「……は、はい」

いつの間にか後ろにいた神津に目を大きく見開かせている雪乃は頷くのと同時に立ち上がる。

「その節は本当に申し訳ありませんでした」

雪乃の下げた頭にポンと手を置いて、神津はその場から自分のクラスの教室へと戻っていった。そして、敬治と雪乃の二人も自分のクラスの教室へと足を進めた。



放課後

「お前たちの部活は一体、どうなってるんだ!!」

敬治が魔術部部室のドアを開けようとしたその瞬間に、その怒号と机を勢い良く叩く音が鳴り響いた。横にいる雪乃の様子を窺おうと振り向く敬治に対して、雪乃も訝しげな表情で答えてみせた。

ゆつくりとドアノブを回し、ドアを前に押した敬治は魔術部の部室内にいた部長と江藤とこの前の学校案内の時に生徒会室を通ったときに居合わせた生徒会の人の視線を浴びる事となった。

敬治がドアを開けたおかげ、話が止まっている事に耐えかねた敬治は尋ねかける。

「あの……何かあったんでしょか……？」

「すみませんね、敬治君。これで十回目なんです」

「十回目……？」

江藤の返答に自らの首を傾げる敬治と同様に、雪乃も今の状況を把握できてはいない。

「そう。魔術部部員の二年、石川兼太郎けんたろうが“校長のかつら”を盗んだのがこれで十回目の出来事なんですよ」

と溜息を吐きながら説明してみせる江藤の言葉を聞きながら、敬治は少し驚いた。

（校長って……ズラだったんだ……）

入学式の時にはちゃんと髪の毛の在った校長の姿を思い浮かべる敬治。

（って……それよりも――）

「――あの……もしかして、そのかつらを盗んだのが『魔術部の部員の』って今、言いました？」

「えっ？ 言いましたけど？」

その言葉を聞いて、小さく溜息を吐く敬治。

（流石は崩壊寸前の魔術部……）

そんな敬治とその横で苦笑いする雪乃を見た後、魔術部部长である藤井に目を向ける生徒会会員の男子生徒は不憫そうに告げる。

「一年二人にまで愛想尽かされてるけど、あんたみたいなのが部長なのがいけないんじゃないの？」

「僕はいつだって全力投球で頑張っているんだ。君みたいにベンチにも入れない奴には言われたくないな」

「おい、江藤。こいつ窓から落としてもいいか？」

怒りを抑えている表情で江藤に尋ねかける生徒会会員の男子生徒は「もういい！」と言わんばかりに後ろへと振り返り、

「この件については今日中に解決して、校長にかつらを返せ！そして、石川を生徒会室に連れて来い！いいな！」

と言って、魔術部部室を後にした。

嵐が過ぎ去った後のように静まり返った部室。すると、そんな空気の途中で部長は口を開く。

「じゃあ、“石川”を探しに行こっか！」

「でも、探すって言うってもまだ、学校にいるとは限らないんじゃない？」

部室から出ようと、椅子の腰掛に掛けておいた学ランを手にとつて、袖に手を通す部長はにやりと笑みを浮かべてみせる。

「此処の近くの薬局に行けば、必ずいるよ。それも、とても目立つ頭でね？」



東坂高校より徒歩五分の薬局。その場所に辿り着いた魔術部の四人は雑談を交えながら、薬局の中へと足を踏み入れる。

「それにしても、良くお咎め無しだったねー。けど、会長も何考えてるんだか……」

「そうですね。（クソ）部長のせいであっさりと奪われてしまったのに、原因である本人にはお咎め無しですもんね」

「なんで、そんな解釈しちゃってんの、清二君！？それにクソって……」

「その通りだと思いませんか？だから、棚木にキューブが任せられる事になったんですよ。それにしても、棚木の魔術での傷は二人

部長と江藤について聞いた敬治と雪乃。急な訪ね掛けに対して、敬治は普通に答え、その後、雪乃は躊躇うように答える。

「……わたしはまだ、痛いです……」

にこりと笑ってみせる部長だったが、腹の中では雪乃を信用してはいない。それは江藤も同じで、神津は朝の話を聞いて、少しだけその心が晴れた。敬治はもう少しで、雪乃を信用できるくらいにまで来ていた。

（えっ!?! 髪の毛どこから生えてんの、あいつ!?!）

「おっ！ 敬治君ナイス！ あそこで育毛剤見てるのが石川で間違いないよ。それと、多分逃げるだろうから、魔術委員の手帳で拘束の魔術唱えてくれ」

敬治はまだ、拘束魔術を覚えてはいないのであった。

その瞬間、光の帯が髪の毛が変なところから生えている男子生徒の元へと飛んでいき、男子生徒を捕らえた。

「なつ、なんだよこれえ！！」

光の帯に手と胴体を固定された男子生徒は持っていた育毛剤を地面に落とし、光の帯の飛んできた方向、敬治たちのいる方向へと目を向ける。

「ぶ、部長じゃないですか!？ どうして……こんな所に……?」

「その頭に乗ってるものを取り返すのと、石川の身柄を生徒会に引き渡す事」

「えっ? 頭に乗ってるもの? ……知りませんねえ。僕の頭には髪の毛しかないから……」

あからさまに目線を逸らす石川に対して、部長は溜息を吐く。

「髪の毛が生えてる時点でおかしいんだよ」

「な、何がおかしいって言うんですか!？ 高校生は皆、髪の毛生えてるのが自然じゃないですか! それを髪が生えてるからおかしいだなんて、部長こそが本当はおかしいんですよ! 僕だけ“君”付けしないし、僕の事を見縊^{みくび}ってるんですよ!」

「まあまあ、お店の中だし落ち着^{なだ}こうよ」

左半分だけ髪が生えている石川を宥^{なだ}めるように言った部長であったが、石川は聞く耳を持つとはしない。

「ほら! 宥めようとしてるけど、本当は僕の事を莫迦^{ばか}にしてるんだ、部長は! そうだよ! 僕は“スキンヘッド”だよ! “スキンヘッド”!」

左から生えていた髪が地面に落ち、つるんつるんの頭皮が露になる。その一部始終を見て、江藤は笑いを堪^{こら}えるように右手で口を押さえ込み、小声で呟いた。

「スキンヘッドって……ハゲなのに……」

「ハゲ!? えええ江藤!! お前今、ハゲって言っただろ!! 聞こえなかったのか!? 僕はスキンヘッドって言ったんだ!! ハゲとスキンヘッドは違うんだよ!!」

お前、ぜったい現国赤点だろ!! 『答える』と『応える』の違いも分からない中学生か、お前の頭は!! ハゲは髪が残ってるけど、スキンヘッドは髪が無いんだよ!!」

「結局、ハゲの人が羨ましいって事でしょ……?」

尚も右手で口を覆いながら、頬を膨らませている江藤に対して、石川は頷く。

「うんうん。そうだよ。僕はスキンヘッドじゃなくて、ハゲに――
――って誰になるか、ボケエー!!」

『サザ○さん』のいそ○波○さんみたいにはなりたくはないんだよ! それなら、護廷十三隊十一番隊第三席の方がマシだよ!!
あいつちやっかし、卍解できるし!!」

そんなアニメや漫画のネタを持ち出す石川の言葉を聞いて、敬治はある事を思い出す。

(そう言えば、漫画が今週発売だったなあ……)

思い出した事を心中で呟いていた敬治にその視線を向ける石川。それと同時に敬治の隣にいる雪乃の方にも目を向けた。

「そう言えば、拘束魔術かけてきたのは誰……? それにその二人も初めて見るけど……?」

首を傾げてみせる石川を面倒くさそうに眺める江藤はその尋ね掛けに答える。

「君が部活に来ていない間に新しく魔術部に入った二人だよ。そして、二人とも魔術委員。一昨日の柵木との一騒動を見てないの?」

「一昨日? 一昨日は……そうだ。学校来てねえ」

不登校宣言をする石川の言動を溜息を吐いて聞いていた江藤は石川へと近づいていき、地面に落ちていた校長のかつらを手に取った。

「あっ!!? 俺の十万円!!」

「君のじゃないでしょ……」

部長。早く、生徒会に身柄を引き渡ししょう。石川はいじめ甲斐がないです」

「そうだね。って事でご愁傷様」

石川の方へと近づいて、石川を引き摺りながら、敬治たちの方へと足を進める部長とかつらを手にした江藤。

そんな二人が雪乃の横を通り過ぎようとした時、急に石川は力を

入れて、部長を止めた。

「ちょ、ちょっと待ってください！ この子と、この子と話させて！」

必死な石川の表情を見て、部長は足を止める。そして、雪乃を一心に見つめる石川は告げる。

「君、可愛いね……俺と付き合わない？」

唐突な告白にどう反応していいのか分からない雪乃は一瞬、戸惑うがすぐに石川から目を逸らして、恥ずかしそうに顔を赤らめながら、答える。

「あのー……その頭は、ちょっと……」

「はい。これで満足だね、石川。じゃあ、二人はもう帰っていいよ」
石川を引き摺るのを再開する部長と一緒に江藤も歩き始める。

「ちょ、待って！ 僕まだ、何もかつこいい事してない！！ 魔術も見せてないし、ただのハゲだと思われてるから、フラれたんだ！ 僕のスキルがそれだけじゃないと知れば、彼女も必ず振り向いてくれるから、僕に魔術を使わせて！ お願い！ お願いだから——
——……」

二人に連行されていく石川を見送りながら、敬治と雪乃はそれぞれの帰路についた。



白木書店

（漫画……漫画……）

心中でそう呟きながら、敬治は書店の中での漫画のエリアを探し、見つけるに至る。しかし、その瞬間、敬治の足を止めるようにバッグの中の携帯電話がブザー音を立てた。

バッグの中を漁り、携帯電話を取り出す敬治は首を傾げる。

（魔術委員専用のケータイにメール……何かの指令かな？）

敬治は恐る恐る、指を滑らせ、受信トレイを開いた。

α—XIV. 王水の魔術師

敬治はスマートフォンけいじの画面に指を滑らせ、受信トレイを開く。
そんな敬治の目に飛び込んだものは驚くべき事だった。

「何だよ、これ……称号十人選抜決定戦……？」

足を進めながら、訝しげな表情で敬治が眺めるスマートフォンの画面にはこんな文面が映し出されていた。

これは称号を持つ、委員会の魔術師五十名に一斉送信された指令であり、拒否権は無。抗議、質問などは受け付けないものとする。

壹——このメールが各自の携帯電話に届いたその時間より、称号を持った魔術師五十人の中から十人の優れた魔術師を選抜する称号十人選抜決定戦を開始する。

貳——トーナメント形式で五人の魔術師を選抜した後、残りの五人を二回戦まで勝ち上がった十五人から選抜する敗者復活戦を行う。敗者復活戦の詳細は初めの五人が決定した後メールにて伝えるものとする。

参——トーナメント表は魔術師五十名には伝えないものとし、対戦相手と場所のみを追って伝えるものとする。また、その文書が本人へと送信された時刻より、二十四時間以内にその場所に着いていなければ、敗北とする。

肆——対戦相手とお互いの称号を名乗り合ったところで、試合開始とする。尚、称号を名乗り合う前に何らかの形で対戦相手に危害を加えた場合は敗北となる。

伍——相手を気絶、降参させたら勝利となり、相手を殺した場合
は殺した方の敗北となり、無条件で称号と魔術委員の資格を剥奪する。

陸——魔術委員より、真剣に取り組んでいないと判断された場合

でも、称号と魔術委員の資格を剥奪する。

？――第三者が試合に^{しち}関与した場合はその時点で無効試合となり、後日、再試合となる。

(……説明短ッ!?)

華麗にツツコミを入れながらも、敬治は真剣な眼差しでその文面を見つめる。するとその瞬間、携帯電話はまたもやバイブ音を発し、危うく敬治は地面にそれを落としそうになる。

そのバイブ音はメールが来たと知らせるものであり、敬治は受信トレイに戻ってその新着メールを開いた。

「対戦相手……“王水”の魔術師？ それにこの対戦場所って、すぐそこじゃないか!？」

小さな声で驚く敬治のしている携帯電話の画面には対戦相手が王水の魔術師である事と、その対戦場所が記されていた。即ち、今から二十四時間以内にその場所に行かなければ、敬治は無条件で敗北となる。しかし、敬治はこのトーナメントに参加するか否か、悩んでいた。

何故なら、敬治は魔術で人を傷つける事を望んではないからだ。「ちよっとどいてくれますか？ 漫画取れないので」

漫画の最新刊の立ち並ぶ棚にまでいつの間にか辿り着いていた敬治に後ろから声を掛けたのは男子中学生であった。

急に後ろから声を掛けられた事によってびっくりした敬治は持っていた携帯電話を漫画の上に落としてしまう。

すると、少年は漫画の上に落ちた携帯電話を手にとって、敬治に手渡した。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

にこりと笑ってみせる少年は身長一五七センチほどで髪は元からなのか少し、茶色い。そして、目の色も薄い事から、ハーフなのだ

ろう。

少年はブレザーの上から、博士のように白衣を纏っており、そのポケットの中からあるものを取り出して、敬治に見せ付けた。

敬治はそれを見た途端に、自らの目を大きく見開いて見せた。

「そ、それは――！？」

「どうやら、近くににいる人同士が対戦するようですね。初めまして。僕が、王水の魔術師です」

王水の魔術師である少年が敬治に見せ付けたのは魔術委員の証である手帳だった。その手帳を再度、ポケットの中に入れて、敬治に右手を出して握手を促す王水の魔術師。

その右手を取った敬治は先程、送られてきたルールを未だに理解できてはいなかった。

「俺が……降雷の魔術師――」

「Teml」
テムル

少年によってAraiアライが唱えられるその瞬間に敬治はその手を放し、後ろへとその身を退いた。

「つまらないなあ……大人しく僕の手を握っていれば、“溶け出していた”のに」

「急に、何しやがる……！？」

「あれ？　もしかして、ルールをちゃんと、理解していなかったんですか？　お互いの称号を名乗りあった時点で試合開始なんですよ？」

未だに敬治に笑みを向け続ける王水の魔術師は、漫画を手に取り、事無く、本屋の出入り口のほうへと向かう。

「まあ、こんな大勢の人のいる前で魔術を使うのもなんなので、対戦場所に移動しましょうか？」



（初めからここに来るなら、あんなところで魔術使うなよ……！）

メールによって指定された対戦場所には五分間経たない内に辿り着き、敬治は心中で愚痴を零した。

敬治と目の前の王水の魔術師の対戦場所は人の気配も無く、目に付きそうにもない薄暗い場所で、夕日に染まりつつ空がより一層、その空間を不気味にさせていた。

そんな空間を目の前にしても何も感じる事は無いのか、王水の魔術師は淡々と足を進めていき、敬治と向き合った。

「東坂高校一年十二組十八番、斉藤敬治。入学の時の実力テストでは校内三十二位。でも、数学は十一番か。へえー……」

魔術委員ではなく、自らの携帯電話スマートフォンを弄りながら、敬治の情報述べていく王水の魔術師は携帯電話を白衣のポケットの中へと入れる。

少年の言葉を聞いた敬治は「なんでそれを……？」と言うような訝しげな表情を浮かべてみせる。

「なんで僕がこんな事を知っているのかって、そんな分かりやすい表情をしているよ？」

情報って言うのはその勝敗を分けるほどの力を持つてる。沢山の情報から取捨選択し、それを繋ぎ合わせていく事によって結果へと結びつく。言ってみれば、莫迦ばかと天才の違い。莫迦は情報をうまく取捨選択できない人で、天才はそれができる人。つまりは僕が天才で、君が莫迦って事だ」

自分を莫迦呼ばわりする少年に不満を覚えながらも、敬治は黙って少年の話に聞き入る。

「『君』は失礼かな？ 『先輩』とでも訂正しておくよ。それで中学校の時に魔術委員の会長を去年、殺そうとした谷崎一也いちやに会ったんですか……どんな人でした？ 大犯罪者は？」

再度、白衣のポケットの中から携帯電話を取り出して指を走らせる少年。

敬治が中学一年生だった時の谷崎の事を思い出しながら、敬治は少し、切ない気持ちに襲われる。

（なんで、谷崎先輩が……？）

その答えを求めるために東坂高校に入学し、魔術部に入部した敬治。しかし、未だにその答えを魔術部部长である藤井は教えてくれない。

「普通の人だった……」

「へえ……そんな人のせいで僕たちが戦わなきゃならないって言うのも、ちょっと嫌ですよねぇ……」

王水の魔術師のその言葉に敬治は疑問を抱く。

（谷崎先輩のせいで俺たちが戦わなきゃならない……？）

「どういう事？」

「あれ？ このトーナメントの目的を分かってないですか？ しんどいですね、情報が無いと。」

十人の称号を持った魔術師を選抜する理由^{わけ}は今年の夏も谷崎が『会長を殺しに来る』と宣言してるからです。会長は谷崎の相手をし、他の谷崎の傘下の者たちには十人の称号を持った魔術師をぶつけようと言うわけです」

（何だよ、それ……そんなのメールのどこにも書いてなかったじゃないか！）

拳を握り締める敬治に対して、少年は携帯電話の画面を睨み続け、その後、敬治を睨みつけた。

「けど、変ですね……先輩の小学生の頃の情報が全く、見当たりません。まるで、“誰かの手によって意図的に消し去られた”ように小学生の頃に何かあったんですか？」

少年の質問に敬治は黙りこくった。そして、何か嫌な事を思い出すような表情で、ポツリと呟く。

「何も……」

「そんなに間を置かれたら、余計知りたいなあ……もしかして、先輩が魔術で人を傷つけない事と関わっていたりするんですかね？」

瞬間、敬治は血相を変えて少年を睨みつけ、自らの拳を握り締めた。

「……凶星、と言うわけですね。では、こうしましょう。僕が勝てば、先輩の小学校の頃の情報を提供し、先輩が勝てばそれは回避でき、晴れて二回戦へ進める」

「ちよっ!？ 何勝手に決めてんだよ! 俺はこんな人を傷つけるような戦いは――!？」

「先輩の性格はもう、完全に理解しました。あなたは――このような約束を絶対を守る真面目な人だってね？」

携帯電話を白衣のポケットの中に入れ、左横の壁に左手の掌を付ける少年。そして、少年は先と同様のAraiを唱えてみせる。

「Teml^{テムル}」

その瞬間、コンクリートの壁が溶け出し、その溶け出したコンクリートは何本もの刃の形へと変化する。そして、その何本ものコンクリートの刃は敬治目掛けて、宙を走った。

「――ッ!？」

少年の魔術に対して、Araiを唱える準備をしていなかった敬治はその刃を避ける事しかできない。だが、全ての刃を避けられるほどの運動神経を敬治は持ち合わせてはいなかった。

右腕と左足のふくらはぎを掠^{かす}る刃に歯を食いしばりながら、体勢を立て直すのと同時に少年は敬治の目の前にまで迫ってきており、敬治目掛けて左手を振るおうとしている瞬間だった。

「Denthur^{デンサー}!」

Araiを唱えた敬治は大量の電撃と光と轟音に包まれ、少年を後方へと吹き飛ばした。

地面に何度も身体を叩きつけながら転がる少年が止まると同時に、敬治の周りの電撃も止む。

コンクリートの地面に寝そべったまま、動く事のない少年を見つめ、唾をぐくりと呑み込む敬治。すると、少年は両腕の力で起き上がった、白衣についた汚れを払う。少年は何箇所かの掠り傷を負っただけで、命に別状は無かった。

「……所詮、先輩の決意はこんな和紙のように薄っぺらい決意だっ

たんですよ。正義・真面目ぶったって、現実はこのまんです」

(……俺の決意はこのまんだったのか……?)

自分に問いかける敬治だが、返答は無い。

「どうしたんです？ 今度は現実逃避ですか？ ほら！ 見てくださいよ、僕の傷。あなたの魔術で傷つきました。どうしてくれるんですか？」

敬治を嘲笑うように言葉を紡いでいく少年は溜息を吐いて、敬治を挑発する。

「それか、こんな中途半端な傷をつけないで、もっと思いっきり電撃の魔術を使ってみたらどうです？ きっと、重みが無くなって、スッキリするんじゃないですか？」

尚も、黙ったまま動かない敬治の後ろの光景はオレンジ色から青へと染まりつつあった。

「このまま、何もする気が無いんなら、身体はどこかを溶かして差上げますよ」

にやりと口元を歪めた少年は敬治の方へと然程、速くも無い速度で走り出す。

(……当てなければ……当てなければいいんだ!!)

自分にそう言い聞かせながら、右手を突き出す敬治はAraiを唱える。

「Ri c e l e c t c h o s k」
リセレクト チョスク

敬治の突き出した右手から放出される電撃。そして、その瞬間に少年も左手を突き出してAraiを唱えた。

「L i s i o u d o n s t」
リシヨウドウンスト

電撃は蛇行しながら突き進んで行き、敬治の方へと走る少年の左手にぶつかった。「しまった」と言うような顔をする敬治に対して、少年はにやりと笑みを浮かべ、少年の左手にぶつかった電撃は“溶け出した”。

「……………ッ!？」

(溶けた……………!?)

自らの目を大きく見開く敬治の表情など、気にする事無く、そのまま走り続ける少年は敬治の目の前に来るのと同時にその身を屈め、地面に左手を着けた。

「Boss et o m l t ボスエトムルト w a s m p ワズムト」

その瞬間、敬治の立っていた地面のコンクリートが溶け出し、敬治を足から段々と飲み込んでいく。

「これに飲み込まれたら、息ができずに気絶するでしょう。それか、僕が助けるのが間に合わず、死にますね。」

僕を攻撃して尚且つ、敗北を認めるんなら、解いてあげてもいいですが？ まあ、足を切断して逃げるのも手ですね。どうします？」

（魔術は人を傷つける事もできる……魔術は人を助ける事だってできる……でも、俺は王水の魔術師を傷つけて、誰かを助ける事になるのか……？）

問いに答えるものはおらず、敬治は段々とその身を地面に沈めていく。

（違う……俺の目的は何だよ……谷崎先輩に直接理由を聞けるかもしれないチャンスを踏みにじりにするのか……？）

敬治の揺らいでいた眼差しが、一点に集中する。

「あの人は大切な事を教えてくれたんだ……——D e n t h u r ! デンサー」

A r a i を唱えた瞬間に光と電撃に包まれる敬治は痛みを堪えるように歯を食いしぼる。

「僕の魔術で溶け出したコンクリートはどろどろの水も同然。それなのに自分に大量の電撃を食らわせて……本当に哀れですね」

「……自分から情報口にしてんじゃん」

にやりと敬治は笑みを浮かべて見せ、より一層、自らの電撃を激しくさせた。するとその瞬間、溶け出していたコンクリートが粉状に固まっていき、空气中に飛散する。

敬治の身を包んでいた電撃は止み、敬治は粉の中から足を出して、少年の前に立った。

「お前の魔術はもう、理解できた。これからが、俺の反撃だ」

α—XV. 魔術ではない

地面にできた大きなクレーターのような穴に佇む敬治^{けいじ}を王水の魔術師の少年はただ、呆然と見つめる。そして、敬治の発言を嘲笑う。

「僕の魔術を理解した」？ 何言ってるんですか、先輩？

……いや。本当は僕の動揺を誘う為に嘘を吐いたんですね？ でも、残念でしたね。もう、僕に気づかれてしまった」

少年は堂々と両手を広げて、笑う。その姿は自らの意見に絶対的な自信を持っている者の姿であった。しかし、その姿も敬治の一言によって崩される事となる。

「……お前、さっき自分で『俺の性格が真面目』って言ってたけど、その中に『嘘を吐かない』ってのは含まれなかったんだな。お前の重要視する情報って奴も底が知れてる」

「フン……一度、僕の魔術から“偶然”抜け出せたからっていい気にならないでくださいよ。僕にはまだ、とっておきの魔術が残っているんですから」

にやりと笑みを浮かべる少年の表情を見て、敬治は笑う。

「ハハハッ……そのとっておきの魔術って言うのは、どうせ左右の壁を溶かして……いや、“分解”して俺を潰す魔術だろ？ そして、その壁を防いだ隙に俺を攻撃する気？」

「——！？ ……嘘を吐いていたわけではなかったようですね。僕のどんな行動で気が付きました？」

「お前が左手で電撃を溶かした時に分かった。その時は俺も電撃を溶かしたと思ったんだけど……実際には砕け散って、水に流れ込んだって感じってのが分かったから、お前が分解して、空気中の水分と分解した物質を混ぜる奴だっというのが理解できた。だから、電撃の熱で水を蒸発させれば、ただの粉だろ？」

敬治のその答えはあながち間違っただけではなかったのだが、一つ足りない部分があった。

（別に教えなくても……いいよね？）

と自分自身に尋ねかける王水の魔術師である少年は自らが重要視している情報を提供しても尚、にやりとその口元を歪めている。

「一つ。僕は先輩に忠告しといてあげるよ。今、この状況で電撃の魔術は使わないほうがいい」

「……勝てないと分かった途端に、はったりか？」

「いえ。ただ、電撃の魔術をこんな状況で使ってしまうと、先輩諸共死んでしまうことになりますよ？」

その少年の言葉に敬治は訝しげな表情を浮かべると同時に、自らの周りに漂っているものから理解に辿り着いた。

「“粉塵爆発”……だけど、コンクリートは可燃性の粉塵じゃない」
敬治の口にした粉塵爆発とは大気中に一定の量、浮遊した粉塵に引火して爆発を起こすものである。そして、その粉塵は敬治の言ったとおり、可燃性のもの。しかし――

「でも、先輩。コンクリートなんて言うのは殆どが鉄筋を軸にする鉄筋コンクリートが一般的。そして、粉塵爆発は金属の粉が酸化する事によっても起こりうる。

賭けをしてみてもいいですよ？ 金属の粉が少なければ、爆発はしないだろうしね。だけれど、この粉が晴れるの待つ掛けにはならないことをお勧めしますよ。今日は全く風の無い状況ですから、粉が晴れるのには時間が掛かるはず。花粉症の人は喜びそうですけど」
先程から、にやりと少年が口元を歪め続けていた理由がそれであった。敬治に釘を刺す事により、少年は、自分は魔術が使え、敬治が魔術の使えない状況を作り出し、この状況は彼の言葉通り、情報の点を結んでできたものだった。

「さて。下手に先輩の口にした大技を使ったら、煙が晴れちゃうからね。また、コンクリートの沼攻めというかな？ でも、コンクリートの刃で攻めるのもいいなあ」

楽しそうに敬治への攻め方を考える少年に対して、敬治はこの状況を打破する方法を必死に考えていた。

（粉塵が充満している此処じゃ、魔術は使えない……なら、この場所から離れれば、問題ないんじゃないか？ ルールにも対戦場所から離れちゃいけないなんて、一言も書かれていなかったし……けど……）

目の前の充満している粉塵の奥に佇んでいる少年を見る敬治。そう。粉塵によって視界が悪くとも、少年の姿は見え、少年からは敬治の姿が見える。つまりは、少年に見つからずにこの粉塵の中から抜けることは不可能。

そして、敬治は少年の攻撃により右腕と左足に掠り傷を負っているため、粉塵の中から抜ける場合には障害となり得る。だが、そんな事を構っている暇など、敬治は持ち合わせてなどいなかった。

（今は、この粉塵の中から抜けることだけを考えろ！）

そう、自分に言い聞かせる敬治は少年に背を向け、粉塵の中から逃げ出すべく、地面を勢いよく蹴り上げた。

「無駄な抵抗を……^{テムル}Teml！」

左手をコンクリートの地面に着いて、少年が^{アライ}Araiを唱えた瞬間に先と同様のコンクリートの刃が何本も形成され、敬治の足下、目掛けて発射される。

（くそ……追いつかれる……!?!?）

後ろを気にしながら走る敬治の足下に迫るコンクリートの刃。遥かに敬治の走る速度よりも速い刃は敬治の右足へと襲いかかろうとした。その瞬間に敬治は空中へと飛んで、刃を回避したが、着地の際にバランスを崩した敬治は地面を転がり、粉塵の中から抜けた数メートル先でその動きを止めた。

そして、敬治はすぐさま血の付いた右腕を粉塵の方向へと向けて、^{ライヤレクティクト}Araiを唱える。

「^{ライヤレクティクト}Riyelectict！」

右手の掌から放たれる電撃は蛇行しながら粉塵の方へと向かい、粉塵と触れ合ったところで小規模ではあったが、激しい爆発を起こし、少年を炎の渦の中へと巻き込んだ。

轟音と爆発の衝撃から後方へと吹き飛ばされそうになる体をうつ伏せになって、飛ばされないようにする敬治。

（やったか……？）

……いや、違う……今からやりに行くんだ！

煙が蔓延しているところへとうつ伏せの体を起こして、飛び込む敬治。その先には魔術で作り上げた壁によって、自らの身を守っていた少年の姿があった。

「デンサーDenthur」

身体から大量の電撃と光を発する敬治は右手に電撃の刃を形成し、少年を守っているコンクリートの壁を壊し、少年の首元に電撃の刃の切っ先を突きつけた。

「……僕の負けです……」

お尻を地面に着け、それと同時に両手も地面に着けて、膝を立てた姿勢の少年はそう呟いた。しかし、少年のその言動に少し納得のいかない敬治は尋ねかける。

「いいのか……？」

「なんでそんな顔をするのです？ 本当に頭の良い人は成功より失敗する確率のほうが高いので、何もしないんです。僕はそんな頭の良い人と同じような行動を取ったまでですよ」

そう答える少年の言葉を聞いた後、敬治は右手に持った電撃の刃を空中に飛散させた。少年は敬治の手を借りながらゆっくりと立ち上がって、大きく伸びをしてみせる。

「えっと……まず、この服の有様はどうすればいいのかな……？」

少年の魔術、地面に叩きつけられた事によって所々、破れたりしている学ランを眺めながら、敬治は溜息を吐いてみせる。

（これはひどい……母さんに怒られる……）

自らの母親の起こっている姿を思い浮かべる敬治の背に悪寒が走る。

そんな敬治を安心させるように少年は口を開いた。

「多分、もうすぐ魔術委員会の車が来るんじゃないですかね？ さ

っきの爆発で誰一人として此処に集まっていないわけですから、魔術委員の誰かが結界を張っていた筈ですよ。ほら」

そう言って後ろを向くように促した少年に従って、敬治は後ろを振り返る。すると、そこには一台の白いワゴン車と、一人の男が立っていた。

そして、いつの間にか空はオレンジが消え失せ、青から闇に侵食されつつあった。



未だ、空がオレンジ色の時刻。

彼女は学校の帰り道で敬治と同じ内容のメールを受け、その次に届いたメールで指定された場所へと向かう。そして、十分後に着いたその場所は敬治と少年が戦ったような路地裏で、人気の全く無いところであった。

そこには既に一人の制服を来た人物が立っており、彼女は恐る恐る足を進め、一定の距離を保ったところでその足を止めた。

そんな二人の様子をビルの屋上から一人の人物が監視していた。

「お前が“具現”の魔術師か？」

彼女へと問いかける男に対して、彼女――桐島雪乃はゆっくりと頷いてみせる。

「へへ……あの具現の魔術師って、どんな奴が来るのかと思えば、普通に可愛い女子高生じゃん。ラッキー！」

「じゃあ、あなたが硝子の魔術師なの……？」

「そういうこと。じゃあ、お互いの称号も知ったんだし、始めてもいいかな？」

硝子の魔術師と名乗った男は雪乃を目前にして、大きく手を広げてみせる。すると、屋上で二人の様子を窺っていた男は携帯電話を取り出して、魔術委員会へと電話を掛けた。

「今から、桐島の妹と硝子の試合が始まります。未だ、接触はあり

ません」

『了解した。引き続き、桐島の妹が不審な行動をしないか、様子を窺え』

「了解」

そうして、男は携帯電話を閉じて、引き続き屋上から下にいる二人の様子を窺う。だが、次の瞬間、男は自らの腹に何か鋭いものが突き刺さったような痛みを感じ、人の肌に鋭いものが突き刺さるような鈍い音も同時に聞いた。

恐る恐る自らの腹の方へと目を向ける男。すると、その腹からは一本の長い刃が刺さっていた。

口から大量の血を吐き出す男は自分を刺してきた人物を確かめるために、後ろへと振り返る。そこには敬治と同じ制服、東坂高校の学ランを来た人物が刀を握って、立っていた。

「お、お前……A級……犯罪者の……!?!」

「残念だな。お前程度の魔術師の結界では、俺の進入は防げなかった」

そう言って男に突き刺した刀を抜き取った東坂高校の男子生徒は雪乃を見張っていた魔術委員の男を屋上から雪乃たちのいる、下の地面に蹴り落とした。

男は東坂高校の魔術部を尾行し、誰かと電話を交わしていた男であり、体育館での柵木たなきの攻撃から逃げた男子生徒であった。

「この刀。もう、要らん。元はと言えば、お前のものだろう？ 刺した途端に俺に持たせて……」

屋上に男子生徒以外の誰もいないのにも拘らず、恰あたかも誰かがいるような口調で話し出す男子生徒は血の付いた刀を後ろへと放り投げ、屋上から飛び降りた。

すると、その放り投げられた刀は地面には落ちる事無く、宙に浮かび続け、次の瞬間に刀は消え去った。



上から腹を刃物で刺された人が落ちてきた事によって、硝子の魔術師と雪乃は茫然と立ち尽くしていた。

(この人……死んでる……?)

地面に落ちたうつ伏せの姿勢のまま動かない男の体からはどこからともなく、血液が地面に広がっていく。そして、ビルの壁に黒い刃を突き刺して、速度を抑えながら、地上へと降り立った人物に雪乃は自らの目を大きく見開かせた。

「誰……? それにその黒い刀みたいな奴……それって、普通の物体じゃない……? 魔術?」

淡々と自らが思ったことを口にしていく硝子の魔術師には目もくれずに東坂高校の制服を着た男子生徒は雪乃へと歩み寄る。

「見張り役は殺した。そいつは多分、この試合の監視役も勤めていた。これで、俺がこいつを殺せば、お前は失格となる」

「何……? 俺を殺す……?」

男子生徒の言葉に疑問を口にする硝子の魔術師に対して、雪乃は息を呑む。そして、自らの視界の中に入った硝子の魔術師に対して、言葉を発した。

「お願い、逃げて! 早く!」

「遅い」

そう言って、後ろを振り返る男子生徒は右手を硝子の魔術師に向けて翳^{かざ}す。その瞬間、硝子の魔術師も自らの足を使って、結界を描いた。

すると、硝子の魔術師の五メートル先の地面から、黒く鋭く細いものが飛び出し、硝子の魔術師へと襲い掛かった。

しかし、黒く細長いものは硝子の魔術師の身体を貫く事無く、硝子の魔術師の半径一メートルのところで見えない壁に遮られた。そして、その見えない壁——結界もガラスが割れるような音を立てて、飛散した。

「硝子の魔術師……そうか、お前は“魔術委員会会長と同じ絶対防

御結界”を使えるのか？」

絶対防御結界とは十五、十四陣結界の呼称である。そして、硝子の魔術師が展開した結界も十四陣結界であった。だが、魔術委員会の会長が展開する十四陣結界とは天と地ほどの差があった。

「お前も……Araiを唱えずに俺の結界を一回で壊すなんて……お前のそれ。“魔術じゃない”だろ？」

その言葉を聞いて、ピクリと眉を動かす男子生徒は硝子の魔術師に右手を翳したまま、告げる。

「そう気付いた時点で、お前の命は既に無い」

「機密事項って事かよ！ Sundob of a cserad
ラベック サンドウブ オブ ア クセレッド

硝子の魔術師は結界のAraiを発すると同時に足でも結界の陣を描く。しかし、それを見ても男子生徒は何も動じる事無く、右手を翳す。

するとその瞬間、硝子の魔術師の五メートル先の地面から何本もの黒く細長い飛び出し、硝子の魔術師の方へと襲い掛かった。

「この結界なら、破られな——」

硝子の魔術師が言葉を止めるのと同時に自らの目の前に存在していた結界はガラスが割れる音と共に空中に飛散した。

（そんな……！？俺の結界が——！？）

「うわああああああああ——！！！」

硝子の魔術師が叫んだ瞬間に何十本もの黒く細長いものは硝子の魔術師を無残にも貫いた。そして、その黒く細長いものが消えるのと同時に硝子の魔術師の体は血を噴出すだけの人形と化していた。

その姿を見て、雪乃は頭を糸で吊られていた人形の糸が切れたようにその場に座り込む。そんな雪乃の方へともう、学校には通ってはいない男子生徒は振り返る。

「谷崎様からお前に命令だ」

「谷崎」と言う単語を聞いた瞬間に雪乃は硝子の魔術師から男子生徒へと視線を移す。

「もう一度、キューブを奪いに行く。今度は俺も一緒に、だ。このトーナメントが終わった後、すぐに決行する。だから、今日、失格にならなくても、お前は選抜の十人にはなるな。そして————お前の手で降雷の魔術師を殺せ」

α—XVI. 紅炎の魔術師

「ちょっと……それって……？」

「言葉通りだ。このトーナメントが終わったら、速やかに降雷の魔術師である斉藤敬治を殺せ」

目の前に存在する男子生徒を大きく目を見開いて、見つめる雪乃^{ゆきの}の顔は段々と血色を失くしていく。

「で、できないよ！ わたしには……できない……」

「谷崎様に逆らうのか？」

その単語を聞いた瞬間にまたもや、雪乃は反応を見せた。そして、雪乃はその単語によって折られてしまう。

「……分かり、ました……」

その返事を聞いた男子生徒は誰かを探すように辺りを見回しながら、告げる。

「おい。この二つの死体を隠せ。俺の魔術では灰にできん」

『へっへっへっ……さっきからオイラの扱い方が酷いんじゃないかい？』

何も無い、誰もいないところから聞こえてくる声に雪乃は動揺するが、男子生徒は当たり前のように淡々と会話する。

「つべこべ言わずに働いてくれないか？」

『はいはい』

見えない何者かがそう返事をしたその瞬間に地面に血だらけで倒れた二人の死体が独りでに動き出す。その一部始終を目の前で見ていた雪乃は恐怖を覚え、背筋に悪寒が走る。

そんな雪乃などを気遣う様子も無く、男子生徒は二人の死体が動いていく方向へと歩き出す。

「殺^やらなければ……分かっているな？」

そう雪乃に言い残して、男子生徒は去っていった。そして、路地裏の地面にはさっきまで在った二つの死体は無く、血痕、髪の毛の

一本すらありはしなかった。

何事も無かったかのように全ての証拠が消されていたのだった。

◇

「へっくしょい!! あー……」

白いワゴン車の中に用意されていた東坂高校の学ランとカッターシャツとズボンを着替えている最中にくしゃみをする敬治の怪我していた腕と足には包帯が巻かれていた。

その横で、白衣だけを着替えていた王水の魔術師の少年が敬治の体調を気遣う。

「風邪ですか? 早めに手を打っておいた方がいいですよ」

「いや。多分、俺の噂を誰かが……」

鼻を吸^する敬治に対して、少年は冷たい視線を三秒くらいの間、浴びせ、白衣を着終えた少年は白いワゴン車から外へと出る。

少し遅れて、敬治も白いワゴン車からその身を外へと投げ、その暗さに驚く。

「もう、こんな時間だったんだ……」

「ですね。そう言えば、本屋には漫画を買いに立ち寄ったのでは?

僕もまだ、買ってませんし、一緒に行きましょうよ」

少年の提案に頷く敬治は白いワゴン車に乗ってきた人物を見ながら、鞆を手に取り、この場を少年と去っていく。すると、少年は白いワゴン車の方へと視線を向けている敬治の制服の裾をクイッと掴んで自分の方へと視線を向けるようにする。

「あまり関わらない方がいいです。早く行きましょう」

そう言って、速い速度で歩き出す少年につられ、敬治の足も自然と速くなり、白いワゴン車が見えなくなったところで少年は安堵の息を吐いて、速度を緩めた。

「関わらない方がいいって、どういう事? あの人って魔術委員会の人間なんだから、別に警戒しなくてもいいんじゃないのか?」

「情報が無いと言うのは本当に怖いものです。けど、知らない方が良くと言う情報も時にはあります。今回ののはそれですから、理由は気にしないでください。ただ、魔術委員会を信用しない方が良くと言う事だけを僕の方からは伝えときますよ」

あからさまに何かの事実を隠す少年を訝しげな表情で見る敬治はふと、気付いて尋ねる。

「そう言えば、お前の名前、まだ、知らないんだけど？」

「そうでした。僕は西井譲にしいゆずるって言います。母が外国人、父が日本人の所謂、ハーフと言う奴です。東坂中に通う、“ごく普通”の中学二年生」

「ごく普通」を強調してみせる西井少年をスルーしながら、敬治は口を開く。

「東坂中ってすぐ、隣にある中学校か……って事は学校帰りに寄り道しようとしてたんかよ。禁止とかされてない？」

「禁止ですよ。でも、家に帰ってから買いに行くのって面倒じゃないですか」

西井の言う事に賛同できる敬治は彼に何も言う事ができない。

それでも、学校帰りの寄り道はいけない事だと伝えたい敬治は口を開こうとする。しかし、敬治の隣には西井の姿は無く、敬治が後ろを振り返ると、そこに西井の姿があった。いつの間にか、本屋へと向かう足を止めていたらしかった。

「……？　どうかしたのか？」

「いえ。あと少しで本屋に着いてしまいますから、その前に忠告を、と思ひまして。」

このトーナメントでは『魔術で人を傷つけない』なんていう信念を持ち込まないことです。その信念が悪いというわけではありません。僕は立派だと思えますよ。ですが、僕みたいな弱い相手ではなく、強い相手に当たった時、その信念は先輩自身を傷つけます。今度は掠り傷だけじゃ、済まされませんよ」

西井の真剣な眼差しとその言葉に敬治は唾をぐくりと呑みこみ、

学ランで隠れた右腕の包帯の巻かれた部分を左手で触った。

「電撃の魔術は最強と言っても過言ではないです。けど、それも使いようによってはただの魔術と同等の力しか持たないものになってしまいます。」

良く考えてください。その信念を持って大怪我するのが良いのか、信念を捨てて普段どおりの生活を送るのが良いのか」

敬治は西井の言葉に深く頷いた。その姿を見て、西井はにこりと微笑んで、敬治の元へと駆け寄りながら、ポケットから携帯電話を取り出す。

「メルアドと電話番号、交換しておきましょうよ。情報が欲しい時は学校のあっていない時間帯なら、いつでも、電話してきていいですよ?」

敬治も自らのポケットの中から携帯電話を取り出して、西井とメルアドレスと電話番号を交換した。そして、二人は本屋へと赴くべく、また、足を進め始めるのだった。



翌日

金曜日のこの日で今週の学校も終わりを告げる事となり、明日からはゴールデンウィーク。しかし、敬治にとってはそれは憂鬱でしかなかった。

(宿題いっぱいだし……勝手に決定戦始まるし……)

溜息を吐いてみせる敬治は机の上に頬をくっつけた。そうした瞬間に雪乃が教室へと入ってくるのを見た敬治は自分の席から立ち上がって、雪乃の方へと向かう。

「おはよ」

と言って右手を上げる敬治の顔を見た途端に雪乃はすぐさま、目を逸らして、小声で応えた。

「おはよう……」

「……？　なんか、元気ないけど、何かあったのか？」

その問いかけに首を振りながら、席について無理やり笑顔を作りながら、雪乃は敬治の顔を見る。

「何でもないよっ！　敬治くんこそ、どうかした？」

「いや。桐……雪乃も昨日、魔術委員会からメール来たのか？　対戦相手は？　勝敗は？」

小声で全てを一度に尋ねる敬治の質問に雪乃は一つずつ答えていく。

「メール来たよ。対戦相手は硝子しよしの魔術師で、負けちゃった……」

「俺はギリギリで勝って、怪我もしちゃったよ……」

と苦笑いする敬治に雪乃はただ、笑っているだけだった。雪乃の様子がさっきからおかしい事に敬治も気付いていたが、その後、少しの会話の後、自らの席へと戻っていった。

自分の席へと戻っていく敬治を見る事無く、黒板を見つめる雪乃の頭にあの男子生徒の言葉が過ぎる。

（敬治くんを……わたしの手で殺さなきゃ……）

自らの拳をギュッと握り締める雪乃は気を紛らすように鞆の中から勉強道具を取り出し、やらなくても良い問題を解き始めるのであった。



放課後

今日は用事があるという雪乃を置いて、二階にある魔術部部室へと赴いた敬治を迎えたのは魔術部部长である藤井の姿であった。

「敬治君！　なんか魔術委員会でトーナメントがあつてらしいけど、どーだったの！？　可愛い女の子と当たった！？」

入るなり、最新の話題に飛びついてきた部長に溜息を吐く敬治は

後ろを振り返って、再び魔術部部室のドアを開けようとする。

「ええ！！　なんで、出て行こうとしてんの、敬治君！！　俺のテンションについていけてなかったんなら、謝るから！！　ホント、土下座するから！！」

とその言葉通り、本当に土下座をしだす部長の姿を見て、敬治は部室にあるパイプ椅子へとその腰を下ろした。

「それで……大丈夫だった？　トーナメント？」

「勝ちましたけど、怪我しました。

……副部長はどこなんですか？　部室に来たときにはいつもいたのに……」

「清二君は日直だから、遅れてるだけだよ。それよりも！　ゴールデンウィークはどうしようか！　皆で旅行に行ってもいいよね！　合宿って言っとけば生徒会が経費出してくれるだろうし、お金の心配はしなくていいよ！　それで行き先なんだけど――」

と自分勝手に話を進めていく部長の話は今の敬治の耳には届いていなかった。

（そう言えば、魔術部ってあと一人いるんだよね……まあ、その人の気持ちも分からなくもない……ただ、遊んでるだけの部活じゃ、来る気にもなれないよなあ……）

部長の顔をまじまじと見つめて、溜息を吐く敬治は部長に残り一人の部員について尋ねてみる事にする。

「あの……あと一人の部員の人っていつ部活しに来るんですかね……？」

「久美ちゃん？　さあ……って言うか清二君によるとこの頃、学校に来てないって言うし、引きこもっちゃってるんじゃないかな？」

あと、お父さんが行方知れずだとかも言ってたなあ……そう言えば、久美ちゃんが魔術使ってるって……見たこと……無い……？」

その事実で驚く部長は、頭の中から記憶を探り出すように顎に手を当てて、思案に耽^{ふけ}っているようだった。

そのまま、敬治は何もする事無く、家に帰宅し、土曜日と日曜日

の二日間の休日^{スマートフォン}を堪能した。そして、月曜日の昼。敬治の魔術委員専用の携帯電話^{スマートフォン}に一通のメールが届いた。



四月三十日 月曜日

称号十人選抜決定戦——第二回戦——

対戦相手…紅炎^{こうえん}の魔術師

対戦場所…福岡県————

敬治はその対戦相手の称号を見て、目を見開く。

（紅炎の魔術師……噂で聞いたことがある。めっちゃくちゃ、手強い相手……そして——）

敬治は自らの携帯電話を右手に持って、電話帳を開き、西井と書かれた人物へと電話を掛ける。

『もしもし？ 対戦相手、決まりました？』

「ああ。紅炎の魔術師っていう奴^{やつ}なだけどさ。情報くれないかな？」

そう言って、西井の回答を待つ敬治はこの沈黙の時間を情報を調べている時間だと勘違いしていた。そして、二十秒程の時を要して、西井は口を開く。

『先輩……紅炎の魔術師とは、戦わないでください！ 彼と戦えば、一生、不自由な生活を強いられる事態になるかもしれない……』

自分の魔術の招待がバレても冷静だった西井が「紅炎」と言う単語を聞いた瞬間から動揺を隠せないでいた。

「そんなに、強い相手ってことか？」

『はい。彼の魔術はその名の通り、太陽の紅炎^{プロミネンス}に匹敵します……』

「炎の魔術って事だな。分かった」

『ホントに分か—————』

プツンと一方的に電話を切った敬治はその携帯電話をギュツと握り締める。

（そして――裏で魔術を使って、人を傷つけてる奴！）

敬治は服を着替えて、メールに記された住所を眺めながら、外に出て行った。



対戦場所は一回戦が行われた場所ではなく、昼間なのにも拘らず、かかわ人氣が全く無い小さな公園であった。

そこに一人ポツンと立ち尽くしている人物を見た敬治は自らの足を速める。

その人物は音楽機器を片手に、耳にイヤホンを付けて音楽を聴いている。身長は一七九センチと敬治よりも高く、年齢も敬治よりも上のものであった。前髪が目を覆い隠すように伸びており、その姿は桐島尚紀を彷彿させるものだった。

自分の目の前に立った敬治に気付いたその人物はイヤホンを外し、音楽機器をポケットの中へとしまいながら、二つのものをポケットの中から取り出す。一つは携帯電話であった。

「じゃあ、ルールに則って殺しちゃいけないって事だから、救急車呼んどいてやるよ。感謝しな」

そう言って、淡々と携帯電話のボタンを押して、本当に救急車を呼んだその人物は携帯電話を閉じると同時にその口元を歪め、携帯電話をしまい、ポケットから取り出したもう一つの物――分厚い手袋を自らの両手にはめる。

「俺が紅炎の魔術師だ」

「その手袋……証拠隠滅か何か？」

「ああ？ この手袋はただの自己防衛だ。この手袋してねえと、自分の魔術で大火傷しちゃうからよ。それで早く称号名乗って始めねえか？ 救急車来ちまうよ」

「……俺が——降雷の魔術師だ」

その瞬間、紅炎の魔術師は手袋をした両手を敬治の方へと突き出して、^{アライ}Araiを唱えた。

^{クレモンピンネ}「Cremopine」

その刹那——敬治にAraiを唱える隙など与えない程の速さで、敬治の身は激しい炎に包まれた。

男性――かしわばたくろう 柏原哲郎は今年で三十路なのにも拘らず、未だに独身である事から、親には「早く結婚しろ」などと言われて、今を一生懸命に生きていた。

彼が働いている場所は一流とまではいかないが、一応、世間には名の通った会社で彼自身も自分の役職に満足していた。

――そう思っていた。

七年間、就いてきた職業。休日以外、一日も休む事無く、働き続けてきた職業。おかげで通帳の桁は満たされていくが、その心は満たされてはいかない。

子供の頃に自分にたくさん夢があった事を彼は覚えている。しかし、大人になるにつれて不可能な事の方が多い事を知り、自らの天井が見えた彼に夢は消え失せた。

そんな哲郎は今、会社を終え、帰路に着く途中であり、満員電車に乗らなければならないという事実が彼の歩幅を狭くしていく。そして、そんな哲郎の足を止めるように彼の背中に悪寒が走った。

後ろを振り返る哲郎の後ろにはただ、急に立ち止まって後ろを振り返った彼の事を不審な目で見て、通り過ぎる人々の姿しかない。

(なんだ……？ この幽霊でもいるかのような悪寒は後ろからじゃないのか……？)

そう思った哲郎は前へと向き直り、足を進めようとした瞬間にその場のある異変に気付いた。

広い道なのにも拘らず、人々は建物と建物の間へと繋がる道を選けるように進んでいた。

(なんで……この道の前だけ……？ 何かあるのか……？)

そう思った哲郎はその道を立ち止まって覗き見る。すると、その暗闇から一人の人物がのそと歩いてくるのが哲郎の目に見えた。誰が近づいてくるのかと、身構える哲郎の期待を裏切るようにそ

の姿が制服を着た女子だという事が分かる。しかし、期待を裏切られたと思った哲郎の少し安堵したような表情が、その制服の女子の姿を見て、驚愕の表情へと変貌を遂げる。

「ち……血だらけじゃないか！」

そう言って、制服姿の女子のいる道の方へと足を踏み入れた瞬間に彼に激しい頭痛と吐き気が襲い掛かる。すると、哲郎は口元を右手で押さえながら、四つん這いに倒れこんだ。

（やばい……ホント、吐く……）

そんな三十路のおじさんの姿を目の前で見ていた血だらけの制服の女子はかかとを地面につけたまま、お尻を地面につけないよう、しゃがみこむ。

「血だらけって私のこと？　これ、血じゃないよ。ケチャップだよ」
「……えっ？」

吐き気が少し引いて来た哲郎であったが、その一言を聞いて、俯けていた顔を上げて、呆然と彼女の方を見た。すると、彼女から微かにケチャップの匂いが漂っている事を嗅覚を通じて感じ取った哲郎は少し、ほっとする。

「なんで……身体にケチャップ被ってるの……？」
「えーと……」

その理由を考えているように顎に手を当てる彼女は考えついたように、口を開いた。

「実は私、ケチャラーというものなんです」

「それ、今考えたでしょ」

「ギクッ」と言う効果音が出るくらいに驚いてみせる彼女は、哲郎から目を逸らしながら言う。

「う、嘘ではないよ。と言うか、おじさんはなんでこの空間に入ってくるの？　ここは私の私有地だよ？」

「私有地？」

辺りを見回す哲郎の目に映るのは二つの建物の壁の間の風景しかなく、そこに彼女の私有地と言えるものは無く、哲郎は訝しげな表

情で彼女へと視線を戻す。

「どこに君の私有地が？」

「ここ」

そう言って、ただ、哲郎を見つめ続ける彼女の周りを見る哲郎だが、私有地と言うものは建物以外、見つからない。

「この建物の事？」

「違うよ。この道が私の私有地。結界張ってるから、魔術師が解かない限り、誰も入れないはずなんだけど……おじさんって魔術師なの？」

（魔術師……？　　）
と言うか、なんで、ずっとこの姿勢なんだ、僕は

ずっと、四つん這いの姿勢を保っていた自分に気が付いて、地面に置いた鞆を持って立ち上がる哲郎に倣^{なら}って、彼女も立ち上がってみせる。

「えーと……魔術って僕が高校生くらいの頃に流行り始めたあれの事？　一度もやった事、無いけど……？」

それより、ここに住んでるって事なの？　家出中？」

「じゃあ、なんでここに入れたんだろう……」

私、家出中なんかじゃないよ。福岡からお父さんを探して、一人でここまで来たの。だから、住む場所無いから、ここに住んでる」

「福岡から一人で！？」　それに加えて、ここに住んでるの！？」
じゃあ、その制服についたケチャップどーすんの！」

思案するような素振りを見せる彼女は五秒くらい経ってから、口を開く。

「このまま」

「いやいや。そのままだったら、染み付いて落ちなくなるよ」

その事実を聞いて、驚いたような表情を浮かべる彼女は再度、思案に入り、二十秒ほどの時が経ってから、告げる。

「じゃあ、おじさんのとこに住まわせて？」

「……はい？」

予想もしていなかった言葉に首を傾げる哲郎に対して、彼女は真剣な眼差しで言葉を紡ぐ。

「結界張ってたところに入れたのも気になる。だから……おじさんが私のお父さんって事で」

「ちよっと、待ってくれ！　こんな見ず知らずの女の子を僕の家に入れるなんて、できるわけ無いだろう！？　それに僕はまだ、独り身なんだよ！」

「だったら、お父さんは私をここに見捨てて、自分だけ家に帰るって事？」

輝かしい眼差しを哲郎に向けて訴える彼女に哲郎は自らの意志を折るしかなかった。

（それにしても、お父さんって……）

「はぁー」と溜息を吐いてみせる哲郎は彼女に尋ねかける。

「それで、名前は？」

「山田愛沙。^{あいさ}おじさんは？」

「……さっきから『おじさん、おじさん』って……言っとくけど、僕、まだ三十になったばかりだからね！？」

柏原哲郎。電車乗って僕の家行くよ。早くしないと、制服の汚れが落ちない」

と歩き出す哲郎についていく愛沙であったが、哲郎が不意にその足を止めた事によって、哲郎の背中に鼻を激突させる。

「痛いー！」と手で鼻を押さえる愛沙の方へと振り返る哲郎は尋ねかける。

「君……もしかして、荷物はそれだけ？」

愛沙が持っている学校指定の鞆を見る哲郎に対して、愛沙は淡々と頷く。

「着替えは？　ご飯は？」

「この制服だけだよ。ご飯はお金で買おうと思って、塩とこしょうとマヨネーズとケチャップくらいしか持って来てない。そして、ケ

チャップは先程、ご愁傷様に……」

「それで、お金は何円持ってきてるの？」

「福沢諭吉に十のマイナス四乗を掛けたのが数枚……」

変な表現の仕方になし、考える哲郎はその答えが分かり、溜息を吐く。

「つまりは一円が数枚なんだな……」

「そーゆーこと」

「……お金は僕が持つから、まずは服を買わないと、制服洗濯している間、着る物が無いしね……」

その一言に目を輝かせる愛沙は哲郎に向けて、尋ねかける。

「高級な服を買ってくれるの!？」

「ジャージで十分」

そう言つて、足を動かし始める哲郎に頬を膨らませながらついていく愛沙。そんな自分の姿を客観的に考えてみる哲郎は自分の事を“お人好し”と表現するしかない。

(そう言えば、高校の頃はこれのお人好しのせいで彼女にふられたんだっけ?)

学ばない自分に少し、厭あきれながらも、その足を動かすのを止めず、後ろにちゃんと愛沙がついてきているのを確認しながら、服の売っている店へと辿り着いた。

店に入ると同時に「いらっしやいませ」と言う店員の声が聞こえ、哲郎は店員の方を見るが、その顔は微笑んでいるだけであった。一応、哲郎は自らの後ろにいる愛沙の姿を確認してみる。愛沙の制服は相変わらず、ケチャップ塗れであった。

不審に思う哲郎は愛沙に向けて店内を歩きながら尋ねかける。

「全然、ケチャップに対して店員の反応が無いんだけど、仕事だから……?」

「違うよ。私が結界張ってるだけ。だから、哲郎は今、透明人間と話してる事になってる」

「そうなのか……」と哲郎がジャージを探し始めるのに氣を向け

ようにすると同時に愛沙は呟く。

「嘘。あの人たちにとってはどうでもいい事だから、反応なんてしないんだよ」

と言う先の発言を否定する言葉を言われ、「紛らわしいなあ」と思いながら、ジャージを見つけ、買ってから満員電車に乗って、自らの家へと辿り着いた。

「こ、これは……!?!」

「このマンションの一角を借りてる。家賃はまあまあ安い」

七階建てのマンションを仰ぎ見る愛沙はその中へと入っていく哲郎についていく。

「もう、哲郎が本当のお父さんでも良いような気が……」

「そう言えば、お父さんを探して東京まで来たんだっけ? お父さんの情報はあるの?」

エレベーターの上へ行くボタンを押す哲郎の質問に愛沙は答える。「東京にいるとだけしか聞いてない。そして、お母さんに私が東京にいる事は伝えてない」

「え!?! 早く伝えないと警察に通報とかしてたら、僕が誘拐したって疑われるかも……?」

エレベーターの前で立ち止まっている愛沙を横目で見る哲郎。愛沙のその表情はにやりとした笑みを浮かべていた。

「まさか、確信犯!?!」

「お母さんは私が六歳の頃にご愁傷様です。何を被害妄想してるの、お父さん?」

(この子……黒い!!!)

「フフフツ」と笑う愛沙の表情を見て、哲郎が反論すると同時に目の前のエレベーターの扉が開いた。

「そして、僕は君のお父さんじゃない!!!」

エレベーターの中に入って六階のボタンを押す哲郎に愛沙は上機嫌でついていく。そして、六階に辿り着いたエレベーターから降り、左に曲がったところにある『六〇四号室』のドアへと持っている鍵

を差し込んで回す哲郎。

すると、愛沙は哲郎を押し回すように玄関へと入って行き、「
おおー！」と歓声を上げた。

「手洗って、バスルームでジャージに着替えて。制服はそのまま洗濯機の上に」

「分かったー」

と言って、靴を脱いで洗面所へと行き、手を洗い始める愛沙に対して、哲郎はリビングへと赴き、スーツのジャケットを脱いで、ハンガーに掛け、そのままソファに腰を下ろす。

（2LDKだから、一つの部屋はあの子に使わせるとして、寝る場所……このソファにでも寝てもらおうかな……）

「何を考えているんだろう」と溜息を吐く哲郎に合わせて、ジャージへと着替えてきた愛沙が登場し、ソファへと座る愛沙と同時に哲郎はソファから立ち上がる。

「テレビ見よー」

とりモコンを取って、目の前に存在するテレビをつける愛沙。その姿を確認してから哲郎は洗面所へと赴き、手洗いうがいを済ませて、自分もジャージに着替えてから、洗濯機の前に無造作に置かれた制服尾を見つめる。

（ケチャップ汚いなあ……これは落ちんだろう）

ティッシュなどで拭き取りもしなかった制服に付いたケチャップをティッシュで取り、ポケットに何か入っていないか確認する哲郎すると、その手はポケットの中にある何かに触れる。

（なんだ……？ 生徒手帳？）

ポケットの中から取り出した手帳には生命の樹が描かれていた。そう。その手帳は紛れも無く、魔術委員である証であった。

そんな事なんて知らない哲郎は気にする事無く、愛沙の制服を洗濯機の中へと突っ込んで、洗濯機を回した。

「おい。こんなものがポケットの中に入ってたけど、ちゃんと出してないと駄目だろ？」

とりビングに戻って、その手帳を愛沙へと渡す自分をまたもや、哲郎は客観的に考えてしまう。

(……僕はどこぞのお母さんか!)

手帳を手取る愛沙は哲郎の姿を見る事無く、テレビを見続けている。そして、哲郎はリビング横のキッチンへと足を踏み入れ、冷蔵庫の中の物と睨めっこする。

「何か嫌いな食べ物でもある?」

愛沙へと尋ねかける哲郎に対して、愛沙はテレビを見たまま、首を横に振ってみせる。

「食べられないものが嫌い」

(要するに食べられれば何でも良いってわけか……)

にやりと笑みを浮かべる哲郎はペットボトルに入った水を冷蔵庫の中から取り出して、その扉を閉め、やかんの中に水を入れていく。そして、やかんをクッキングヒーターの上に乗せて、熱しながら棚からあるものを取り出した。



「はい。出来上がり!」

そう言って、キッチン横のダイニングにある机に出来上がった料理をのせる哲郎を見ながら、愛沙は眉をひそめる。

「出来上がりも何も、これは三分待てばいいだけの手抜き……」

「食べられるなら何でもいって解釈をさせるような答え方をしたのは君だよ。一人分の食材しかないし、今日はこれで我慢してくれ」椅子へと座る愛沙は頬を膨らませた表情のまま、椅子に腰をかけて、カップ麺の蓋を開けて、箸を取った。そして、少しその表情を引き締めながら、哲郎に尋ねかける。

「じゃあ、いくつか質問したいんだけどいい?」

哲郎は麺を啜りながら首を縦に振った。

β―ⅠⅠ. 魔力

「まず、なんで私の私有地に入れたの？」

「私有地って……普通の道だったけど、変な感じはしたよ。背筋を誰かになぞられるみたい……」

「うーん」と難しい表情をする愛沙^{あいさ}を見るのをやめて、カップ麺の中にある麺を箸で挟んで口まで持っていく作業を続行する哲郎^{たけろう}。

「まず、根本的にお父さんはおかしい」

「だから、お父さんじゃないって……年齢的にも無理があるよ」

「言われてみれば……私は今年、十七で哲郎は三十……『十四歳の母』を考えれば、まだいける！」

何の解決にもならない言葉をスルーする哲郎は、同時に名前を呼び捨てしていると言う事もスルーしていた。

「と言うか、そんな話じゃなくて、魔術師じゃないのに哲郎は本当におかしいんだって！」

カップ麺を啜っていた哲郎に対して、愛沙は目の前の机を叩いて、哲郎の視線を自分の方へと向ける。

「結果は普通、認識できないもの。つまりは、『そこに道がある』って哲郎が気づいた時点で結果の意味を果たしていない事になる！」

（僕が変だって言いたいのか？ この子は）
持っていた箸の手を止める哲郎は愛沙へと尋ねかける。

「けど、君の話し方だと、魔術師はその結果の存在に気付く事ができる。そう考えると、僕も魔術師と同じ何かを持っているんじゃないか？」

変な間を置いて、思索する愛沙は、

「良い質問だねー。私はその質問を待っていたのだよー」

と、いかにもそんな事に考えが及ばなかったような棒読みの返答を哲郎へとよこした。そして、何か考え始める愛沙を見て、再度、箸を動かし始める哲郎。

「そうかー……そう言う事だったのかー」
独りでに納得したように頷く愛沙は哲郎の様子を見て、自らもラーメンを食べる事に勤しんだ。



カップ麺を食べ終わり、キッチンで片づけを始める哲郎がダイニングへと戻ってくるのを座って待つ愛沙。

そんな愛沙を見ながら、哲郎はコーヒーを淹れ始め、五分後に愛沙の目の前へと舞い戻った。

「遅い！」

そう言いながらも、目の前に置かれたコーヒーに砂糖を何杯も加えた後にミルクを入れて、おいしそうに飲み始める愛沙だった。

「では、哲郎が何故、結界に気付く事ができたのか。その理由を發表します！」

「その前に、そもそも結界って何なの？ 人を寄せつけないってのは君の発言で察しがつくけど……」

出鼻を挫かれた愛沙は自らの頬を膨らませながら、説明し始める。
「結界って言うのはその察しのとおり、人を寄せつけないものって分かっておけばいいよ。あとはその結界が、円で構成されていて、円の数によって結界の強さが決まるって事ぐらいかな？」

「ふーん」と聞き流す哲郎。そして、愛沙は本題である哲郎が何故、結界の存在に気付けたのか。その理由を話し始めた。

「それで、哲郎が気付けた理由なんだけど……哲郎は“魔力”を持ってるから、気付けたんだよ！」

「……はあ？ 魔力？」

訝しげな表情を浮かべる哲郎はその単語を繰り返した。

「そう。ゲームで言うところのMP。それは誰しもが持つてる代物で、人によってその量も異なるの。タクローは魔力の量が普通の人よりかも格段に多かったから、結界を認識できたんだよ！」

淡々と魔力が存在するかのよう語りだす彼女の話に哲郎はついていけない。

「ちょっと待って！ 魔力って……そんなの存在するのか？」

「存在するんだよっ！ けど、普通の人は魔力をほんのちょびいーっとしか持たなくて、使われたりはしない。そして、魔術が使える人でも同じ事が言える」

少し、自らの頭が混乱してきている哲郎は頭の中を整理しようと思案に走る。

（魔術が使える人も魔力が少ない……？ じゃあ——）

「——どんな時に、魔力を消費する……？」

「魔法を使うとき」

その一言によって哲郎の頭の中は洗濯機に入れられたようにかき回された。

「……魔法と魔術って違うの？」

「全然、違うよ。まず、魔術は有から有。在るものから生み出すけど、魔法は無から有。無いものから生み出す。つまり、魔法は錬金術の等価交換の原則を逸脱してるのと一緒に」

某錬金術師のネタを持ち込んだ愛沙であったが、哲郎は読んだ事も見た事も無かった為、いまいち理解できない。なので、哲郎は再度、愛沙へと説明を求めた。

「もうちょっと、分かりやすい説明してくれるかな？」

「……魔術って言うのは火を点けたりする事。火って言うのはライターでだって点けられるでしょ。だから、科学力でも補えるのが魔術って言う事なんだよ。対して、魔法って言うのは人を空に浮かせたりする事」

何となくその違いについて理解できてきた哲郎の様子を見ながら、愛沙は淡々と説明を続ける。

「そんな魔法を使う時に魔力は消費される。そして、その魔力のせいでタクローは私と出会ってしまった」

（『せいで』って自分が迷惑な存在だって、僕に思われていると思

ってるのか……)

哲郎のその目に映るのは財力も何も持ち合わせていない独りの女の子であり、哲郎にはその姿が少し、寂しさを感じさせるように思えた。

すると、そこで哲郎の頭にある疑問が浮上する。

「そう言えば、何歳なの……？ 高校生？」

「高校二年生。そして、早くお風呂を沸かして貰えるとありがたい」

「あっ、ああ……」

愛沙にそう言われて立ち上がる哲郎は風呂場へと向かい、風呂を沸かす準備を終えるのと同時にリビングへと舞い戻ると、ダイニングの机からリビングのソファへと移動して、テレビを見ている愛沙の姿があった。

「……まだ、話は終わってないような気がするんだけど……？」

「終わったよ」

「いや、君の探してるお父さんの話とか……」

「……えっ？ 私のお父さんはタクローでしょ？」

その一言を聞いて、溜息を吐きながら頭を掻く哲郎は、「もう何も聞くまい」とお風呂の為のタオルなどの準備などの準備などに取り掛かった。そして、その準備が終わるのと同時にお風呂が沸き、鼻歌を交えながら、風呂場へと向かおうとする愛沙は哲郎の前で立ち止まって、呟く。

「覗いたら、私を誘拐した事にして警察に……」

「はいはい。分かってる！ そんな危ない橋には渡らないよ」

「でも、渡らないって言うのもちょっと不自然。私みたいな美人で可愛い女の子の裸を見たくないなんて……哲郎はもしかして、こっちの方？」

右手の甲を左頬へと持っていく愛沙に対して、哲郎は激しく否定。

「そっちじゃないし！ 君は自分を過大評価しすぎだよ！」

そのツツコミに「フフフ」と微笑んで、洗面所の隣にある風呂場へと向かって歩き、洗面所前の扉を閉じた。

「完全に彼女に遊ばれてるような気がする……」と呟きながら、リビングのソファに腰を下ろす哲郎は天井を見上げてみる。

（普通人より多い魔力……そんな事言われても、普通の会社員の僕には関係の無いものなんだよ。「もっと他に、人に自慢できるような能力を人より優れていたかったよ……」なんて思ってる自分が嫌になってくるなあ……）

額に右腕を乗せて自嘲的な笑みを浮かべる哲郎。

（今の僕は、天井と身長が同じになってしまった……二十代の頃はまだ、少しだけ余裕があったのに、こんなにも三十と二十の境界は残酷で……）

その先を考えようとした瞬間に携帯電話のバイブ音が響き渡り、哲郎は自らの体を起こして、ソファから立ち上がり、ダイニングの机に置かれていた自らの携帯電話を手にとって、開いた。

（非通知……）

携帯電話の画面を見て、そう心中で呟いた哲郎は通話開始ボタン——オフフックボタンを親指で押し、携帯電話を耳に当てる。

「もしもし？」

『其方ハ柏原哲郎サまでゴザイマスカ？』

「はい。そうですが……」

返答してきたその声は哲郎の聞き覚えの無い、女性の高い声であった。そして、一瞬、「ジリジリ」という耳障りなノイズが走る。

「どちら様ですか？」

『名乗ル程の者でハゴザイマセン』

言葉の発音の仕方を不審に思う哲郎に対して、そんな時間も与えまいと相手は言葉を紡ぐ。

『ただ、明日、あなた様にハ来て欲しい所があるのです』

「いたずら電話なら、切らせていただきますよ」

そう言って、通話終了ボタン——オンフックボタンを押そうとした時、その単語が呟かれた。

『山田愛沙。彼女がどうナってモいいのですか？』

「――ッ!？」

その目を大きく見開いて、携帯電話を耳元へと戻す哲郎は尋ねる。
「どういう事ですか……？」

『言葉通りノ意味合いです。今かうわたクしが指定する所ニ明日の
二十三時五十九分五十九秒までに来られなければ、彼女は死ニます』
ごくりと自分にも聞こえる音で唾を呑みこんでみせる哲郎は戸の
閉じられた洗面所の方を見る。

(関わったからには無関心ではいられるはずがない……)

「どこに行けばいいんですか……？」

『〇〇〇ビルです。あな様はこノ場所をヨク知ってイるでしヨウ
?』

電話の相手が指定した場所は東京の都心から離れたところにある
廃ビルであり、哲郎はそのビルの事を電話の相手が言ったのは異
なり、名前を知っているくらいで場所までは知らなかった。

(僕が良く知っている……? どう言う事だ……?)

記憶の隅々を探すが、そんな場所に心当たりは無かった。その無
言からよく知らない事を察したのか、電話の相手は口を開く。

『訪れなきゃと、思イ出すでシよう。でハ』

一方的に切られた電話に哲郎はダイニングの机の横で携帯電話の
画面を見ながら立ち尽くした。電話の相手が告げた廃ビルの名前を
もう一度、心当たりが無いから自らの記憶に向かって問いただが、
答えは返ってこない。

(訪れたら、思イ出す……なら、僕が一度行った事のある場所には
違いないんだろうけど……)

思いつくそうとすればするほど、思いつけなくなるような気がして
哲郎は諦め、携帯電話をダイニングの机の上に置いた。



次の日

六時半に目を覚ました哲郎が部屋を出て、リビングへと踏み入れるのと同時にソファに寝ている愛沙の姿が目映った。

（まだ、寝かせといてやるか……）

と思いながら、洗面所へと行って顔を洗い、キッチンへと戻ってきた哲郎は食パンをトースターの中へと入れて、フライパンで目玉焼きを作り始める。そして、作り終えてダイニングの机へと並べると同時にソファの上で毛布に包くるまった愛沙を起こした。

目をしばしばさせながらダイニングの机に腰を下ろして、目の前に置かれたトーストの上に乗った目玉焼きを見る愛沙。すると、その瞬間に彼女は「あ」と言う声を上げて、顔を上げ、哲郎の方へと視線を移す。

「魔力は魔術にも使われるって言うの忘れてたね」

「……？　でも、昨日は魔法を使う際に魔力を消費するって……」

戸惑う哲郎に対して、愛沙はトーストを口に頬張りながら話す。「そうだよ。でも、魔術と魔法が曖昧なものもある。その場合にも魔力を使うと言うわけ。具体的に言うと、電撃の魔術とかその部類に当たる。電撃なんていうのは空气中に存在してるわけじゃない。だから、電撃の魔術を使える人って言うのは魔力を持っている人に限られてくるし、その中でも才能がある人と才能のない人に分かれるから、電撃の魔術を使う人は少ない」

電撃の魔術なんて興味の無い哲郎は「へー」と受け流しながら、トーストを口の中へと入れる。そして、ふと疑問に思ったことを口にしてみた。

「魔術師って一人一人、火とか水とか使う魔術の性質が違ったりするの？」

「良いところついてる。人によって得意な魔術が違うから必然的に、人によって使う魔術も異なるようになる。でも、魔術って言うのは大きく分けて五つの性質しか持っていない。火、水、風、雷、土」

（五行思想と似てる……まあ、関係ないんだろうけど）

トーストを食べ終わる哲郎はコーヒーを飲んで、自らの皿とカップを下げ、愛沙が食べ終わってから、食器の後片付けへと突入する。その後、洗面所へと行き、歯磨き。その後、トイレへと駆け込んでからスーツに着替えるといういつものどおりの行動をする。

（それにしても、今日行かなきゃいけないんだよねえ……）

横目で洗面所で歯磨きをしている愛沙を見ながら、溜息を吐く哲郎はテレビを点けて、今日の天気を再度、確認する。

（降水確率は十パーセント。折りたたみは鞆に入ってるし、それでいいかな）

テレビを消して、鞆を手にした哲郎は玄関へと向かうのと同時にあることを思い出して、リビングへと舞い戻る。

「どうしたタクロー？ 忘れ物か？」

「忘れ物といえば、忘れ物なんだけど……」

そう言いながら、何かを懸命に探す哲郎はそれを見つけると同時に「あった！」と叫びながら、愛沙の方へと近寄った。そして、その手に持った物を愛沙へと手渡す。それはこの家の鍵であった。

「外に出る時は必ず、鍵を閉めること！ いいね！」

「うん。そして、タクローは私を栄養失調で殺す気なんだね」

急にそんな事を言われても、何の事か分からない哲郎が考える事、十秒。やっと、その意味が分かり、自らのポケットから財布を取り出して、千円札を手渡した。

「野口秀雄かあ……どうせ千円札なら、夏目漱石か伊藤博文であつてほしいよね」

「生憎、僕には前のお札を取っておくなんて言う趣味は持ち合わせてないから！ じゃあ、よろしく」

そう言っ、哲郎は会社へと向かうべく、玄関の扉を開けて、その扉を鍵で施錠した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2993y/>

降雷の魔術師

2012年1月13日22時26分発行